

天保仇討無惨旅 （第2部）

鬼女登場

「名はお銀と申す。これからこの者に三人の世話をさせようと思う。」

玄齋が惣右衛門と篤馬に自分の妾を紹介した。

玄齋から話しに聞いていたお銀の容貌を見て二人は意外そうな表情を浮かべた。

狐の様に細く吊り上がった油断のならない目付き、頬骨の突き出した陰険そうな面相・・・
歳の頃なら三十を過ぎているであろう。

お世辞にも美人とは言えない年増女が思い切り厚く化粧を顔中に塗り込め逆に不気味な様相を呈していた。

今の玄齋の藩内での権力を以てすれば、如何なる若い美女でも愛妾に出来るであろうに、何も好きこのんでこの様な醜女を囲わなくても良いであろうと考えるのであった。

怪訝そうな表情を浮かべる二人を目にして玄齋が可笑しように笑い声を上げた。

「いかにもお銀はこの通り醜女じゃ・・・」

醜女と言われてお銀がプッと口を尖らせた。

「しかし、ここの具合が非常に良い・・・」

と言うと、突然お銀の着物の裾を掴んで思い切り上に捲り上げた。

股の付け根まで露わにされそうになって、悲鳴を上げて、慌てて両手で着物を押さえた。

一瞬篤馬と惣右衛門の目に意外と肉付きの良い白い大腿が映った。

「嫌ですよ、旦那！」

玄齋の突然の狼藉に怒った目を向けた。

玄齋はその様なお銀の抗議も気にならないように笑いながら、

「お銀のここの具合はピカ一じゃ！今まで儂も千人もの女とまぐわって来たが、これまで接した女の中でもお銀のここに匹敵する女はおらなんだ。」

着物の上からイヤらしい手付きで股の付け根辺りを撫で回しながら、

「・・・ただご覧の様にこの様なブ女じゃから、まぐ合う時には部屋を暗くして目を閉じて美女の顔を想像しながらやらなければならないのが欠点じゃがな・・・」と、高らかに笑い声を上げた。

玄齋から嘲笑されてお銀がプッと顔を背けた。

「所で私が世話をするのは此奴らですか？」

お銀が邪険な視線で檻の中の志乃や真之介や千鶴をジロッと一瞥して聞いた。

「そうじゃ。これからこの者達の食べ物を運んだり、放り出した糞や小便の始末をすれば良い。楽な仕事じゃろ？」

「まあ、犬や猫に餌をやったり、出したモンの後始末をする様なもんだす・・・元は高貴なお武家の若様と姫とは云え、今では内に飼われている動物やと思うて下さいまし・・・」

自分の役割を聞かされて鼻じらんだ表情を浮かべて、一つ溜息を吐いた。

檻の中で裸身の上に掛け布団でくるまって小さく身を丸める志乃達は、自分達をただの品物の様に見詰めるお銀の冷たい視線にゾッとするものを感じた。

「アンタ達も馬鹿だね。玄齋の旦那に挑もうとするなんてさ・・・旦那は化け物なのさ、並の人間じゃ敵いつこないだよ・・・」

玄齋のあらゆる面に於ける人間離れした凄さを近くで見ているお銀が醒めた声で呟く様に言った。

「それじゃ・・・早速仕事に掛からせて貰いましょうかね・・・」

と、檻の中の様子を見回すと板敷きの床に伸べられた敷き布団の傍らに置かれた漆塗りの不浄箱が未使用である事に気付いた。

「おやおや・・・お前達、未だ朝のモノを済ましていないじゃないか？寝てる間にオシッコが溜まって、お腹も苦しんじゃないかい？食べ物はこちらから持って来て上げるから先に澄ましちやいなよ・・・」

早くも残酷な本性を現わしたかの様に淫靡な笑みを浮かべると冷たい視線を檻の中の志乃達に向けた。

お銀に見透かされた様に三人は薄い布団にくるまっただけで、寝ている間に身体が冷えて尿意は堪えがたいほど込み上げていたのだった。ただ相互に丸見えの牢の中で排泄する羞恥のために我慢していたのであった。

「お武家の若様と姫君がどんな風にオシッコするのか見せておくれよ・・・」

玄齋達の笑いを誘う様に、まるで子供が駄々をこねる様に腰をモジつかせて鼻に掛った声を上げた。

三人は悪鬼達に交じって新たに現れた女の様子に緊張して、込み上げる尿意を忘れていたが、お銀の言葉で激しい排泄衝動が込み上げて来た。

三人が体内から襲い来る排泄欲求に腰をビクビク震わせている様子を目にして、嵩に懸かって声を荒げた。

「ほらほら、早くおやりよ！もう苦しくって我慢できないんだろう！」

お銀は傍らに置かれていた竹鞭を手にとると、うすら笑いを浮かべて、檻の格子の間から竹鞭を差し入れ、先端で布団の中に^{うずくま}る真之介の身体を^{つづ}突くのであった。

下賤な女に取って高貴な武士の若者をいたぶるのは面白くって仕方無いというように、まるで子供が玩具を相手にする様に竹鞭の先端で撞いたりピシャピシャと叩いたりした。

ねちっこいお銀のいたぶりに屈したのか、体内から込み上げる圧力に屈したのか、玄齋達から受けた度重なる暴虐の前に武士としての気概も喪失してしまっており、感情を失った青白い顔でフラフラと立ち上がると陰険なお銀に反抗する気力も湧かないのか黙って不浄箱に向かった。

「おやおや・・この坊ちゃん若いのに中々立派なモノを持っているじゃないか？」

お銀が興味深そうに真之介の股間のモノに目を遣った。

お銀の好奇な視線に残されていた羞恥心が蘇り慌てて股間を押さえた。

不浄箱を跨いで力無く立ちつくす真之介に、「何をやっているんだい！そのまま立って小便なんかしたら、飛沫で檻の中がビショビショになって仕舞うじゃないか？女のように座ってするんだよ！」と、大きな声を上げた。

お銀の激しい言葉に屈辱に眉を蹙めて啜り泣きながらそろそろと不浄箱の上に腰を降ろして行く真之介であった。

武士としての、そして男としての気概を失ってしまったのか、まるで女のように不浄箱の上に腰を割った真之介の惨めな姿に、

「アアッー！真之介だけに恥は搔かせません！志乃も恥を晒します！」と、叫ぶ様に声を上げると慌てて布団から這い出した志乃も不浄箱を跨いだ。

「アアッー！千鶴も恥を晒します！どうか千鶴の浅ましい姿をご覧になって、真之介様や志乃様の方は見ないで下さいまし！」

と、泣き叫ぶ様に言って不浄箱に跨った。

そして、次の瞬間、激しい水音を発して漆塗りの箱の中に放尿を始めた。

男達の隠微な視線を自分に呼び寄せ、真之介や志乃を護ろうとするかの様にこれ見よがしに大きく股間を開き激しい勢いで放水するのであった。

男達の熱い視線をまだ春草も生え揃わない秘裂の一点に受けてこみ上げる恥ずかしさに顔

を赤く染めて涙を流し始めた。

背中を震わせ嗚咽しながら排泄する千鶴の姿に真之介も志乃も放水を始めた。

「おやおや・・・三人揃ってション便を始めたよ！これも連れションと言うのかね？それにしても三人同時だと臭いもきついね！」と、腹を抱えて笑いながらほざいた。

「こちらの田舎娘は随分と派手に撒き散らすじゃないか！それにしても志乃殿のお淑やかな溢し方はどうだ！流石に武家と田舎者の育ちの違いだ！」

背中を小さく折り出来る限り股をすぼめて、男達の視線から避けようとしながら少しずつ排泄する志乃の姿をみて篤馬が笑い声を上げた。

男達の好奇の視線の前で放尿するのは耐え難い苦痛であったが、一度始まった放水は最早自分の力では止めることが出来なかった。それでも何とか下腹に力を込めて、不浄箱の底を叩く恥ずかしい音を立てない様にチョロチョロと溢し続けるのであった。

玄齋も溜まりに溜まった腹中のモノを何時までも放出し続ける美女と若侍の姿を淫靡な目で見詰め続けた。

男達のギラギラした視線に晒され、羞恥に頬を染め俯いた顔を左右に振り立て、嗚咽しながら放尿を続けていた。

「それにしてもお前達、随分と腹の中に溜め込んでいたものじゃないか！今にも溢れそうだよ！これじゃ片付けるのが大変じゃないか！」

と、不浄箱の中に溜まった湯気の立つような黄色い水を眺めて苦笑した。

長い羞恥の時間が過ぎ、肩を落としてすすり泣く志乃達に、

「ほら！これで濡れた股の間を拭くんだよ！」と、お銀が格子の間から何枚かの桜紙を投げ入れた。

志乃達の排泄と朝食が終わって、玄齋達も姿を消していた。

取り敢えず午前中の用事の終わったお銀は、手持ちぶさたげに自分のために入れたお茶を喫しながら升に入れた炒り豆を囓っていた。

豆を食べながら、こちらの方を怯えた顔で見詰める志乃達の視線に気付いて、うっすらと微笑を浮かべると、

「お前達、‘士農工商’と云う言葉は知っているよね？アンタ達みたいな侍が一番偉くて恵比寿屋みたいな商人が一番下って事さ・・・百姓は二番目に偉いて事になっているけど、本当は惨めなもんでさ・・・アンタ達みたいな侍から年貢は絞り取られるわ、恵比寿屋みたいな

悪どい商人から高い金で肥料を売りつけられるわでさ・・・だけど百姓はまだ良いんだよ・・・一応人間だからさ・・・士農工商の他に非人ってのが居るんだよ。最早人間じゃないって意味さ・・・」

身分制度の最上層に君臨していた志乃や真之介を恨みがましく睨み付けながら言葉を続けた。

「・・・非人にも穢多と河原者ってのが在ってね・・・穢多が間違えて人間様の住む町に足を踏み入れてご覧よ、たちまち石をぶつけられて追い出されてしまうよ。所が河原者には穢多と違って得な事が在ってね。人間じゃないって事は犬や猫と同じって事で、犬や猫が町屋や大名家でも飼われる様に、身分に関係なく会えるって事さ・・・百姓がお侍に会うなんて事は出来ないからね。・・・河原者だって食べなきゃ生きていけないからね・・・犬や猫が人間様から餌を貰って生きていく様に、人間様に可愛がって頂くためには芸を見せるのさ・・・まあ猿回しの猿が人間様の前で芸を演じてお足を貰うみたいなもんさ・・・私はこの河原者の出でさ、仲間には芝居小屋を開いて人気者になったのも居るよ・・・ところで、私がどんな芸を他人様の前に披露していたかと言うとね・・・」

お銀が何を言い出すのか一怯えた表情を浮かべる志乃と真之介の方を恨みがましい陰険な目で見つめると、

「ココだよ、ココ・・・女しか持ってない、この部分を使って芸を見せてきたのさ。」

と、言いながら着物の上から自分の股間をさすった。

「何だか私は、私にとって雲の上のような武家のお姫様にこの芸を教えたくって堪らなくなってきたんだよ・・・」

と、引き攣った貌を浮かべる志乃を淫靡な光りの宿る目で見詰めるのだった。

「これまで苦勞知らずに過ごして来た武家のお姫様が非人の恥かき芸を演じる時どんな気持ちになるかね？」

お銀の言葉に見る見る顔を青ざめさせていく志乃を睨み付ける様に怪しげな笑みを浮かべ、

「そっちの若様の方も心配し無くって良いよ。・・・私^{わたし}、後ろの穴でも前と同じように芸が出来るからね。しっかりと芸を仕込んでやるからね・・・」

と、ゾツとする様な笑みを浮かべて姉弟の顔を交互に眺め回した。

「良いかい？良く見ているんだよ・・・」

お銀はそう言うとき着物の裾をスルスルと捲り始めた。

次第に肉付きの良い白い太股が露わになり始めた。

真之介も志乃も気味悪そうに見つめた。

すっかり股の間まで露出するとたくし上げた着物の裾を帯の間に差し込み、豊かに丸みを帯びた尻まで丸出しにして、へっぴり腰の姿勢となり姉弟に向かって股を大きく開いて、股間の中央部を赤ら様に見せ付けた。

なんと其処には秘裂を飾るべき痴毛は無く、水から上げられたばかりの貝類にも似た女陰が生々しく剥き出しとなっていた。

その淫猥な佇まいに思わず姉弟は顔を背けた。

「何だよ？汚い物を見る様な目をしてさ！良く見ているんだよ！」

怒気を含んだ声で二人を睨み付けると、蹲踞の姿勢のまま片手を豆の入った升に伸ばし、ジャリッと一掴みの炒り豆を握り絞めると、山盛りとなった豆を掌に載せたまま、大きく開いた自分の股の中心にあてがった。

お銀の掌に隠され、その様子は見えないが何やら下腹がモソモソと蠢くのが判った。

暫くして、股間に押し当てていた掌を離れた時、掌の上に山盛り積み上げられていた炒り豆が姿を消していた。再び露わになった女陰は何も変わらない様子であった。

驚きを隠せない様子の姉弟の姿に満足した様にニコリと笑うと、

「さあ！良く見ているんだよ！」

と、一言言って両脚を大きく開いたまま、後ろ手に両手を床に付き身体を浮かせて股間を前に突き出すと、その瞬間プッと音を立てて陰孔から豆が一つ飛び出した！

お銀の秘孔から発射された大豆の粒は、一間（1.8メートル）ほど飛んで床に音を立てて落ち、そのままカラカラと転がった。

その信じられない光景に姉弟は目を瞠った。

姉弟の呆然とする姿に気を良くした様に、お銀は腰を左右に振りたてプッ、プッと右に左に次々と放出した。

「どうだい？面白いだろう？」

「昔は見せ物小屋の舞台でお囃子に併せて豆飛ばしをしたもんさ・・・」

お銀の頭の中では三味線や太鼓の賑やかなお囃子の音が聞こえるのか、お囃子の響きに調子を併せる様に軽快に腰を振りたて放出を続けた。

「小屋では客に的を持たせて的当てもやったもんさ・・・」と、股間に力を込めて強く噴き出した。

「お前達、面白い事をやっているじゃないか？」

前触れ無く、玄齋が篤馬と惣右衛門を伴って戻って来た。

始めてお銀の女陰を使った芸を目にする篤馬と惣右衛門は、目を見開いて浅ましくたくし上げた着物の奥に生々しく開いた陰部と周囲に撒き散らされた豆を見比べた。

「ああ、旦那。今此奴らに私の身に着けた珍芸を教えようと手本を見せてやっているところなんですよ・・・」

「何？志乃にお主の淫猥な芸を仕込ませるだと？それは面白い！」

高貴な武家の姫に最下層の女の恥かき芸を教え込もうという発想に玄齋は腹を抱えて笑った。

「ところでお銀、お主、生まれ付き其処に毛が無いのか？」

篤馬が、ガバッと大きく左右に広げたお銀の股間に痴毛が無い事に気付いて問うた。

「嫌ですよ！旦那！これは珍芸をする際に、お客さんの目にココの様子が良く見えるように始末しているんですよ！20年以上毎日毎日一本ずつ毛抜きで抜いている内にとうとう生えてこなくなったんです！」

「それは痛そうだな・・・」

篤馬が股間を開け広げて陰毛を抜く姿を想像して口にした。

「此奴らも芸を身に付けたら抜いてやろうと思っているんですよ！」

「それは益々面白い！」と、大声を上げた。

このやんごとなき姫が最後に残された下の毛まで奪い取られた時どんな羞恥を示すであろうかと考えると益々残酷な快感が込み上げるのであった。

「お銀！さつき、お主は的当ても出来ると申したの？それなら、これに当てて見よ・・・」

と、篤馬が懐から懐紙を取り出し、筆で中心に黒い丸印を描いた。

そして、即席の的をお銀の前に突き出した。

お銀の腰の動きがピタリと止まり、次に、的に狙いを定めるように僅かに陰孔を的の方に向けた。

篤馬の抱える的はお銀から半間（90センチ）ほど離れていたが、狙いを定めたお銀の股間から炒り豆がプッと発射された。

豆は狙いを過たず懐紙の中心に描かれた的に命中した。

その妙技に男達から歓声が上がった。

「この様な高貴な姫にそんな芸当が出来るものかの？」

玄齋が訊いた。

「そりゃ、どんな女でも死ぬ気になって練習すれば出来ない事はないでしょう・・・私も昔は、親方から酷い折檻を受け、全身傷だらけになりながら、泣いて身に着けたものですよ・・・」どの様に苦勞して淫猥な芸を仕込まされたか説明するお銀の話を耳にする内に、これから志乃達に加えられる調教がどんな過酷なものになるかと想像すると込み上げる残忍な思いに股間が硬くなって来るのを感じた。

「それじゃ其処の具合が使い物になるかならないか確かめたいんで、檻から出して下さいな。」

篤馬が、分かった一と、一言言うと志乃の閉じ込められている檻の前に立ち、ガチャガチャと鍵を開けた。

牢の中では志乃が恐怖に目を剥きガタガタと震えていた。

「ああー、志乃様！」千鶴が檻の格子を握り絞め不安そうな声を上げた。

「さあ、出るんだ！」と、牢の中にずかずかと入って来た篤馬は、怯えて牢の隅に後退りし、糞虫のように掛け布団にくるまり、恐怖に震える志乃の身体に手を掛け、固く身に纏っていた布団を力尽くで剥ぎ取った。

「アアーッ！嫌で御座います！お許し下さい！」

先程目の前で見せられた淫猥な芸を仕込まれるのかと思うと、恐慌にかられて篤馬に掴まれた手を振り解き、必死に抵抗するのであった。

「千鶴が代わりに受けます！どうか志乃様をお許し下さい！」

格子を握り絞めたまま千鶴が泣き叫ぶ様に声を上げた。

「お前にしてやりたいのは山々やけど、志乃様との約束でそれは出来んのや！」

「どうで御座る？志乃殿が嫌と言うのであれば、身代わりに千鶴を立てても宜しいで御座るが・・・」

懊悩する志乃の目を見詰めながら、口元に薄笑いを浮かべて言った。

このままでは幼い千鶴の操をこの残忍な男達の手から守るためにして来た努力が無駄になると知った志乃は、

「判りました、志乃をお好きなようになさって下さいませ・・・」

そっと目を閉じて、そう小さく口にした。

綴じ合わせた脇の隙間から涙がこぼれ落ち頬をつたった。

「先ほどのように死に物狂いで暴れられると面倒で御座るから、その手を縛らせて貰おう・・・」

篤馬が惣右衛門より手渡された麻縄を扱きながら志乃に近づいた。

後ろ手に縛り上げるため、両手を背中の方に捻られても、最早抵抗する事もせず大人しく縄掛けされて行く志乃であった。

たわわに成熟した柔らかな乳房の上と下にも何本もの麻縄が巻きつけられ、魅惑的な乳房これ見よがしに前方に突き出す様に搾り上げた。

上半身を厳しく縄掛けされた志乃を牢の外に連れ出した。

これからこの身に受ける苦難に青ざめ全身を小さく震えさせていた。

続けて真之介の檻に入った。

すっかり大人しくなった真之介にも易々と縄掛けを済ますと、檻の外に連れ出し、二人の牢の間にある廊下に姉弟並べて立たせた。

上半身を厳しく縛められた全裸姿で並んで立つ姉弟の前に腰を下ろしたお銀は、二人の股間の様子をシゲシゲと見詰めた。

お銀の目の前にはこんもりと黒く艶のある春草を茂らせる白い柔らかな志乃の大腿と色白だが筋肉質の真之介の大腿があった。

二人を交互に見比べその部分の様子をじっくり観察した。

志乃の裸姿でもどこか気品を感じさせる股間の佇まいに鼻じらんだ様な表情を浮かべたお銀は、志乃の前にドカリと腰を下ろし、豊かな繁茂を掻き上げ、露出した亀裂に指を掛けて左右に押し広げようとした。

下賤な女の指を大切な部分に受けて、ヒィと小さく悲鳴を上げ、思わず腰を捻った。

そんな志乃の狼狽ぶりも気にすることなく、良く張った臀肉をピシャピシャと叩いて、

「ほら！もっと脚を開かないか！中が良く見えないだろう！」と、声を掛けるのだった。

千鶴にこの様な惨めな様子を味会わせたく無いと心に誓い、怖ず怖ずと股間を開いて行くのであった。

「ほら！中の様子が見えてきたよ！」

お銀が嬉しそうに柔らかな襞を押し開き大きな声を上げた。

そして、傍らに置かれたドロリとした催陰剤の混じった油を右手の中指に塗すと志乃の秘孔にズブズブと埋め込んで行った。

男の指のように太くてゴツゴツした指ではなかったが、突然の侵入を受けて、ああーっ！と

悲鳴を上げ腰を振った。

そんな志乃の狼狽ぶりも気にせず、指を根元まで埋込ませ、

「あんた、中々良いお道具をお持ちじゃないか・・・とても昨日今日新鉢を割られた娘とは思えないね・・・」

と、指先で志乃の内部をまさぐりながら呟く様に言った。

「ほら！啞え込んだ私の指を思い切り締めてご覧よ！」

巧みに内部をまさぐる巧妙なお銀の指の動きと催陰剤の効果が相まって電流が流れたようにジーンと頭が痺れた志乃は、何時しか押し入れられた指を締め付けていた。

「旦那！これは中々掘り出し物かも知れませんね！これなら私の珍芸も引き継げるかも知れませんよ！」

玄齋の方を振り向いて感激した様に声を上げた。

「うむ、そうであろう。」

昨日志乃のその部分を散々味わい、名器の片鱗を見た玄齋が大きく肯いた。

その後も、指を使って内部の探索を続けた後、鼻を割れ口に近付け臭いを嗅いだり、舌を延ばして漏出物を味わったりして、志乃の見せ物女郎としての素質を確認した。

下劣な女の指によって身体の内側をまさぐられたり、舌先を内部に差し込まれたりする羞恥と屈辱に悶え泣きし続けた。

「さて、こちらの若様の具合はどうかね？見せ物の男役の場合はお尻の穴を使って珍芸を披露するだけでなく、ここを大っきく膨らませて客の目の前で女役とまぐわうのも見せ物の一つだからね。」

緊張して萎縮した男のモノを陰毛の奥から引っ張り出して摘み上げた。

「やめろ、触るな！」

下賤な女に大事なモノを握られる気味の悪い感触にオロオロした声を上げた。

そんな真之介の狼狽ぶりも気にせずに、「コレが大っきい男役の方が客は喜ぶからね・・・アంతのはどうかね？」

と、両手で真之介の肉塊を掴むと優しく扱き始めた。

潤滑のための催陰剤入りの油を両手の掌に塗したお銀は、慣れた手付きで真之介のモノを撫で回し続けた。

柔らかな両^{てのひら}掌と10本の指を駆使したお銀の手技は巧妙で在り、以前に篤馬から手扱きさ

れて不覚にも精を漏らしてしまったことがあったが、力任せの手荒な手技と違って、慎之介にこれまで味わったことの無い不思議な刺激を与え続けていた。

その脳天に突き上げるような快美感を伴った鋭敏な感触にいつの間にかアッ、アアッと呻き声を上げて腰を悶えさせ始めた。

「どうじゃ？中々上手なものであろう、お銀の手コキは？」

お銀の巧妙な攻めの前に何時の間にか羞恥心も忘れ、眉根を蹙めて必死に込み上げる快美感と戦う真之介に玄齋が声を掛けた。

「ああ・・・真之介様・・・」檻の格子を握り絞めて、毒女の攻撃を必死に耐える真之介の姿をジッと見詰めながら千鶴が不安そうな声を出した。

「小屋に出ていた時も希望する客を舞台に上げて、手コキしてやったもんさ・・・私の手業の前に、みんな数秒と持たず果ててしまったよ！」

その頃の様子を思い出して笑い声を上げた。

「ほらほら、大っきくなってきたじゃないか・・・おやアンタまだ皮を被っているね。」

子供の様な陰茎を持つ真之介をからかうと、屈辱に咽び泣く真之介の表情を窺いながら、「いいさ、今、姐さんが優しく剥いて上げるからね・・・」

と、丁寧な手付きで包皮を剥がしにかかった。

包皮を剥がされ外気に触れた薄い粘膜に催陰剤が強く刺激して悶えさせた。

「ほらほら、こうして皮を剥けばりっぱな大人のチンポコを持っているじゃないか・・・それにこの大きさや雁の張った形だって充分見せ物小屋の男役が務められそうだよ・・・」

指先で優しく揉み上げながら、それを評価するように目を近付けてじっと見つめた。

鼻から漏れた吐息が向き上げられた亀頭を擦った。

「実の姉弟が舞台の上でくんずほぐれつの実演すれば客も喜びそうだな・・・」

篤馬がニヤニヤ笑って声を掛けた。

「ああ・・・真之介様・・・」

千鶴が瞼を硬く閉じて涙に咽びながら、恐ろしい現実を振り払う様に激しく首を振りたてた。

お銀の手技の前に今や熱を帯びて大きく鎌首を擡げていた真之介の筒口から突然ピュッと白い粘液が噴出した。

真之介の身体から放出された、熱い精液が激しくお銀の頬に打ち付けた。

「出す時は出すって、一言言わないと駄目じゃないか。」と、小言の様に言うと、頬を滴り流れる精液を指で掬い口に含んで、さも美味しそうに味わった。

「さてと、前の方は確かめたけど後ろの方はどうかね？」

並んで立ちつくす二人の背後に回ったお銀は、志乃の良く張った柔らかな尻たぶに両手を掛けると左右に押し開いた。

女の手で後ろの恥ずかしい所を検められる羞恥に身悶えた。

そんな志乃の様子を気にする素振りも見せず、お銀は押し広げた志乃の隠されていた部分に顔を押し当てるように近づけて検分した。

そして篤馬や玄齋から蹂躪された部分に指先を匍わせた。

まだ傷も癒えない穴の周りを撫でられ悲鳴を上げた。

「随分酷く傷付いているね・・・まあ旦那のあの大きなモノをいきなり突っ込まれたら裂けても仕方無いやね。これは傷が癒えるまで使い物にならないね・・・」

玄齋の性的嗜好を知悉するお銀は志乃の汚辱の穴の裂傷が玄齋との肛門性交に因る物だと理解して声を出した。

次に真之介の背後に回ったお銀は真之介の肛門も激しく傷付いている様子を見て、

「こちらの若様も随分傷付いているね！まったく旦那はケツメドが大好きで男も女もお構いなしだからね！」と、笑い声を上げた。

「それじゃ後ろの穴の調練は傷が癒えてからにするとして、お姫様には前の穴を使う練習。若様には男役としてまぐわう練習をしてもらおうかね・・・」

驚きと恐怖に身を固くする二人に意識を払う様子も無く、

「まずは一番簡単な卵産みの練習から入ろうかね・・・恵比寿屋の旦那、卵を茹でて持って来て下さいな！」

と、先程から二人の様子を憑かれた様に眺めていた惣右衛門の方を振り返って声を掛けた。お銀に命じられて惣右衛門は慌てて卵を取りに母屋の方に向かった。

暫くして、顔一面に淫靡な笑みを浮かべて惣右衛門がゆで卵を^{ざる}箆に山と積んで戻って来た。アチアチと声を出しながら男達は箆の回りに車座になって、まだ熱気のある茹で卵の殻を楽しそうにむき始めた。

白い艶やかな茹で卵が箆の上に山と積まれた。

「それじゃ、見本を見せて上げるから良く見て覚えるんだよ！」

と、志乃の方を見詰めて声を出した。

今二人はそれぞれの檻の格子に後ろ手を縛り付けられ、互いに向かい合うように立位で固定されていた。

お銀は身に着けていた衣類をさっさと脱ぎ、男達の目の前に全裸を晒した。

お銀の裸体を目にして、篤馬も惣右衛門もおやつと思った。

顔はどうしようも無い醜女であるが、年の割に全体に艶のある肌をしており、胸と尻は良く張っており、腰は適度にくびれ、全体に柔らかそうな線を描いているが、無駄肉の無い男好きのする身体をしている事に気付いた。

お銀は箆の中から卵を一つ手に取り、「おや、まだ随分と暖かいじゃないですか」と、独り言を言うと股を少し開いて陰裂に押し当てた。

見物客の劣情を誘うように尖った卵の先を亀裂に沿って上下させ、甘い吐息を吐きながら腰をクナクナと左右に振った。

痴毛を残らず剃り上げたお銀の淫裂はその様子を余すことなく男達の目に見せ付けた。

お銀の扇情的な艶技に思わず三人の男の目は一点に釘付けとなり生唾を飲み込む音が木霊した。

男達の淫らな視線をわざと焦らすように、お銀は甘えたように鼻を鳴らし腰を悶えさせながら、卵を秘裂に沿ってゆっくりを上下に動かし、ときおり秘孔に押し込む様な素振りを見せた。

何時の間にかお銀の秘裂から分泌された液により白い卵の表面はヌラヌラと光っていた。

散々男達を焦らし、興奮を掻き立てた挙げ句、お銀は柔らかく開いた女陰に卵をモソモソと押し込んだ。

卵を押さえていた手を退かすと、その跡に卵を半分内部に咥え込んだ秘孔が垣間見えた。

両手を頭の上に上げて組んだお銀は、卵を半分陰孔に咥えたまま、喘ぎ声の様な艶めかしい声を上げながら身体をナヨナヨとくねらせた。

まるで淫蕩な舞のように身体を蠢かせる間に、半分体内に埋め込まれた卵はスルスルと上昇を始め、ほとんど淫門内に姿を隠しそうになった。

今や僅かに白い端だけが鮭肉色の狭間の陰に僅かに顔を覗かせているだけであった。

所が、その小さく顔を出していた卵が逆にムクムクと大きく迫り出し、ほとんど最初の位置まで戻ったのを見て男達は驚きの声を上げた。

お銀は艶っぽい、喘ぐ様な声を上げて、腰を振り再び体内に卵を吸い上げ、ほとんど柔肉の中に埋没する寸前で再度肉洞の陰肉を駆使して卵を押し出した。

勿論男の劣情を掻き立てるための舞台の上での艶技ではあるが、甘い喘ぎ声を上げ、両手で
撓わな胸を揉み上げ、腰を妖艶に振りながら、男達の目の前で数度卵の出し入れを繰り返し
た。

その姿はお銀の秘裂に太い男のモノが出入りする姿を連想させ、男達は目を血走らせてお銀
の鮮烈な陰技を見詰めた。

男達の劣情を充分満足させた後、お銀はスーッと卵を体内に吸引し終えた。

跡には何事も無かったようにピタリと閉ざされた陰門が見えた。

その見事な艶技に男達は喝采を送った。

艶然と微笑んだお銀は色っぽい流し目を向けながら篤馬の手を掴み卵を一つ握らせた。

お銀の意図を察した篤馬が手にした卵をお銀の股間にあてがった。

お銀も腰を前に突き出し、篤馬の作業を手伝った。

お銀の秘孔の中心に卵が押し当てられた。

その瞬間お銀はすねたような甘い喘ぎ声を発して篤馬の劣情を擽った。

卵を通して篤馬の手にお銀の秘孔が柔らかく開いて行くのが伝わった。お銀の秘奥に半分ほ
ど埋込み手を離すと、篤馬の見守る目の前でスルスルと卵は体内に消えて行った。

まるで手品の様に目の前から跡形もなく消え去ったお銀の艶技に篤馬は目をしばたかせて
その部分を見詰めた。

次に、お銀は惣右衛門の手を握り卵を掴ませると、篤馬とは逆に惣右衛門の方に尻を向ける
姿勢を取った。

「恵比寿屋の旦那、今度はお銀のお尻に卵を食べさせて下さいな・・・」

上体をくの字に折り尻を惣右衛門の方に突き出したまま、後ろを振り返り、啞然とする惣右
衛門に色っぽい流し目を送りながら甘い声を上げた。

男の劣情を掻き上げるかのようにゆっくりと弧を描いて振り立てる目の前に突き出された
お銀の豊かな尻肉の間にうっすらと董色を浮かべた後口が、まるで餌を欲しがるひな鳥の様
にパクパクと開閉していた。

放射状の皺を寄せ、まるで菊の花の様な形をしたその部分が、まるで意志を持った別の生き
物の様に収縮と開孔を繰り返していた。

そのパツクリと開いた赤黒い内部を見せるその部分はまるで悪鬼の住みつく洞窟を連想さ
せた。

その不気味な魔窟を封印するように慌てて惣右衛門は手にしていた卵を押し込んだ。

卵は皺を伸ばした不浄のとば口から半分ほど顔を覗かせていた。

お銀は惣右衛門の目前で‘の’の字を描く様に悩ましく、その大きく張った尻を蠢かせ、甘い呻き声を上げた。

妖艶な陰技を見せ付ける間に卵はジワジワとその姿を消して行き、終には完全にお銀の腸内に完全に吸い上げられて仕舞った。

その跡には何事も無かった様にピタリと閉じ合わされた菊花が残っていた

お銀の演じる凄まじい陰技の前に男達は声も無く見詰めた。

血走った目で息を潜めてまじまじとその箇所を見詰める男達に満足したように、更に上体を深く折り曲げ尻を高く突き出すと、両手で尻タブを押し広げ其処の様子を示した。

充分に男達の熱い視線が受けた後、その部分が内側からもりもりと膨らみ始めた。

放射状に画かれていた皺が引き延ばされ、内側から大きく引き延ばされた排泄のための穴から白い表面がジワジワとせり上がって来た。

周囲の肉を引きずり出しながらゆで卵は見る見る白い大きな姿を現した。

自らの両手で大きく押し広げられた中心からまるで目玉の様に突き出した卵はあと少しで落下する所でぴたりと動きを止めた。

男達は目を見開き息を殺して視線を送った。

男達の目の前で、大きく迫り出していた卵は今度は逆にジワジワと体内に吸い込まれ始めた。

再び閉ざされた皺の中心に僅かに白い物が覗くまで体内に収めた。

男達の視線を受けながらお銀は腰を隠微に振り立て喘ぐような声を上げて何度も入れたり出したりを繰り返した。

お銀の超絶した陰技の前に篤馬も惣右衛門も股間を押さえた。

お銀は更に男達の手によって前に一つ後ろに一つの卵を埋め込まれ、都合、膣内に三個、腸内に二個の卵を含んでいた。

下腹に五個の茹で卵を呑み込んでもその様な素振りも見せず、艶然と腰を振りたて男達の間を歩き回った。

「舞台では、お囃子や口上に併せて、卵産みの珍芸を披露したものですよ・・・」

お銀の頭の中では賑やかなお囃子や口上が鳴り響くのか、それに調子を併せるかのように妖しく身体をくねらせ、舞台の上を舞うように男達の間を動き回り、自分の脱いだ赤い腰巻きを拡げて裸体の前でひらひらさせ、その陰からチラチラと乳房や股間を露出して男達の興奮

を盛り上げるのであった。

一通り裸踊りを演じた後、篤馬に空の策を持たせた。

そして両脚を上げ両手を頭の上に組むと篤馬に向かってグイッと下腹を突き出した。

慌てて篤馬は策を開いた股の間に差し入れた。

篤馬に策を持たせたままお銀は篤馬の目の前で舞うように妖しく腰をくねらせた。

目前で繰り広げられるその淫靡な腰の動きに魅せられ篤馬の視点がその一箇所に寄せられた。

篤馬の見守る前でその部分が内側から盛り上がり始め、静かにその扉を開くと、鮮烈な鮭肉色をした帳の奥から白い卵が姿を表し始めた。

勿論お銀の艶技ではあるが甘美な喘ぎ声の様な艶めかしい鼻に掛かった声を上げ、淫靡に腰をくねらせ、両手で胸を揉み上げ、篤馬の劣情を掻き揚げた。

生唾を飲み込み見詰める篤馬の目の前で、陰唇の柔褰に包み込まれた卵がその半身を外部にのぞかせた。

お銀の秘裂からまさに卵が産み落とされそうになって、篤馬は策を直下に差し入れた。

そんな篤馬の努力を嘲笑う様に、目の前でスルスルと卵は上昇を始め、再び胎内に吸い込まれ、跡には何事も無かったような無毛の陰部が残された。

啞然とする篤馬の目を艶然とした笑みを浮かべて見詰めたお銀は、再び妖しく鼻に掛かった喘ぎ声を上げながら、身体をくゆらし、卵を露出させ始めるのだった。

数度卵の出し入れを繰り返し、散々焦らした挙げ句、篤馬の差し出す策の中にポトリと卵を産み落とした。

篤馬は、まるで鳥の巣のように策の中に産み落とされた、膣内の露に濡れ胎内で暖められた湯気の立ちそうな白い塊をシゲシゲと見詰めていた。

お銀は篤馬の手から卵の入った策を奪い取ると玄齋に持たせた。

そして後ろ向きとなり、床に胡座をかく玄齋に向かってズイッと尻を突き出した。

玄齋の目の前に大きなお銀の尻が突き出され艶めかしい秘奥の匂いが伝わって来るかのようであった。

更にお銀は両手で自分の尻たぶを左右に押し広げたため、その間の佇まいが赤ら様に玄齋の目に映った。

再び妖艶な喘ぎ声を漏らし尻をクネクネと振りながら、尻を使った扇情的な舞を玄齋の目の前で披露した。

菊花の周りの柔らかい肉が内側からムクムクと盛り上がり始め、やがて中央の花弁を押し開いて菫色の花芯の奥に艶やかな白い表面が見え始めた。

玄齋の目の前で白い卵は次第にその姿を現し、腸内の薄い襞を抱き込んでその全体像を見せ始めていた。

色事に長けた玄齋はお銀の艶技に煽り立てられることは無く、淫猥な笑みを口元に浮かべ、見る見る迫り出してくる卵の先端に指を当てた。そして、力を入れて卵を腸内に押し返した。排出しようとする力に抗して、押し戻そうとする力を腸管の筋肉に受けて、お銀がウッとと言う声を上げた。

玄齋の力に根負けしたように卵は再びお銀の体内に戻って行った。

そして、再び卵を排出しようと下腹に力を込め、迫り出して行った時、又しても玄齋は腹の中に押し戻そうとするのであった。

腹の中から出そうとすれば、押し戻されを何度も繰り返えされ、流石のお銀も腸管を刺激され異様な気分になって来ていた。

額にビッシヨリ汗を浮かべ、悩ましげにフッと息を吐き、「旦那もう勘弁して下さいな・・・」と哀願するのであった。

「うむ、良かろう・・・」と、やっと排出を赦されたお銀は、まるで肛口を閉ざしていた便が流れ出た時の様な開放感を感じアアッと声を発すると、玄齋の持ち添える笹の中に卵を産み落とした。

ドカリと胡座をかいて座る玄齋の前に、全身汗塗れになり力無く崩れ落ちたお銀を「どうした？まだ卵は三つも残っているぞ。」と、尻を叩くのであった。

このような女肉を駆使した猥褻芸はお銀にとっても相当体力を消耗するものか、少しやつれた表情を浮かべながらも、玄齋に急き立てられ、次に惣右衛門に笹を渡し、鶏の鳴き真似をしながら腰を振って産道から卵を産み落とした。

目の前でお銀の扇情的な淫芸を見せられ、惣右衛門は興奮して顔を赤らめ早い息を吐いていた。

その様子に気付いたお銀が「恵比寿屋の旦那、随分と苦しそうですね？楽にして上げましょうか？」と言うと、惣右衛門の着物の裾を開き、褌を弛めると、股の部分から隆起した男根を掘り出した。

「まあ、こんなに腫れ上がって！これでは苦しいのも無理はありませんね・・・」

と、興奮で血走った惣右衛門の目を見ながら艶然と微笑み、剥き出しにされた肉塊に唇を寄

せた。

その荒淫にやつれた貌で滴るような笑みを浮かべたお銀の仕草にゾッとする様な色香を感じた。

「マア！嬉しいわ！お銀の珍芸を見てこんなに固く大きくしてくれて・・・」と、言うとき大きく口を開いて惣右衛門のモノを口内に咥え込んだ。

玄齋には及ばないにしても、女好きでこれまで多くの女と接して来た惣右衛門は、ちょっとやそこいらでは女の術中に嵌らない自信を持っていたが、お銀の絶妙な口技の前にたちまち煽り立てられるのを感じていた。

惣右衛門の股間に顔を埋め口で慰めながら、背後に位置する篤馬に策を持たせ、高く擡げた尻を妖しく蠢かせて卵の出し入れを始めた。

腹の中に前と後ろに一個ずつ残された卵を、時には前から押し出そうとして引っ込めたり、次に後ろから卵を押し出そうとして引っ込めたり、あるいは同時に卵を前後に動かしたりして篤馬を驚かせた。

上から出るか下から出るか予想を裏切って姿を見せ、又埋没する白い塊に驚嘆の声を上げた。突然惣右衛門がウッと呻いて激しく身体を痙攣させた。

お銀の口技の前に辛抱出来ず遂に崩壊した瞬間であった。

うち続く腰の痙攣に、咥えたままのお銀の口内にドクドクと精液を流し込む様が窺えた。お銀も喉を上下させて惣右衛門の放出した男の精を呑み下し続けた。

惣右衛門の決壊と併せるように篤馬の持ち添える策の中にポトリと二個の卵を同時に産み落とした。

「どうだい？面白かったかい？・・・今度はアンタがやるんだよ。」

一息吐いたお銀が、立ち上がって牢の格子に立位で縛り付けられた志乃の方に向かって言った。

女として到底耐える事の出来ない凄まじい艶技を見せ付けられ、顔面蒼白となり目を見開いてガタガタと身体を震わせる志乃に、唇の端から漏れた惣右衛門の滴を手で拭いながら近づいていた。

「ああー、出来ません！そんな恐ろしい事は出来ません！」

恐怖に激しく頭を振りながら拒絶の様を示した。

「何も最初から同じようにやれとは言っていないさ・・・最初はココに卵を含む練習から始めれ

ば良いのさ・・・」

と言って、お銀の手が志乃の股間に触れた時、まるで焼け火箸を押し付けられた様な悲鳴が上がった。

「ああ・・・志乃様・・・」檻の中で千鶴がオロオロとして声を上げた。

男達はニヤニヤと笑って残りの卵を箆に盛ってやって来た。

「こんなに身体が硬くなっていたら、入るモンも入らないからね・・・先ず身体を柔らかくして上げないとね・・・」と言うと、再び手に催陰剤の入った油を塗り始めた。

その恐ろしい準備を目にして、得体の知れない女から罵られるという恐怖を感じて、「アアッ！イヤ！お願いお許し下さい！」と涙を浮かべて哀願するのであった。

「何もそんなに怖がらなくても良いさ・・・これから楽しい事をしようってんだからね・・・」と油に塗れた両手で志乃の剥き出しの乳房を握り絞めた。

ヒィー！と、悲鳴を上げて身体を悶えさせた。

志乃の悲鳴を無視してお銀は油に塗れた手で優しく志乃の乳房を丹念に揉み立てた。

お銀の巧妙な手技とツルツルヌルヌルとする不思議な感触に何時しか志乃は身体の奥底から妖しい快美感の様なものを引き出されていくのを感じていた。

「どうだい？中々良いもんだろ？」

志乃が眉根を蹙め、妖しく息を吐き始めた事に気付いてニンマリと笑って問い掛けた。

お銀の掌の中で遊ばれる乳房の先が凝り始めたのに気付いた。

志乃の意志に反して女体を感じ始めている事を知覚したお銀は嵩に掛かった様に攻め手を強くした。

立位で繋がれた志乃の身体に自分の身体を預け、志乃の乳房に自分の乳房を重ねて身体を蠢かせ始めた。

柔らかな女の素肌を敏感な箇所を感じて驚いて悲鳴の様な声を発した。

「そんなに驚ろか無くっても良いさ・・・女同士のまぐ合いってのも楽しいもんだろ？私やね、昔、見せ物小屋で女同士のまぐ合いも演じて見せたもんさ、客は大喜びだったよ・・・お姐さんに任せて気楽な気持ちで居れば良いのさ・・・」

お銀は更に女の潤滑油を自分の乳房や腹に垂らすと油に濡れた身体を志乃に押し付けた。

薄い油脂の被膜を挟んで女同士の身体が擦れ合い、乳房と乳房を重ね、腹と腹を擦り付ける間に不可思議な快美感が沸き起こってくるのであった。

その間にも、油で塗れた両手の指を駆使して性感帯を刺激し続けた。

暖かく柔らかな女の肌を通して、一方的で攻撃的な男から受けた冷酷な仕打ちとは違う何か暖かく優しい気持ちが伝わって来て、何時しか桃源郷に彷徨い頭に霞が掛かったような気持ちになって来るのであった。

いつしか最初の緊張感が解け、自分が身体を動かすのに併せるように身体をうねらせ、ハッハッと短い声を発する様になって来た志乃の姿を見留めて、意識が希薄になって来た様に薄く目を閉じる志乃の顔をそっと両手で支え、その柔らかな唇に自分の唇を静かに重ねた。突然下賤な女に唇を重ねられ、自意識が戻った志乃はまるで汚物が唇に触れたように悲鳴を上げて顔を背けたが、お銀はニヤッと余裕の表情を浮かべて、更なる桃源郷に誘うようにクネクネと身体を蠢かすのであった。

お銀の手管に巻き上げられ意識が朦朧とする志乃の唇を何度も奪おうとした。

今や意識が完全に混濁した志乃は、お銀の甘美な攻撃に根負けしたように、お銀の押して出る唇に自らの唇を重ねてしまった。

お銀の口吻に対して志乃も強く唇を押し付けて出るものであった。

お銀の接吻に対して熱のこもった口付けを返す、志乃の突然の行動に男達だけでなく真之介や千鶴も目を瞠って注視した。

そして、見てはならないものを見てしまったという様に頬を赤く染め固く目を閉じて顔を背けた。

心の奥底では穢らわしい毒女と嫌っているのに、燃え上がってしまった肉体は心を裏切りもっともっと強くーと、言うように相手の唇を貪り、舌を伸ばして相手の舌と絡め合わすのだった。

互いの裸身を密着させ、熱い口接を交わす最上位の身分に君臨する美女と最下層の醜女の濡れ場を男達は固唾を飲んで見守った。

互いに相手の口を吸い合い、クネクネと裸身を押し付け合いしながら、お銀は下腹を押して出し、無毛の丘を志乃の艶々した春草が繁茂する丘に擦り付けた。

お銀のスベスベした秘丘がソコを撫でる度に、志乃は子宮が疼く様な鋭い感覚を持ち、思わずウッ！と呻き声を発し、ビクッと身体を硬くした。

そんな志乃の反応に満足した様に、志乃の耳に口を寄せると、

「アンタは自分ではまだ気付いてないだろうけどアンタには生まれ付き淫蕩な血が流れているのさ・・本当はこんな事をするのが大好きなのさ・・」と、恐ろしい言葉を吹き込み続けた。

そのお銀の言葉に懊悩する意識の中で、「アア・・・違います・・・」と苦しい息遣いで辛そうに眉根を寄せながら答えるのであった。

「違うさ、私は長年の経験で判るのさ・・・アンタの体には淫らな血が流れているのさ・・・女の血潮というヤツさ・・・こればかりは武家の女も百姓女も変わらないのさ・・・」と、舌先で形の良い耳朶をさすりながら悪魔の呪文を唱える様に志乃の耳穴に囁き続けた。

貞淑な武家の女としての教育を受けて来た自分にそんな事が在る筈が無い！しかし先日から男達に責められ連続して感じてしまったのはどうしてだろうか？お銀の言葉に底知れない暗い深淵を覗き見てしまったような恐怖を覚え身体を震わせた。

互いの下腹と痴丘を擦り合わせながら、お銀の右手がスルスルと志乃の女の花園に伸びた。

「おやおや・・・もうすっかり濡れているじゃないか！やっぱりスケベな女だね！」

指先を濡らす豊富な愛液に笑い声を上げた。

「準備万端調った様だね・・・旦那！卵を持って来て下さいな！」

と、身体を密着させながら惣右衛門の方を振り返って声を掛けた。

惣右衛門が茹で卵を山盛り載せた箸を持ってイソイソと寄って来た。

「これから楽しい事をしようね・・・何、気楽な気持ちで姐さんに任していれば良いんだよ・・・」

と、立位で檻の格子に繋がれた志乃の傍らに腰を下ろし、その部分の様子を見ながら声を掛けた。

そして、愛液で濡れたしなやかな繊毛をかき分け、しとどに潤った鮮やかな秘園を捲り出すと、卵を一つ摘み上げ、「まず最初は卵を腹の中に入れて、そこの筋肉で食い締めて、その感触を確かめるんだよ・・・」と、それを濡れた秘孔に押し当てた。

スベスベした茹で卵の表面が女の祠の入り口に振れた時、アッと声を上げ身体をくねらせた。いきなり卵を含ませようとせず、卵の尖った先端で女の割れ口に沿って意地悪く上下に往復させた。

暴走する志乃の女の本性は、早く何かを入れて貰いたいー、それを喰い絞めたいーと希求するように動き、武士の娘としての理性が必死にその様な淫らな様を食い止めようとしていた。何度も柔らかなゆで卵に摩擦され、ぶるぶると腰を震わせる股の間から滲み出た滴を受けて卵の先端が艶々と輝いていた。

その志乃の女の本能に気付いたのか、ニヤッと笑みを浮かべると、その中心に狙いを定め卵を持つ手に力を加えた。

お銀の技巧により程良く弛緩していた媚肉は押し入ろうとする圧力を受けて柔らかく開き始め、自ら茹で卵を迎え入れようとするかの様に蠢いた。

その微かな動きを見逃さず、「旦那！この娘は大したモンですよ！これなら卵産みの芸くらい軽く覚えられそうですよ！」と、声を発した。

どれどれーと、男達がお銀の手により腹の中に埋め込まれそうになっている志乃の周りに集まった。

今や卵は半分ほど華肉の中に埋もれていた。

「ほら！息を吐きながらここの筋肉を弛めたり絞めたりして、吸い上げる感覚をつかみな！」お銀が卵を相手に呻吟する志乃の下腹の筋肉をさすりながら声を掛けた。

お銀が卵を支えていた手を離した。

卵はお銀の様に体内に吸い上げられて行く事は無かったが、落下する事もなく秘裂の柔肉に支えられて半分ほど体外に姿を覗かせていた。

まるで卵を呑み込む事が与えられた使命と自覚するのか、額に汗を浮かべて苦しげに眉根を蹙め、息を止めて、下腹を揺らしながら必死に、半分顔を出した卵と格闘する志乃の姿が在った。

女門を大きく押し広げたまま、その入り口でビクビクと蠢いていた卵に、お銀が手を添えて軽く下から押し上げると、まるで枷を外された様にスルスルと上昇を始め、体内にその姿を隠した。

その様子に間近に顔を寄せて見守る男達から驚きの声が上がった。

「ここを使って吸い込むコツが解って来た様だね・・・」

お銀が満足そうな笑みを浮かべた。

呑み込んだ卵の大きさが膣内に響くのか、切なそうな溜息を吐いて腰を振った。

「ここの筋肉はこれから昼夜別たずこんな練習を重ねれば付きますが、肝心なのは吸い上げる感覚を覚える事で、案外この娘はこんな事に慣れるのは早そうですよ！」と、お銀が嬉しそうに声を上げた。

「ほら！今腹の中に入った卵の位置が判るだろう？今度はここの筋肉を使って、卵を押し包む様に押し出すんだよ！」と、励ます様に下腹を叩いた。

既にお銀の調教の前に精神が困惑して武士の娘としての矜持も失ってしまっている志乃は、言われるままに、息を止め下腹に力を込めて排出しようと懸命になっていた。

顔を真っ赤にしていきむ志乃に、「ただ気張るだけじゃないよ！卵の位置を感じながら力を

入れるんだよ！そうしないと奥に入ってしまうよ！」と、ビクビクと蠢く下腹に手を当てて、膣内の卵の位置を確認しながら声を掛けた。

「そうだよ！そうだよ！そのまま押し出すんだよ！」

ジワジワと肉洞内の襞に押されて動き出した事を感じてお銀が励ます様に声を掛けた。

今や見詰める男達の卑猥な目も気にならないのか、ウンウンと声を上げ、体内の異物と格闘し追い払おうとするかの様に、下腹を振り、股を割って、腰を前に突き出した。

お銀達の見詰める前で、ピタリと閉ざされていた秘孔がジワジワと開き始め、その奥から白い艶やかな表面が見え出した。

それは膣内の淫靡な襞を巻き込み、鮮烈な色に染まった媚肉を押し広げ、どんどん大きく成り、やがて、お銀の持ち添える手の中に産み落とした。

「全くこの娘は、大したモンだよ！このコツを忘れずに練習するんだよ！」

手の中の卵をシゲシゲと観察しながら言った。

「イッてしまったのかい？」

卵を産み落とした後、立位のまま股を固く閉ざし、すすり泣きをする志乃の事を下から見上げながら聞いた。

お銀の問い掛けに頬を赤く染めて小さく肯いた。

たった今卵を産み終えたばかりの牝孔からは透明な露が滴り落ちていた。

「ああー・・・もう疲れました！少し休ませて下さい・・・」

卵と格闘して心身とも疲労困憊した志乃が哀願した。

「何言ってるんだい！もう疲れました、も言う無理ですって一々休んでいたら芸なんか覚えられないんだよ！疲れを乗り越え限界を通り越して始めて、コツってモノが判るんだよ！さあ！さっさと始めな！」

涙に咽ぶ志乃を鬼の様な形相で睨み付けた。

「さあ、そういう事で御座るから早速始めようか・・・今度は拙者達がお相手申す。」

女に対する残忍性では父にも劣らない篤馬が卵を手で陰惨な笑みを浮かべて志乃に蹴り寄った。

そして、「アアーッ！嫌で御座います！お許し下さいませ！」と、泣き叫ぶ志乃の股間に卵を押し付けるのであった。

「ああー、志乃様・・・」

男達に取り囲まれ蹂躪される志乃の悲鳴を耳にして、耳を塞いで項垂れる千鶴であった。
志乃の事は男達に任せて、お銀は真之介の方に向かった。
背後では、「おお！入ったぞ！」とか「まだ少し白いモノが見えているぞ！」とか「さあ、
最後まで腹の中に納めるのじゃ！」とか、男達の喚声が響いていた。

妖しい視線を漂わせ、こちらに近寄って来る全裸のままのお銀の姿にまるで人食いの鬼女のような恐怖を感じた。

そんな真之介の心を読んだように「そんなに怖がる事は無いさ・・・これからお姐さんと楽しい事をやろうってのさ・・・」と、笑みを浮かべて言った。

「アンタ、本当に色白で可愛い顔しているね・・・まるで女みたいじゃないか。」

真之介の顎に手を掛けて自分の方に向かせながら、うっとりする様に美少年の顔を見詰め続けた。

間近から熱っぽい視線を送る醜い女の顔をみてゾッとする様な嫌悪感を覚えた。

「舞台でも猿みたいな醜い男役より役者の様な美男の方が客の受けは良いものさ・・・アンタが舞台に上がったなら大入り間違いないだろうね・・・」

真之介の拒絶の表情を無視して喋り続けた。

「アンタ、まだ女とやった事は無いだろう？女も知らなければ舞台の上で男役なんか出来っこないからね・・・私がアンタの初体験さいししょの女になってやるよ・・・」

恐怖に体を震わせる真之介の肌に指を寄せた。

「止めろ！触るな！」

お銀の指先が体に触れた瞬間まるで電流が流れたように体を震わせ叫び声を上げた。

「何も怖がらなくても良いんだよ・・・今お姐さんが楽しい気分にして上げるからね・・・」
優しい微笑みを浮かべると、裸身を真之介の裸体に密着させた。

「どうだい？男のゴツゴツした身体と違って女の身体って柔らかいだろう？」

と、筋肉質の真之介の胸に豊満な胸を押し付け、体をくゆらせながら甘い声で囁き掛けた。
檻の格子に後ろ手で立位に固定された真之介をお銀は両手で抱き締め、体を密着させてクナクナと身を振った。

緊張で冷たくなっていた真之介の身体に女の肌の温もりが伝わって来た。

身体を密着させて、なやめかしく蠢かせる度に、甘い白粉の匂いと、息の匂いが真之介の鼻腔に吸い込まれた。

青ざめていた真之介の貌に赤みが戻り始めた。

「緊張も解け、大分身体も柔らかくなって来たようだね・・・」

真之介の表情を窺うように色っぽい目で見詰めて、固く凝った乳首で真之介の胸板を撫でながら、両手を股間に持って行った。

「口では何だかんだ言いながら、股の間のモノは目を醒まし始めているじゃないか？」

いつの間にか真之介の股間で半勃起したモノを両手で愛おしげにさすりながら微笑んだ。

お銀の巧みな手技によりそれはたちまち元気を取り戻し前に突き出す様になった。

「嬉しいね・・・ゲスの年増女相手にこんなに大きくしてくれてさ・・・」

お銀は自分の二つの乳房を抱えると、硬く尖った乳首の先端で筆で文字を書くように真之介の筋肉質の体を撫で回した。

その様な行為にお銀自身も燃え上がり始めたのか、男の淫欲を燃え上がらせるための陰技なのか、ゾクゾクする様な甘い嬌声を立て始めた。

お銀の卓越した技巧の前に、何時しか真之介も最初の恐怖と緊張は薄れ、理性を喪失して妖しげな快美感の底無し沼の中に引き込まれていくのであった。

滴り落ちるような色香を振り捲いて技巧の限りを尽くすと、次に真之介の股間の前に腰を下ろした。

そして、今は熱を持って硬化した高く天を向く怒張を自分の両乳房で挟んだ。

二つの乳房を両手で支え男のモノを優しく揉み上げながら、「どうだい？これが乳揉みってんだよ・・・中々良いもんだろ？」

と、込み上がる快感に必死に逆らって眉間に皺を寄せて頭を振り続ける真之介を見上げながら言った。

「だけど、あんた、年の割に随分と立派なモノを持っているじゃないか。これだけ硬くて長いと乳揉みのし甲斐があるってもんさ。これだけのお道具が有れば立派に男役が務められそうだね・・・」

ウッ・・・と、真之介の口から呻き声が上がった。

二つの乳房の間からはみ出した隆起したモノに唇を触れさせたのであった。

舌を匂わせて真之介の亀頭周りや裏筋を丹念に舐めた。

お銀の超絶的技巧の前に真之介のモノは灼熱した鉄の様に熱く固く天を向いていた。

お銀の手管で煽られて鰓の張った男のモノは最大限まで膨張し、鈴口からは先走りの水が溢

れ出ていた。

その滲み出た透明の液体を舌の先で絡め取り味わった。

「ああ・・・美味しいねえ、若い男の物は味が違うよ！旦那とは大違いだねえ・・・」と、感激して声を上げた。

志乃を責めるのに忙しい玄齋が、何！、と言う顔をして振り返った。

お銀はそのまま口を開けると真之介のモノを喉の奥まで咥え込んだ。

ひいい・・・と、真之介の口から女の様な声が上がり腰をナヨナヨと揺さぶった。

「ああ・・・真之介様」と、格子を握り絞めたまま、下劣な毒女に翻弄される真之介の身を案じて千鶴が声を上げた。

片手で陰囊を揉みながら、得意の舌技を駆使して嘗め上げ、頬を窄めて啜り上げた。

両手を後ろ手に縛り上げられ、牢の格子に立位で繋がれた真之介は手出しをする事も出来ず、ただ悶絶しながらお銀の責めを受け続けた。

「そろそろ良い頃かねえ・・・」苦痛とも快楽ともつかない表情を浮かべて身悶える真之介を見上げながら呟いた。

「旦那！ちょっと浮気しても良ござんすか？」

と、志乃を責める事に夢中になっている玄齋の方を振り向いて問うた。

淫虐な三人の男達は淫風に煽られた様に汗まみれになりながら志乃の肉体改造に没頭していた。

「許す！」

と、淫靡な女体責めに悩殺されている玄齋はこちらを振り向かず一言声を上げた。

男達の攻めをまともに身に受けている志乃は慎之介の事を構う余裕も無く身を悶えさせ悲鳴を上げ続けていた。

小柄なお銀が精一杯背伸びをしながら真之介に身体を預けた。

再び柔らかな胸と腹が真之介の身体と密着した。

真之介の下腹にお銀の無毛の股間が感じられた。

お銀は爪先立ちしながら、腰をうねらせ、高く上を向いた真之介の怒張の^{ありか}在処を股間を動かしながら探った。

その先端を秘裂で捉えたお銀は、ジワジワと腰を沈め、鍛えられた技で淫門を開き、それを迎え入れ始めた。

お銀の暖かく湿った女陰に熱く滾った慎之介の男のモノがズブズブと呑み込まれて行く得も言われぬ感触に、思わず呻き声が上がった。

生まれて初めて女肉の中におのれのモノを突き立てる生々しい感触に、仇の愛妾という敵意は意識の中から吹き飛ばされ、ただ貪欲に快感を得たいという生理的欲求が支配していた。その暖かく湿った柔らかな肉の筒は真之介のモノを優しく包み込み、まるで何かの仕掛けが内蔵されているかの様に妖しく蠢き、愛おしむように締め上げた。

「どうだい？ 良いだろ？ ・ ・ 良いて言いな。」

前から真之介の身体に抱き付き、鍛え上げられた媚肉で真之介のモノを咥え込みながら、快感に蕩けた表情を浮かべる真之介に問い掛けた。

真之介は顔を赤く染め、言葉も出せず、激しく肯いた。

お銀が突然真之介の唇に自分の唇を重ねて来た。

押し止めようの無い激情に翻弄され、すっかり理性を喪失してしまった真之介は、本能の赴くままに、自分の唇に寄せられたその柔らかな感触を伴った快感を貪ろうと強く押し当て、無我夢中で舌を絡め合った。

志乃を責めながら、その様子に気付いた玄齋が、「見られよ！ そなたの弟御は、下賤な見せ物を生業とする不浄の女と仲睦まじく口を吸い合っておるぞ！」と、大笑いした。

玄齋の言葉に、霞む目の中に真之介とお銀の激しい口接の様子が映った。

檻の中で泣きはらし赤い眼をした千鶴がじっとその様子を眺めていた。

より強く快感を貪ろうとするのか、お銀の肉壺に包み込まれたまま、不自由な身体を動かし激しく出し入れを始めた。

牢に縛り付けられているため、大きな動きは封じられているとはいえ、その忙しい腰の動きに男の若さを感じるお銀であった。

「どうだい？ もうイキそうかい？」

と、顔を真っ赤に染めて最後の瞬間を堪える真之介に声を掛けた。

「ああーっ！ 僕、僕もうイキそうです！」

苦しげに眉根を寄せて呻く様に言った。

「ほほ、そうかい？ まあ、初めての経験だし早くても仕方無いやね・ ・ ・」と、真之介の断末摩の様子を目にして微笑むと、真之介のモノを咥えていた下腹を突然離し、クルリと背中を向けてお尻を突き出すと、目にも止まらぬ早業で真之介のモノを後ろの穴で咥え込んだ。

菊花の中心の蕾が柔らかく開き、抵抗無くズルリと真之介のモノを根元まで呑み込んだ。

突然の事に真之介の口からアッという声が漏れた。

前の穴と同じ様に鍛え抜かれたお銀の後口は、ギュッと真之介のモノを搾り上げ、堪らず真之介はお銀の腸内に放出を始めた。

「ああー！感じるよ、熱いのがドクドクと出て来るのがさ！」

真之介の灼熱した精液を直腸内で受け止めながら、感激して声を上げた。

無我夢中の内に仇の女の中に放出してしまった事に、射精が終わり激情が下がり始め理性が戻り始めると、白々とした自意識が真之介を責め立て始めた。

目を下に向けると腰を折ったまま真之介のモノと尻で繋がったままのお銀の白い身体が映った。

いまだに真之介のモノを後口内に咥え込み媚肉を駆使して残余の疼きを絞り上げ続けているお銀が、

「お武家の若君の最初の経験が河原者の女のケツメドの中だったなんて、笑えるじゃないか」と、犬の様に背後から真之介の男根をくわえ込んだまま尻を振りながら大笑いするのであった。

「余りやり過ぎて、身体を壊して仕舞ったら元も子もないから今日はこの辺にしようかね・・・」と、お銀が宣言した。

途中に小休止は何度か挟んだとはいえ、激しく責め立てられた姉弟は途中何度も絶頂を迎え、グッタリと床の上に横たわっていた。

「お前達、これからこのような見世物を生業とするようになるのに一々気をやっつけては体がもたんぞ・・・」

股間からあふれ出た愛液に塗れた姉弟を脚先で突きながら男達が面白そうに声を掛けた。

「それじゃ寝る前にこれを入れて寝て貰おうかね。」

何かの植物の繊維を編み込んで作った円筒形の物を取り出した。

「この編み込みの中には膏葉が練り込まれていて、これを尻の穴に入れておけば、ジワジワと薬が滲みだして来て、傷口が早く治るんだよ。おまけに尻の穴を開く練習にもなると謂う一石二鳥の優れものさ！私も親方から厳しく仕込まれてケツメドが裂けてしまった時、良く入れられたものさ・・・」

お銀に命じられて男達が志乃の身体を担ぎ上げ尻をお銀の方に向けさせた。

植物の細い繊維で作られた蒼みを帯びた張り形を入れる準備のために指先でドロリとした油状の軟膏を掬い取ると、油にまみれた指を志乃の菊花に押し当てた。

突然不浄の穴を女の指先で触られて悲鳴を上げた。

志乃の狼狽も意識せず、セカセカと肛口の周囲に薬を塗り込めていった。

菊の花にも似た皺を一本一本伸ばすように丹念に塗り込め、時には指先を内部に押し込むようなお銀の巧みな技巧に何時しか志乃は巻き込まれて行った。

ヌルヌルとした油に塗れた指先に責めたてられ、何かゾクゾクするような背徳的な快美感がジワジワと込み上がって来るのであった。

お銀が指先を蠢かす度に志乃の腰がビクビクと震えた。

「どうやら、この娘はココでも楽しむ事を知っているようだね・・・」

切なげな呻き声を漏らす志乃にニンマリしながら呟いた。

「それじゃ入れるからね・・・」

お銀が指で肛門を開き膏薬の塗り込まれた張り形を挿入した。

裂傷を負った菊花を親指と人差し指を添えて押し広げる際に激痛が走り、悲鳴が上がった。塗り薬のヌルヌルした潤滑効果により、抵抗無く内部に差し入れる事が出来たが、気味の悪い異物感に尻を悶えさせた。

「何が、アッアッだよ！こんな物小指の大きさぐらいしか無いじゃないか！これから傷の治り具合を見て段々太い物に代えていくからね。」

と、笑うとこちらに向かって突き出された尻を手でピシャピシャと叩いた。

続いて真之介の尻穴も軟膏で揉みほぐし挿入を終えた。

まるで女のようにすすり泣きをしながらそれを受け入れる真之介を見ながらこの若侍も素質が在りそうと思った。

「寝てる間に抜け落ちたりしないように、その紐で固定しておいて下さいな。」

膏薬を塗り込めた箆編みの張り形の基部には長い紐が付いていた。

腹の周りに麻縄を縛り、それに結び付けた。

年若い美男と美女の股間を無惨に割って通る細い紐の禰の様な滑稽な姿に男達は笑いこけた。

完全に打ち拉がれていた二人には最早抵抗する気力も残されていなかった。

「夜中に勝手に外したりしないように手も縛らせて貰うよ・・・」

両手を前で交差して縛り、余った縄を首の回りに巻き付けた。これなら手を動かそうとすると首が絞まり身動きが出来ないはずであった。

全ての準備が調うと牢の中に押し込んだ。

低い檻の格子戸を潜る時、直腸内に押し込んだ物が意地悪く内側から刺激して悲鳴を上げさせた。

お銀による厳しい調教を受け続け疲労困憊していた姉弟は、それぞれの檻に戻されると泥の様に眠りに就いていた。

深い眠りに落ち込んでいた真之介ではあったが、違和感を覚えて薄く目を開けた。

何と其処にはお銀が居て、布団を捲り上げ股間の様子をシゲシゲと観察しているのであった。

何時の間に牢の扉を開けて侵入して来たのか判らないが、まだ日の昇る前で周囲は薄暗く、姉も千鶴も熟睡している様で在った。

思わず声を上げそうになるのをお銀が口を押さえて封じ、顔を寄せて口の前に指を一本立ててシーと言うような仕草をした。

薄暗い檻の中でお銀と二人で居る姿を姉や千鶴に見られる事に何か後ろめたい気持ちがして声を上げるのを躊躇った。

「やっぱり若いって良いねえ・・・昨日あれだけ出したってのに、こんなに元気に朝立ちしてるじゃないか。」

真之介の布団を捲り上げて、朝の勃起具合を確認していたのであった。

「これから昨日の続きをやろうじゃないか。昨日はお尻の穴にしか出させて上げなかったけど、今日は中に出しても良いんだよ・・・内の旦那も結構嫉妬深い所が有ってさ・・・旦那達が居ない今の内なら心置きなくやれるってもんさ。」

と言うと、仰向けに横たわる真之介の身体を跨いで、着物の裾をクルクルと捲り上げ始めた。

見上げる真之介の目に柔らかな膨らみを持った無毛の秘裂が露わとなった。

そして、そのまま布団に横たわる真之介の上に腰を下ろした。

前技無しでも何時でも男の体を受け入れられる様に改造されていたお銀のその部分は、ズブズブと真之介の肉塊を呑み込んで行った。

その暖かくシットリと潤った天鵝絨に包み込まれる様な得も言われぬ快美感にウーッと息を漏らした。

騎乗位で真之介の上に跨ったお銀は真之介のモノを根元まで咥え込んだ事を確認して、「ああ、やっぱり若いって良いねえ。中でピクピクしてさ・・・旦那みたいに女責めの技は無いけど、これから順々にお姐さんが女泣かせの技を教えていって上げるよ・・・」と、目を閉ざし若い男を征服した快感に酔うように口にした。

肉洞の筋肉を蠢かせ若い男の男根をじっくりと味わってから、ゆっくりと腰を上下させ始めた。

女の肉壺の中に妖しく蠢く媚肉と柔褰に包まれて、脳味噌を蕩かせるような快美感を味わっていた。

「どうだい？良いだろう・・・」

ウットリとした表情を浮かべまるで桃源郷に遊ぶような惚けた顔を見ながら聞いた。

お銀に組み敷かれたまま、何かに取り憑かれたように無言で肯いた。

真之介の上に跨ったまま、お銀は帯を解いた。襟がはだけられ白い肌が露わとなった。

首の直ぐ下に両手を交差して縛り上げていた縄を解くと、両手首をそっと掴んで露わになった自分の胸に持って行った。

「ほら、揉んでご覧。」と、真之介の掌で乳房を握らせながら言った。

夢見心地の真之介は何も判らないまま、お銀の豊かな乳房を揉み始めた。

「柔らかくって気持ち良いだろう？」と、微笑みを浮かべて囁き掛けた。

熱に浮かされた様にボーとする真之介はウンウンと肯いていた。

「中々上手じゃないか？・・・何だか変な気分になって来たよ・・・」

真之介に乳房を揉ませ、腰を上下させる間にお銀の口からも喘ぎ声が漏れる様になっていた。

股間からはピチャピチャと互いの陰肉が擦れ合う音が聞こえていた。

「ああっ・・・良いね、良いね・・・」と、熱に浮かされた様に口にしながら真之介の身体の上に倒れ込み、身体を密着させた。

真之介も両腕をお銀の背中に回して抱き締め、柔らかな身体を引き寄せた。

真之介の唇を求める様に顔を近付けた。真之介もそれを受け止めるように唇を重ねると、舌を伸ばして絡め合った。

寝ている二人には気付かれないようにしていたつもりであったが、志乃も千鶴も最前から目を醒ましており布団に横たわったまま呆然と二人の痴態を見ていたのだった。

熱に浮かされた様に自らも腰を動かし、夢中になって毒女と交わる真之介の姿を涙を目に浮かべて千鶴が見続けた。

お銀のこの世の物とも思えない、脳髓を蕩かし肉体を快樂の坩堝に溶かす様な、不可思議な妖力を秘めた肉壺におのれの肉塊を浸し続ける内に、何時しか真之介の身体は淫靡な蜘蛛の糸に絡め取られ、奥底に秘めた肉欲を露わに引き吊り出されてしまっていた。

これまで女との経験も無い若い真之介は、その込み上げる痛烈な刺激に堪らず、一声呻き声を上げると、暖かく締め上げるお銀の女肉の中で炸裂した。

「ああっ！良いね、良いね！ドクドク脈打って入ってくるのが判るよ！」

と、真之介の胸の上に体を預けたまま、喜悦の表情を浮かべた。

真之介の発作が治まるのを待って、体を外した。

ズルリと女の祠から這い出た真之介のモノはまだ熱を帯びて充分大きく膨張したままだった。

「待ってな、今綺麗にしてやるからね。」

お銀の愛液と真之介の精液に塗れた肉茎を愛おしそうに捧げ持つと唇を寄せ舌先で清め始めた。

いまだ神経の高ぶりが治まらない鋭敏な箇所、に、巧妙な技巧を駆使するお銀の舌先を受け、背筋がゾクゾクとする様な刺激を浴びせられ、身体がピクピクと震えた。

「ああっ、良いね・・若い男のモノは美味しいよ・・」

と、夢中で唇を這わせ、舌で汚れを拭い、口一杯に頬ばって男のモノを清めるのであった。

真之介のモノを口に含みながら、再びムクムクと硬く成長して来たのに気付いて、

「もう一度出来そうだね？だけどそれは後の調教のために取っておきな。」

と、淫靡に微笑んだ。

「それじゃ、昨日の経験を忘れない内に技を磨いて貰おうか！真之介殿は女を見ればおっ立てる練習じゃ！」

卑劣な男達が笑い声を上げながら、蔵の階段を登ってきた。

「それにしても真之介様は昨日あれだけ搾り上げられてまだ保ちますかいな？」

惣右衛門が心配そうに声を上げた。

「ホホ、大丈夫ですよ。17、18の若い男はやりたい盛り。穴さえ在れば何だっ入れてたがる年頃ですよ。一晚寝ればすっかり回復するもんですよ。」

玄齋に気付かれ無いようすっかり居住まいを整えたお銀が微笑んで応えた。

志乃の檻の入口を閉ざしていた大きな南京錠をガチャガチャと音を立てて外すと、篤馬がズカズカと檻の中に入って来た。

「ささ、志乃殿昨日の続きを始めようではないか・・・」

固く布団を身に巻き付け怯えた目で見詰める志乃に笑いながら声を掛けた。

「後生で御座います。どうかお許し下さい！」

残忍な若侍に哀願する様に声を発したが、篤馬はそれに取り合わず、力尽くで身に纏っていた布団をはぎ取り、無理矢理立ち上がらせた。

そして、檻の出口まで志乃を連れて来ると怯えて立ちすくむ志乃の尻を背後から思い切り蹴り上げ、牢から出すのであった。

思わず悲鳴を上げて牢から蹴り出された志乃を惣右衛門が抱き止めた。

「どないだす？良く眠れました？」

志乃を抱きしめながらゾツとするような笑みを浮かべて問い掛けた。

「どないだす？おいどの具合は？」

片手で志乃の身体を支えながらも一方の手を股間に伸ばし、膏藥を内含した張り形に添えた。そして指先でグイと押し込んだり、先端を摘まんで掻き回すようにまさぐった。

「ああー、お許し下さい・・・」下賤な商人の狼藉にか細い声を上げた。

「おやおや！志乃様は大層この張り形がお気に召したご様子。」

寝ている間に感じていたのか、秘められた亀裂がじつとりと湿っていることに気付いて笑い声を上げた。

惣右衛門に恥ずかしい身体の反応を指摘され激しく頭を振った。

「それともこれはオシッコでおますかいな？今回ワテも仰山お金を出させてもろて色々な物を買わせて貰いましたが、こんなに志乃様に喜んで貰えて嬉しおます。」と、勝ち誇った様に笑い声を上げた。

「傷の具合は如何で御座るか？」

志乃に尻を向けさせ、張り形を呑み込んだ肛口の周りを確認するように見回した。

「薬が効いてきたのか、腫れも大分引いたみたいで、この分なら二三日でケツメドの調教も出来ることでしょう・・・」

一時は恋慕を抱いた若侍から恥ずかしい部分をじっくりと覗かれ、すすり泣きを漏らした。

「ささ、早速昨日の続きを始めまひょ！」

笊に山盛りに積まれたうで卵を驚掴みにして惣右衛門が嬉しそうに声を上げた。

昨日の様に志乃を立位で檻の格子に縛り付け、男達が周囲を取り囲んだ。

真之介も立位で格子に縛り付けられ、お銀がその前に陣取った。

「何を嫌そうな顔してまんのや？昨日は嬉しそうな声上げて何度もイカはったくせに！」

「一晩経ってまた身体が硬くなってしまったご様子。先ずこの姫泣かせの油を使って身体を柔らかく蕩かせて貰いましょう・・・」

媚薬をタツプリと含んだドロリとした油を指先で掬い取ると志乃の秘裂に指先を押し当てた。

その冷たい気味の悪い油の感触にヒッと身体を硬くした。

志乃の拒絶の表情も気に掛けず、淫孔に向けて指先をグイッと押し出た。

突然進入して来た指先を身悶えさせながら反射的に食い締めた。

「おやおや？昨日の鍛錬の成果か筋肉が鍛えられたのか指を喰い絞める力が強くなった様で御座るぞ！」

媚薬を塗り込めた指先で内部をまさぐりながら感心したような声を上げた。

「ほんまでっかいな？ワテにも調べさせておくんなはれ！」惣右衛門が指先に媚薬を塗り込めて篤馬と持ち場を代わった。

二人の後ろで玄齋がニヤニヤと笑いながら見守った。

篤馬と惣右衛門から交互に指先を差し入れられ、掻き回され不可思議な被虐の快美感の様なモノが股の間から込み上がって来て、そんな筈は無い！と自らの肉体の変化を否定するように唇を噛みしめて頭を振った。

篤馬が深々と指を差し入れ、膣壁の薄い壁越しに、直腸に突き立てられた張り形の形状を確認するように指先を這わせた。

その隠微な指先の刺激にウウッと呻き声を上げて身体を悶えさせた。

「おやおや、こんな物を残したままでは卵を呑み込む際に邪魔になろう・・・抜き取って進ぜよう・・・」と、呟いて張り形を固定していた紐を緩めた。

一晩中志乃の肉体を裏側から妖しく責め上げていた張り形をズルリと引き抜かれ、ホッとしたような開放感を味合うと共に、その後にお何か空虚な物足りなさの様なものを味合っていた。

「おやおや？先端に何やら着いておるぞ！」

志乃の腸内から抜去し、まだ温みの残るような張り形を睨み付けて、頓狂な声を発した。

「これぞ、まさしく志乃殿が作られた下肥の臭い！何と香しい匂いであろう！」

張り形の先端の茶色く変色した部分を鼻先に持って来ての臭いを嗅ぐ仕草をして、志乃の羞恥を掻き立てた。

この陰険な若者は一分刻み五分刻みに志乃の羞恥を逆撫でし精神的に蹂躪するのであった。篤馬のねちこい言葉責めに頬を染めて身悶えた。

「後ろの穴の調教に入る前には一度ひり出して貰って綺麗にしておく必要がありますな！」と、恥ずかしい指摘を受けて狼狽する志乃を更に責め立てるように言葉騷りを続けた。

「昨日一日鍛えられて上達した志乃様のココを確かめさせておくれやす！」

志乃の秘奥に指を突き立てたまま極上の内部を楽しんでいた惣右衛門が堪らず声を上げた。惣右衛門の必死な様子に玄齋も篤馬も「良かろう」と、黙って肯いた。

「何しろ最初は赤坂様の大きなモノに散々衝かれた後で、ガバガバに緩んでましたさかいに！」

「何を申す！拙者が後ろからやっているところに突然割り込んで来おったくせに！二本を受けてこれ以上無いほど狭くなっていたはずじゃ！」と、大声で笑いながら応えた。

「そう言うことだ。志乃殿も卵産みの練習に入る前に恵比寿屋に抱かれて身体を温めて貰え！」

志乃の肉付きの良い柔らかな臀部を撫で上げながら篤馬が微笑み掛けた。

「ああー！嫌で御座います！お許し下さい！」

未だに武士の娘としての自尊心が残っているのか、志乃はこの下劣な商人に身体を任すことは虫酸が走るような嫌悪感を感じていた。

そんな間にも惣右衛門は着物を脱ぎ去り、下履きをはぎ取って全裸となって志乃に向かって来た。

「ああー！志乃様！」

牢の格子を握り締めたまま千鶴が涙を浮かべて声を上げた。

豚の様に肥満した下腹部に醜い男のモノがムクムクと鎌首を擡げ始めていた。

まるでナマズの様な顔の輪郭に蝦蟇^{がま}の様なゴツゴツとした痘痕^{あばた}を浮かべた顔が間近に迫り煙草臭い荒い息を志乃の顔面に吹き掛けた。

口元を隠微に歪め、涎を垂らしながら獣欲を剥き出しにして顔を寄せる惣右衛門に何か穢ら

わしい物を見せつけられた様に思わず臉を閉じて顔を背けた。

そんな志乃の拒絶の態度も無視して股間に自らの怒張を押し当てた。

いきなり熱鉄を押し当てられた様に悲鳴を上げて、必死に腰を左右に振り立てて押して出る
矛先を交わした。

この志乃の拒絶の態度に腹を立てた惣右衛門は、突然思い切り志乃の頬を平手打ちして、

「あんたは武家の姫様やいうて、ワテら商人^{あきんど}を馬鹿にしてるんやろうけど、今回の金を出したんはワテや！あんたはワテに金で買われたんや！そやからワテがどうしようと勝手や！
大人しゅうせんかい！」

と、何度も平手打ちを食わせて鬼の形相で睨み付けた。

惣右衛門の打って変わった態度に恐怖を覚えて身動きを止めた。

拒絶の態度を停止したのを良いことに、志乃の股間に押し付けられた硬化したモノがジワジワと奥に沈み始めた。

アーッ！アーッ！恐怖のあまり固く閉じた秘裂を割って硬く熱いモノがグイグイと肉奥に
めり込んで来る痛烈な激痛に悲鳴が上がった。

「アーッ！志乃様！」見守る千鶴の口からも悲鳴の様な声が放たれた。

「どや？ええやろ？ええやろ？ワテも赤坂様には及びも着かんが、これまでに何百人もの
娘^{おなご}を抱いて来たんや！ワテの良さをその身体に教えてる！」

立位のまま志乃の秘奥に根元まで突き刺した惣右衛門はまるで自分の肥満した腹に志乃の
華奢な身体を乗せ上げる様にセカセカと腰を上下に振りたてた。

惣右衛門の激しい腰の動きに煽られて、アーッ！アーッ！と呻く様な声が漏れた。

額にびっしょり汗を浮かべ、辛そうに眉根をぐっと顰め、速い息を繰り返す志乃の姿に自分
の手管の前に感じ始めていると思い込んだ惣右衛門は上機嫌になり更に腰の動きを強めた。

「アアーッ！ええ気持ちや！ほら、卵を産む時の気持ちになってワテのを絞めてみい！」

志乃の極上の内部に有頂天になった惣右衛門は良く張ったふくよかな尻肉を乱暴に平手で
バシバシと叩いた。

惣右衛門の激しく粗暴な行為に煽り立てられた志乃は何時しか理性を忘れ、蛇蝎の様に嫌っ
ていた男に抱かれているにも関わらず、不思議な陶酔感を感じ始めていた。

そして、朦朧とする意識の中で男の言葉が催眠術者の暗示の様に響き、何時しか肉洞の筋肉
を緊張させるように自らの肉体に命じるのであった。

「オオッ！よう絞まるわ！最初の時とえらい違いや！これから毎日進捗の具合を確かめさ

せて貰いますわ！」

荒い息の下で歯を食いしばりながら必死に下腹に力を込めて絞め上げようとする志乃が愛おしくなり、唇を求めた。

顔を真っ赤に上気させ意識も朦朧となった志乃は何が何か分からなくなった様に、求められるままに唇を与えた。

惣右衛門のガサガサした鱈子の様に厚い唇と志乃の桜花の様に艶やかな唇が一つに接した。浅黒い肥満男と雪の様に白い細身の女が立位で交わったまま熱い口吻を繰り返す様子に、玄齋も篤馬も驚いた表情を浮かべ互いに顔を見合わせた。

「どや？イキそうか？」

顔を赤く染め歯を食いしばって必死に何かを堪える様子の志乃に問い掛けた。

武家の子女としての慎みも忘れた様に全身火柱となって燃え上がった志乃は、惣右衛門の問い掛けにウンウンと激しく肯いて返した。

「ほうか！ほたらイッてみい！」

志乃の様子に相好を崩した惣右衛門は一機に獲物を追い込む様に腰の動きを速めた。

女慣れした惣右衛門にとってここまで追い込めば武家女も百姓女も関係ないとばかり余裕をもって責め上げた。

激しい呼吸を邪魔する様に再び鱈子の様な厚い唇で志乃の口を塞いだ。

その瞬間閉ざされた口の奥でウッ！と響きが上がり、惣右衛門に預けた身体をビクッと硬化させた。

惣右衛門もその瞬間に併せる様に耐えに耐えていたものを解き放ち、若い女体の深奥に思いの丈を放出した。

剛毛に覆われた背中にびっしょりと汗を浮かべ、ハアハアと荒い息を吐きながら何度も腰を痙攣させ、股間に残っていた残液を残らず注ぎ込んだ。

「どや？イッたか？」

未だ太い腕で抱きしめ、その中心を貫き、陰茎全体で陥落した女の牙城の感触を味わいながら問い掛けた。

「はい・・・」

頬を赤らめ薄く瞼を閉ざして俯きながら小さな声で応えた。

普段の凜とした武家の娘としての貞淑そうな仮面の下から滴る様な色香を感じた。

その可憐な花に誘われる虫の様に再び唇を求めた。

いまだ興奮状態で意識が朦朧としている志乃も求めに応じて唇を与えた。

二人が唇を交合わせ舌を絡め合わせる様子に篤馬達からホウとため息が上がった。

硬さを失った惣右衛門のモノがズルリと抜き取られた。

跡には激しかった交接の名残を留める様にポツカリと赤黒い開孔が残り、ドロリとした男女の愛の蜜が滴り落ちていた。

「これだけ柔らかくしておけば大丈夫ですよ！さあ始めまひよ！」

志乃に頂上を極めた後の休憩を与える優しさも無く、次の遊びを求める子供の様に嬉しそうに声を上げた。

「おいおい・・・こんなにヌルヌルじゃ卵が滑り落ちてしまうぞ。少しは拭いて上げねば・・・」

惣右衛門の言葉に呆れた様に篤馬が声を掛け、手ぬぐいを手にした。

「あっちは盛り上がっている様だね・・・こっちも楽しもうかね・・・」

惣右衛門と志乃の交接の喚声と熱気を背に受けて檻の格子に立位で縛り付けられた真之介に向かってお銀が艶然と微笑んだ。

既にお銀は着ている物は全て脱ぎ捨て妖艶な裸身を晒していた。

同じく後手に縛られ格子に括り付けられた縄以外糸纏わぬ真之介の目の前に対峙していた。

「舞台での白黒の男役は何時どんな時でも、例え、体調が悪くても裸の女を見たらこれをおっ立てる様にしなくてはいけないんだよ・・・」

そう言いながら身動きできない真之介を挑発するように、自らの手で乳房を揉み上げたり、腰をクネクネと振りたてたりした。

「ほら！ココを良く見て気持ち良さを思い出すんだよ・・・」

剃毛され隠す物の無い亀裂の上を細く長い指で撫でさすりながら乾いた声を発した。

惣右衛門に突き立てられあえぎ声を漏らす姉の姿を目にし、牢内に吹き荒れる淫風に巻き込まれた様に、お銀の声に誘われ開け放たれた秘裂に視線が移った。

お銀が指先で擦り上げる肉の割れ目に釘付けとなる内に今朝ほど与えられた目眩く快感の記憶が蘇って来た。

真之介の男性がピクリと動いたのを目敏く発見したお銀は、ニンマリと笑みを浮かべて、「そうだよ、そうだよ、ココの気持ちよさを思い出すんだよ・・・」

と、左手で自分の女性を慰めながら右手で真之介のモノを掴むのであった。

お銀の巧みな指先の技により真之介の男のモノはムクムクと大きくなり始めた。

「嬉しいね・・・私の裸を見ながらこんなに大きくしてくれてさ・・・」

股を大きく割り、指先で柔肉の狭間を押し広げ、赤みを帯びた内部の襞を見せつけながら一層激しく真之介の陰茎を摩擦した。

お銀の手の中で真之介のモノが猛々しく鎌首を擡げていた。

「随分と大きくなったね！それに皮も剥けて来たし・・・」

立位の真之介の前に跪いたお銀が真之介のモノを繁々と見詰めながら呟いた。

「待ってな！今もっと気持ち良くして上げるからね！」

と、言うのと捧げ持っていた肉茎に舌先を這わせ始めた。

包皮がはじけすっかり露出した亀頭部分をざらつく舌全体でなめ回し、舌先を尖らせて鈴口を突いた。

お銀の巧みな舌技に堪えようとしてもアッ！アッ！と声が上がった。

「女みたいな声を出すんじゃないよ！それに男役は感じたからと言って直ぐに出しちゃ駄目なんだよ！何時間も女の中に突き立て腰を振りながら我慢したり、場合によったら直ぐに発射したり自在に操れなければならないんだよ！」

真之介が今にも強烈な発作を起こしそうになるのを見て、下から見上げながら睨み付けた。

次の瞬間、アッ！と真之介の口から声が漏れた。

お銀が支えていた掌を離して口に咥えたのだった。

頬を窄めて根元を搾り上げ、過敏になっている部分に舌先で激しく刺激を加えた。

悪女が真之介の股間に食いついた瞬間、格子を握り締めて見詰める千鶴から悲鳴が上がった。

口内で激しく真之介の肉塊を揉み上げながら、空いた掌で睾丸をまさぐった。

「男はね、射精する前にキンタマが付け根まで上がるんだよ！こうやって下に下げておけば漏らしようが無いからね・・・」

陰囊を扱き上げながらお銀がニヤッと笑って真之介の表情を伺った。

口で激しく男を責めながら、睾丸が迫り上がってきて射精が間近だと気付くと、扱いて下に押し下げるのであった。

長時間に渡って快感を与えられ続けても、最後の瞬間を許されない苦しさ、何時の間にか腰を震わせ悲痛な声を上げる様になっていた。

「大分頭に血が上った様だね。どうだい？出したいかい？」

意地悪そうな笑みを浮かべて問い掛けた。

「お願いします！出させて下さい！」

度重なる加虐の前に武士としての矜持も忘れたのか、非人の女に哀願するのであった。

「ほほ、良いよ・・・」

勝ち誇った様に笑い声を発すると、真之介を立位に縛り付けていた縄を解いて、格子を背に床に尻餅を付く格好で座らせて改めて後ろ手に格子に縛り付けた。

大股を開いて仁王立ちし見下ろすお銀の前に床に腰を落として、下から見上げる真之介が居た。

「あんた、女の身体なんてこれまでじっくりと見たこと無かったろ？」

冷たい目で怯えた表情を浮かべる真之介の様子を見詰めた。

「舞台の出し物の男役として女の構造も知らなければ話にならないからね。」

そう言うのと片足を高く掲げ、真之介の頭越しに檻の格子に踵を置いた。

下から見上げる真之介の目の前に大きく広げられた女陰が隠す物無く広がっていた。

「女のココにはね・・・穴が三つ在るんだよ・・・」

両手で秘部の褰をめぐり上げ、秘園の様子を真之介の目に晒しながら喋り続けた。

「先ずココさ。ちょっと分かりづらいけどココがオシッコをする穴さ。」

両手で秘部を押し広げて指で示しながら言った。

「それで直ぐその下に在るのが、アンタの好きな穴さ。」

血走った目でその部分を食い入る様に見詰める真之介の喉が鳴った。

そんな真之介の表情に満足した様に、「そして、一番奥に在るのがウンコをする穴さ・・・まあ私にとっちゃこの二つの穴には大して差は無いけどね・・・」

笑いながら真之介の目に秘孔を見せつけた。

食い入る様に見詰める真之介に見せつける様に器用に二つの穴の筋肉を操作してパクパクと開閉させた。

「あんたに雌の匂いを教えて上げなければいけないね。」

腰を下げて真之介の鼻先に開け放たれた秘奥を近づけた。

「この匂いを頭の中に叩き込むんだよ！そしてこの匂いがしたら自然におっ立つ様に体に覚え込ませるんだよ！」

慎之介のギラギラとした視線が自分の開け広げたその部分に注ぎ込まれている事が判った。

真之介の股間でダランとしていたモノが再びムクムクと力を持ち始める様子が目に入った。この女みたいに可愛らしい顔をした美少年は全く鍛え甲斐が在りそうだねーと、心の中でほくそ笑むのであった。

真下から見上げる真之介の目の前で秘部を円を描く様にゆっくりと上下にそして左右に振った。

まるで夢遊病に罹った様に虚ろな目をした真之介は鼻先でその動きを追っていた。

「どうだい？ 良い匂いだろう？」

「はい・・・」熱病に罹った様な虚ろな目で答えた。

「どうだい？ 嘗めてみたいと思わないかい？」

ぼんやりとした目で見上げ続ける真之介に

「どうなんだい？」と、たたみ掛ける様に問い詰めた。

「お願いします。嘗めさせて下さい。」と、口にすると舌先を覗かせた。

「ほほ、良いよ、嘗めてご覧。」

勝ち誇った様に笑い声を上げるお銀は真之介の髷を握り締め、顔面を自分の股間に押し当てた。

「いけません！ 真之介様！」

檻の中から様子を伺っていた千鶴が悲痛な声を上げた。

「あー！ 良いよ！ 良いよ！ 中々上手だね！」

千鶴の悲鳴も耳に入らないのか丹念にお銀の秘奥に舌を這わせ続けた。

「どうだい？ 美味しいかい？」

真之介の舌先の動きにうっとりしながら問い掛けた。

込み上げる快感に酔った女肉の奥から熱い愛液がドロリと流れ出て真之介の口内に流れ落ちた。

「あー、美味しいです・・・」

まるで熱病に冒され自分の意思を失ったかの様に懸命に舌を這わせ、舌先で尿道孔や肉穴の内部までなめ続け、溢れ出る陰液を飲み下しながら喘ぎながら答えた。

「其処だけじゃ無くてオサネの先も嘗めるんだよ！」

目眩く快感に溺れ腰をピクピク痙攣させながらかすれた声で命じた。

真之介の股間では若い肉塊が完全に元気を取り戻し隆々と天に向かって聳えている様子が窺えた。

「今度はこっちを嘗めてご覧。」

つま先を格子に掛けて秘奥を嘗めさせていたお銀が脚を下ろして、今度は後ろ向きになり尻を真之介に突き出す姿勢となった。

そして真之介の髷を掴むと双臀の間に押し付けた。

完全に自己を見失ってしまった真之介は嫌悪を示さず、舌先を伸ばして菊座の蕾の周りを嘗め始めた。

素直に汚辱の行為を始めたのに気を良くしたお銀は両手で尻たぶを開き菊花を露わにし、真之介の作業を手伝った。

「やめて・・・真之介様・・・」

牢の中で千鶴が目には涙を浮かべながらその様子を呆然と見詰めていた。

「アーッ！良いよ！とっても気持ちいいよ！今度は舌先を伸ばして中まで嘗めるんだよ！」

尻肉の緊張を緩め、後口を開けて真之介の舌を内部に誘った。

まるで暗示に掛かった様に狼狽を示さず、丹念に舌先で腸内を拭った。

甘みを持った前の穴の味覚と違ってエグ味を持った味が口内に広がったが今の真之介には不思議な媚薬の様に感じられた。

見下ろすお銀の目の前に真之介の怒張がその時を待つ様にピクピクと痙攣していた。

真之介に後ろの穴を嘗めさせたまま、身を深く折って真っ直ぐ天井を指す男根を咥えた。

そして空いた手で睾丸を扱き上げた。

その強い衝撃にウッと呻き声が上った。

お銀は後ろから責められる心地良い感触に浸りながら、まるで玩具で遊ぶ様に真之介のモノを口内で転がした。

口の中で男のモノがムクムクと力を増してくる様子が伝わってきた。

「どうだい？私の中で出したいかい？」

後ろを振り向いて様子を伺いながら聞いた。

「お願いします！出させて下さい！」

ハアハアと荒い息を吐きながら眉間に皺を寄せて辛そうに声を上げた。

「そうかい？それじゃ・・・」苦悶の表情を浮かべる真之介を見詰めながらニヤッと笑うと「私のオシッコを飲んだらやらせて上げるよ。」と言い放った。

「お願いします！オシッコを飲ませて下さい！」

真之介も何時の間にか相手から与えられる虐待を被虐の喜びとして受け入れられる様に変

化したのか叫ぶ様に声を発した。

「ほほ、良いんだね！」

再び向きを変えたお銀が床に尻を落とす真之介の顔面に向かってぐっと腰を前に突き出して、両手で真之介の唾液に濡れ光る秘園を押し上げた。

「ほら！よく見るんだよ！これがさっき教えてあげたオシッコの出る穴さ！」

両手で自らの女陰を押し広げながら甲高い声で叫んだ。

その中心で肉の蕾がピクピクと蠢いていた。

突然、隠微に蠢いていた肉の蕾がほころび、中から黄色い熱水が一条の線を描いて噴き出した。

激しい勢いで溢れ出た小水は真之介の顔面を容赦なく叩き、周囲に飛び散った。

顔中びしょびしょに濡らしながら口を大きく広げて、降り注ぐものを逃すまいとお銀の聖水をゴクゴクと喉に流し込んだ。

非人の身分で武家の美少年を思う存分汚す行為に目眩く快感に酔ったお銀は怪鳥の鳴き声様なけたたましい笑い声を上げた。

その狂った様な笑い声に志乃を責めていた男達も思わず振り返り、指を指して笑いこけた。

真之介の惨めな姿を直視して、イヤーッ！イヤーッ！と千鶴が顔を覆って泣き叫んだ。

必死の思いで汚辱の液体を嚥下する真之介の表情は何処か法悦境に浸っている様にも見えた。

堪えに堪えていたモノが爆ぜて精液が天井近くまで噴き上がった。

尻穴の鍛錬

それから何日経ったのか志乃には記憶が無かった。

毎日残酷な男女に休む間もなく肉体を責め上げられ懊悩の内に意識を失い、目が覚めれば又攻め抜かれて意識を喪失する一の連続だった。

ぼんやりと霞む記憶の中で三、四日位かと思ったが、隠微な世界の中で数ヶ月も経っている様にも感じられた。

一方真之介の閉じ込められた檻には毎朝お銀が訪れ、真之介に熟れた女体を惜しげ無く与え、目眩く陶醉の世界に誘うのだった。

若い真之介は何時の間にかお銀の来訪を心待ちにする様になっていた。

ガラガラと一階に通じる仕掛け階段が降ろされる音が響き、ギシギシと踏み段を軋ませながら残酷な男達が笑い声を上げて登って来た。

「志乃殿、真之介殿お目覚めで御座るか？」

篤馬が上機嫌で二人の牢を覗き込んだ。

裸身に固く布団を巻き付けて、ああ一、また屈辱の日が始まると志乃も真之介も暗い気持ちになるのだった。

奥の牢から千鶴が敵意の籠もった目で睨み付けていた。

「志乃殿も前の穴を使っの卵産みの技はかなり上達されたから、今度はケツメドを使っの卵産みの技を教えたいとお銀が申すのじゃ。」

傍らに控えるお銀の方をチラッと見て言葉を継いだ。

「これで姉弟揃って同じ穴の調教を受けられると云うもの！」

狼狽する二人を可笑しそうに見ながら笑い声を上げた。

「さあ！出て参られよ！」

牢の中にズカズカと入り込んで来た篤馬が固く握り締めていた掛け布団を力尽くで引き剥がし志乃を牢の外に追い遣った。

同じく牢から出された真之介と共に全裸で檻の前に立たされた。

並んで裸身を晒す美女と美少年の姿が目に焼き付き、何度見ても見飽きぬ躰じゃと思わず喉を鳴らすのであった。

「それでは尻穴の治り具合を見せて貰おうかの・・・」

自分達の方を向いていた二人に後ろを向かすと檻に向かってお辞儀をする様に上体を深く折らせた。

野卑な男女の目に恥ずかしい部分を晒す姿に羞恥が込み上げて来た。

男達は二人の手を縛っていた紐を解いて、両手を牢の格子に縛り直した。これにより二人は逃げることも抵抗することも封じられた。臀部を男達の方に突き出したままハァーと諦めの溜息をもらした。

「さあ！見易い様にもそっと股を開くのじゃ！」

篤馬の非情な命令に諦めたように揃えていた両足を肩幅に開いた。

満足した様に男達が詰め寄り、肛門の周りをジロジロと見回した。男達の愚劣な鼻息が肌に掛かるのを感じていた。

志乃の後口にも真之介の後口にも裂けてしまった傷口の治療と称して座薬が埋め込まれていた。それは植物の繊維を固く編んで作った籠の中に膏薬を詰め込んだもので、性技に使用する張り形の様な形状をしていた。

最初は小さな物で在ったが、薬を交換する毎に段々と大きな物に取り替えられ、今では並の男の男根位の大きさになっていた。

加虐者達は菊座の皺を伸ばして隙間無く張り形を咥え込んだ肛門に目をやり傷や腫れが完全に治っていることを確認した。

「もうすっかり良くなっている様で御座るな。それでは取って進ぜよう・・・」

と、寝ている間に張り形が抜け落ちない様に留めていた紐を解いた。一晩中占居していた筒具が男達によってジワジワと抜き出される時、ザラザラした植物の繊維が腸壁を刺激して思わずアッアッと声が上がった。

「志乃殿はこの座薬が相当お気に召した様子。抜き取られ無い様に一所懸命喰い絞めて御座るぞ！」

志乃の反応に笑い声を上げた。

一晩中その部分を責め苛まれていたため後口の筋肉は痺れて閉じる機能を喪失しており、張り形を抜き出した跡にはポツカリと虚ろが開いていた。

「志乃殿の後ろの岩戸から香しい匂いが漂ってきますぞ！」

閉じることを忘れて外界に向かって開口する薄暗い孔に鼻を近づけて嗅ぐ仕草をしたので、恥ずかしさが込み上げて来てイヤイヤと身悶えした。

「さてさて、今日からお二人には後ろの穴を使こうて卵産みの練習をして貰う訳ですけど、中の具合はどないだすやろ？」

惣右衛門が横から指を差し入れて来た。

力なく開いた肉の虚ろに男の指を感じてビクッと軀を痙攣させた。

「ふんふん・・・傷は完全に治ってるみたいだすな・・・」

指先で内部をまさぐりながら覗き込む様に顔を寄せて呟いた。

「ああー！こらあかんわ！」

付け根まで指を差し入れた時変な声を上げた。

「糞が腹の奥で固まってますわ！」

差し入れた指先に腸管の奥で石化して滞留する便塊を発見したのだった。

深く差し入れた中指で腸内に出来た塊を転がしたので、ウッと呻き声が上がった。

「志乃殿から立ち昇る芳香の原因はそれであったか・・・」

篤馬がニヤッと笑った。

「真之介様の方も同じや！」

ポツカリと口を開いた真之介の内部にも指を差し入れて叫んだ。

「この所、前の秘め所の鍛錬に忙殺されて用便をさせておらず、夜は座薬を埋め込んでいたままだったから奥の方で石みたいに固まってしまったんだ・・・」

「兎にも角にも居座っている物をどかさな卵が入りません。」

「さあ！二人とも出すんや！」

両手を前にして牢の格子に縛り付けたまま、腰を降ろさせ、開いた股の下に不浄箱を並べた。男達の怒声に怯えたように不浄箱の上に跨った姉妹であり、実際腹に溜まった便は二人をここ数日苦しめており、このまま排泄してしまいたい生理的欲求はあったが、卑劣な男達に見つめられているという緊張感で排便は進まなかった。

「早よ出さんかいな！」

ウンウンと気張って腰を振る志乃の白い柔らかな尻肉を撫で上げながら急かした。

何日も下腹から込み上げる膨満感に苛まれていた志乃達であったが、それをこの嗜虐趣味を持った男達に知られれば、新たな羞恥責めの材料にされると、恐れ口に出さずにいたが、肉体的限界に来ていることを感じていたのだった。

男達の好奇の目で見られながら排便を強制される羞恥に苛まされたが、今となっては腹中に重苦しく溜まった便塊を排出してしまいたい切迫した肉体的欲求により下腹に力を込め排泄しようと努力していた。

しかし、腸内に固く居座った巨大な便塊は細い肛口を容易に通過出来なかった。

汗を浮かべた双臀の狭間に在る菊花の皺をいっぱい伸ばし、肛口は大きく開き、どす黒い便塊の先端がピクピクと出入りしていた。

「これは固まった便が大き過ぎて、無理して出せば又裂けてしまいますな・・・」

不浄箱の上で息む志乃の肛門に指を突き立てながら篤馬が口にした。

「それでは儂がこの間やった様にケツメドに小便を流し込んでドロドロに溶かしてやろう！」

これまで黙ってみていた玄齋が声を上げた。

「父上の大きな物を突っ込まれたら又々裂けてしまいますぞ・・・」

「さてさて、どうした物かの？」

「そや！ワテ^{えーもん}良い物が在るの忘れてましたわ！」

手をパンと叩くと慌てて階下に駆け下りて行った。

そしてお湯を一杯に張った水桶と何やら金属で出来た筒状の物を持って来た。

「これはこの間、慈英夢須（ジェームス）という紅毛人*から仕入れた絵寝間（エネマ）と云うもんだす」（*江戸時代の言葉で紅毛人とはオランダ人や英国人を指す。南蛮人はスペインやポルトガル人のこと）

惣右衛門の手にする絵寝間は薄い真鍮板を折り曲げて直径一寸三部（約4センチ）程の筒状に加工した物で、端は同じ金属板で閉じられておりその中心から金属の管が四寸程突き出していた。

惣右衛門の話を要約するとこうなる。

この頃西欧諸国や米国では大型船舶の製造技術と航海術の進歩により海外進出の機運が高まり、日本近海にも外国船が頻繁に出没するようになっていた。

天保の改革を指揮した老中水野忠邦は最初日本沿岸に接近する外国船に対して武力を持って追い払う方針で望んでいたが、アヘン戦争で清国が英国にあっけなく敗れたとの報を長崎奉行より聞いて、外国船を刺激して戦争になったら大変と、外国船が日本に漂着したら水と薪炭を与えて早々に帰って貰う様に方針を変更していた。

この幕府の方針変更に関し金儲けに関しては無類の嗅覚を有する恵比寿屋が飛びついた。

藩の沖合に位置する小島を借り受け外国船と密貿易を始めたのだった。

水や食料や薪炭を外国船に供給するだけで無く日本の書画骨董なども売りさばいた。

これらは驚く程高く売れ恵比寿屋の売り上げに貢献した。

藩の役人も恵比寿屋の密貿易の噂は薄々聞いてはいたが、藩の財政を恵比寿屋に握られている現状では止めさせる事は出来ず見て見ぬ振りをしていたのだった。

欧州では折からの日本ブームであり、神秘の国の文物は飛ぶ様に売れた。

オランダを凌ぐ海洋国に発展した英国は日本との交易を求めたが、外国貿易はオランダに独占されており実現出来なかった。

そんな折り、日本に来て一攫千金を夢見る不良船長の英人ジェームスと金に目の無い惣右衛門が互いに引かれる様に知り合ったのであった。

ジェームスは日本の物は何でも買いたい、密貿易のため惣右衛門に売ることの出来る舶来品は目立たず手離れの良い洋書や医薬品などわずかな物に限られていた。そのため貿易は一方通行でしかなく、持ち金を減らしたくないジェームスは惣右衛門が喜びそうな日本に無い珍しい物品―その多くは陰具であったが―を持って来ては物々交換を迫るのであった。

「こんな物のために牛二頭タダで取られてしまいましたわ・・・」

惣右衛門が自嘲的に笑った。

「獣の肉を食らう西洋人は、獣の報いかよく糞詰まりになります。中には糞詰まりで死んでしまう人もおるとの事です。その糞詰まりを治すために発明されたんが、この絵寝間ちゅう事ですわ。慈英夢須^{やつ}の奴、人類史上最高の発明品と自慢してましたわ・・・」

早速持ち込んだ手桶の中に管を入れて反対側の柄を引いた。

「使い方は、この細い管を水の中に入れて、反対側の柄を引けばこの銅^{あかがね}の容器の中に水が汲み上げられる―ちゅう仕組みですわ・・・そしてもう一遍^{いっぺん}柄を押せば・・・」

玄齋達に示しながら柄を押した。

細い管の先からは水が勢いよく噴出した。

「まあ、水鉄砲みたいなもんだすわ・・・」

驚いた目で見詰める玄齋達に、「これで志乃様達の‘おいど’にお湯を注ぎ込めば固まった便を安成^{あんじょう}溶かしてくれるちゅうもんだすわ！」と、自慢する様に言った。

「それは面白い！早速やってみよう！」篤馬が歓声を上げた。

「こうすれば良いのか？」

篤馬が慣れぬ手つきで管の端を手桶になみなみと注がれた微温湯の中に入れて柄を引いた。ずっしりとした手に感じる重さから大量の水を吸い上げたことを確認して、「志乃殿、これから楽にして進ぜる・・・」と、不浄箱を跨いだまま呻吟する志乃に声を掛けた。

「さあ、志乃殿、腰を上げるのだ！そして、もそっと尻を拙者の方に突き出せ。」

女に対する残酷性に関しては親以上だと感じる篤馬から新たな責めを加えられると直感した志乃は恐怖にガタガタと軀を震わせ頭を振った。

「案ずることは無い。今すぐ楽にしてやると申しておるのだ。」

怯えて居竦む志乃の腰を無理矢理持ち上がらせると、篤馬に向かって突き出した尻の中心の董色の窪みに金属管を押し当てた。

「アアーッ！痛とう御座います！」

「何の痛いことがあろうか、父上や拙者の剛刀を其処に易々と受け入れて来た志乃殿ではないか？こんな物、蓮の葉の茎程の太さも無かろう・・・」

志乃の呻吟を無視してズブズブと菊座の中心に管を埋め込んで行った。

長い金属管の半分程が体内に埋め込まれた事を確認すると、「それでは志乃殿、まいるぞ！」と強く柄を押して出た。

水圧の抵抗を楽しむ様にドクドクと微温湯を腸内に流し込んだ。

柄が奥まで達してカツンと音がするのを耳にして、総ての液を放出し終えた事を確認して、志乃の腸管から管を引き抜いた。

「お湯が固まった便を溶かすに暫く時間が掛かるな・・・」

体内に注ぎ込まれたお湯の量にハアハアと息をもらす志乃の尻を楽しそうに撫で上げた。

「それでは真之介殿も楽にして進ぜよう・・・」

再び容器をお湯で満たして真之介の背後に回った。

「アアーッ！嫌で御座います！アアーッ！痛い！」

肛門を襲う異様な感触に真之介は尻を振り立てて悲鳴を上げた。

「これこれ、女みたいな声を出すでない。姉上は大人しく受け入れたぞ・・・」

苦悶の表情を浮かべて微温湯を注ぎ込まれる真之介に笑いながら声を掛けた。

浣腸の効果が現れるまでお銀も含めて四人で酒盛りを始めていた。

「それにしても大量の水を呑み込んで志乃様の腹も少し膨らんだ様でおますな・・・」

牢の格子に両手を括り付けられ前屈みに立つ志乃の下腹を眺めながら惣右衛門が舌なめずりをした。

何度も浣腸器により微温湯を注ぎ込まれた姉弟の下腹は心持ち膨らんでいるように感じられた。

男達の好奇の視線を集める志乃の下腹がピクリと動いた様に見えた。

「ああー」と、志乃の口から切なそうな声が上がった。

「どうした？志乃殿。糞がしたくなったのか？」

篤馬が盃を手にしたまま立ち上がった。

「志乃殿の身体の中に溜まった石化した便は相当大きい。完全に溶かし終えるまでもう少し待たれよ。」

体内から込み上げる強烈な圧力に苦悶する志乃の腹を撫で回しながら冷たく言い放った。

隣では真之介が込み上げる便意に身を振らせ呻き声を上げていた。

「おやおや、真之介殿も我慢が出来なくなってきたか・・・」

腸内を掻きむしる苦痛にびっしょりと汗を浮かべ尻を激しく振って身悶える美女と美少年を酒盛りしながら楽しそうに眺めた。

「旦那、これはもう保たないかも知れませんね・・・」

杯になみなみと注がれた酒を旨そうに嘗めながらお銀が口にした。

「そうだな、それじゃこの蠟燭が燃え尽きるまで保たなければ罰を与えるというのはどうじゃ？」

玄齋が小ぶりの蠟燭を取り出した。

「この蠟燭は四半刻（約30分）近く保つはずじゃ・・・」

蠟燭に火を点すと、嬉しそうに酒を流し込みながら口にした。

「まあ！どんな罰を考えているんですか？」

「それはな・・・」と言うとお銀の耳に口を寄せて何やら吹き込んだ。

玄齋の言葉に思わずプツと吹き出したお銀は、「旦那も好きですね・・・」と言言うと、汗だくになって身悶える二人に、「二人とも！頑張るんだよ！四半刻我慢出来なければ恐ろしいお仕置きをすると旦那が言っているよ！」と、声を掛けた。

玄齋が何を考えているのか判らないが、また恐ろしい災いが襲いかかって来るのだらうと思うと必死に堪えるのであった。

約30分に渡りこの扇情的な尻振りの舞を見れると思うと、酒が進む男達であった。

「お願いします！その罰は千鶴が受けます！だから真之介様達をお許し下さい！」

見かねた千鶴が泣き叫んだ。

「うるさい！お前は黙っとれ！」惣右衛門が牢の中から必死の声を上げる千鶴に怒鳴り声を上げた。

下腹から込み上げる激しい苦痛に志乃も真之介も額にびっしょり汗を浮かべ呻吟していた。

「これこれ、やんごとなき武家の姫と侍とあろうものが、人の方に尻を向けていやらしく振り回し、色っぽい声を出すものではないぞ。」

両手を前に格子に縛り付けられ、不浄箱を跨ぐため両足を肩幅に開き、加虐者達に向かって腰を突き出した姿勢で後口をピクピク痙攣させながら苦痛の余り尻を上下左右に振り立て

る志乃達の様子を面白そうに眺めた。

「へえ・・・志乃様の大事な大事な二つが丸見えでおますな・・・」

惣右衛門も杯を手に舌舐めずりしながら嫌らしい視線で熱を帯び水を浴びた様にびっしょりと汗を浮かべる志乃のその部分を覗き込んだ。

男達の卑猥な視線を感じて思わず腰の動きを止める志乃達であったが、腹を搔きむしる激痛に再び尻を振り立てるのであった。

「ほらほら、蠟燭は漸く半分でおます。後半分我慢出来まっか？」

「蠟燭が燃え尽きるまで保たなければ仕置きじゃぞ！」

すっかり酒の回った玄齋が笑いながら苦痛に喘ぐ二人に声を掛けた。

「ああー！とても・・・」

絶望的な状況に真之介が気弱な声を上げた。

「真之介！耐えるのです！」

自らも断末魔の状況に襲われながらも必死に声を出して真之介を励ますのであった。

ふらふらと篤馬が立ち上がると状況を見聞する様に激痛と苦闘する真之介の傍に寄った。

そして、激しい大腸の痙攣が顫れブルブル震える腹を楽しそうに撫で回すのであった。

「ほらほら！真之介！お主も武士の子ならしっかりと堪えぬか！」と、笑いながら揺れ動く尻を平手打ちするのであった。

次に並んで縛られた志乃の方に寄ると、

「志乃殿も大分苦しそうであるな？」と、苦痛に蠢く尻を嫌らしい手付きで撫で回した。

そして、ブルブルと震える腰を抱えてびっしょり汗を浮かべる尻に耳を押し付け、「おうおう！志乃殿の腹の中がグルグル鳴っているのが聞こえるぞ！」と笑い声を上げた。

「イヤ！お止め下さい！」

突然篤馬が秘裂に手を伸ばし、周囲をまさぐり始めたので悲鳴を上げた。

「志乃殿の姫御前の周りがびっしょりと濡れて御座るぞ。これは汗で御座るか？それとも？」
ぐっしょりと濡れそぼる陰唇の襞を指で搔き分けながら、「いずれにしても濡れていて入れ安く御座る・・・」と、薄ら笑いを浮かべた。

ヒッ！と、短く悲鳴が上がり志乃が身体を硬直させた。

「流石に志乃殿の鍛えられた肉の祠であるわ！拙者の指を痛い程締め付けてくるわ！」

込み上げる体内からの圧力に耐えてグッと緊張させる筋肉と連動する前門の筋肉が差し入

れた篤馬の指を絞め上げた。

「これは試させて貰わなければならぬな・・・」

そう言うとき着物の裾を上げ、下履きを緩めて股間から肉塊を取り出した。

篤馬に向かって後ろ向きの姿勢を取ったまま前屈みになり腰を突き出す志乃の背後に立つと、既に何かに期待する様に十分に硬化したモノの先端を緊張してピクピク蠢く菊花の僅か下の穴に押し当てた。

「ああ・・・無理で御座います・・・」

浣腸の影響で荒れ狂う後口の僅か下の別の穴に押し入ろうとする篤馬に慈悲を求める様に悲鳴を上げた。

「何の無理が御座ろうか？鍛え抜かれた志乃殿の其処なら拙者のモノなど易々と咥え込むことであろう・・・」

志乃の哀願を無視して腰にグッと力を込めた。

アアーッ！と、悲鳴が上がり志乃の背が仰け反った。

少しでも臀部の筋肉の緊張を解けば落下無残な羞恥図を描きそうな所に、逞しい男の肉塊がズブズブと侵入して来て、息が止まりそうであった。

「おお！絞めるぞ！凄まじい力で締め付けるわ！」

太くて長い陰茎を力尽くで押し込みながら歓喜の声を上げた。

とうとう付け根まで押し込み終えた篤馬は志乃の丸みを帯びた柔らかな尻に下腹を密着させたまま、その余韻を楽しむかの様に動きを止めた。

「拙者の竿全体に志乃殿のはらわた腹腸の蠢きが伝わって来申すぞ！これは前の方からも掻き混ぜて進めねば！」

イヤァッ！イヤァッ！篤馬の言葉に悲鳴が上がった。

そんな志乃の必死の悲鳴を無視して腰を前後に動かし始めた。

少しでも緊張を解けば嘔き出してしまいそうな状況の中でアァッ！アァッ！と呻き声を上げながら堪えた。

「姉上！」

自分自身も絶望的な苦痛の中で、同じく激痛と闘いながら、篤馬に犯される姉を心配して見詰めた。

篤馬に背後から貫かれながら、今や志乃は白目を剥き瘡に罹った様に身体を震わせていた。

志乃の崩壊が近いと察した篤馬は志乃の肉体内に置き土産を残すとさっと身体を翻した。

「ああー、もう・・・」

朦朧とする意識の中で崩れ落ちる様に腰を落とすと、不浄箱の上に尻を付けた。

その瞬間固く閉じられていた水門が一機に開き褐色を帯びた濁流が一斉に溢れ出た。

「アアー！姉上！」

真之介も我慢堪らず不浄箱を跨いで噴出を始めた。

激しい夕立の様にバシバシと音をさせて漆塗りの箱の底を叩く二人の無様な姿に加虐者達が笑い声を上げた。

「姉上！悔しゅう御座います・・・」

「真之介！」

憎みても余りある仇の面前に次々と醜態をさらす悔しさと惨めさに顔を真っ赤に染めて、涙を流した。

そんな羞恥に身悶える二人の心を見捨て、ドボドボと体内からは汚濁の液が溢れ続けていた。

「ああ・・・真之介様、志乃様・・・」檻の中では千鶴が涙を浮かべていた。

「ちょっと！お前達！それでもお武家のお姫様と若様かい？こんなに床まで飛沫を飛ばして大糞垂れてさ！ちょっとは恥ってモンを知ったらどうだい！汚した床はキッチリ拭いて貰うからね！」

自分にとって雲の上の存在であった武家の美女と美少年をここまで貶めることが出来たという快感に狂った様に笑い声を上げた。

「それにしても二人同時だと凄いいにおいだすな・・・それにしても何時まで出さるんやろ？」新たに発作を起こして再び激しく汚物を吐き出し始めた二人を楽しそうに見詰めながら笑った。

「うむ、腹の中に注ぎ込んだお湯の量が多かったからな・・・全て出し終わるまで止まるまい・・・」

「おやおや・・・柏木様の置いてきたモノも垂れて来ましたぜ・・・」

ドボドボと水状化した便塊を吐き出しながら前門から滴り落ちる精液を目敏く発見して笑い声を上げた。

「しかし、恵比寿屋！お主が紅毛人から仕入れた絵寝間と云うものは大した物だな！尻に突き立てて小便を流し込む技など、父上にしかできんからな・・・これからは毎日だって志乃殿達に存分に糞をさせることが出来るぞ！」

と、良い攻め道具を手に入れたと嬉しそうに声を上げた。

「お前達！残念であったな！もう少しであったのに・・・約束通りお仕置きじゃ！」

僅かに燃え残り、燵り続ける蠟燭の火を吹き消して、未だに排便を続ける二人に声を掛けた。

「刻限まで持ち堪えれば、優しく桜紙で拭いてやろうと思っておったが・・・」

牢の格子に縛り付けられていた縄を解かれ、嗜虐者達の前に怯えて犬の様に四つん這いの姿勢を取る姉弟に宣告するように玄斎が口を開いた。

「互いに舌を使い、尻穴の周りの汚れを清めるのじゃ！」

玄斎の言葉に姉弟の顔がサッと青ざめた。

互いにその浅ましい姿を想像し身体を震わせ尻込みする様子に、「出来ぬと申すか？・・・仕方ない、その役千鶴にやらせよう・・・」

檻の中で成り行きを見守っていた千鶴の咽がヒッと鳴った。

「元々千鶴はお前達の糞小便を始末するため雇った女じゃからな・・・」と、淫靡に頬を緩めると笑い声を上げた。

檻の格子を必死に握り締めたまま青ざめた顔で玄斎を睨みつけた。

「分かりました・・・弟の汚れを清めます・・・」と、小さくポツリと口にした。

限りない残虐性を秘めた加虐者達は本当に千鶴に酸鼻な拷問を仕掛ける事だろうと思うと志乃には選択の余地は無かった。穢れ無き少女を守ることが今の志乃に出来ることだと思った。

「慎之介、許しておくれ・・・」

四つん這いの姿勢のまま弟の背後に回った志乃は、目を閉ざし唇を開けて舌を突き出した。

「ああー！志乃様お止め下さい！その役千鶴が務めます！」

檻の中から泣き叫ぶ千鶴を無視して、最初に澱肉の周りに飛び散った汚物を舌で拭い始めた。

「ああー、姉上・・・」

志乃の温かく柔らかな舌先を澱球に感じて慎之介が呻くように声を発した。

そして、次に双臀の狭間に顔を押し付けるとその部分の周りを舌で拭い始めた。

舌先を^{すぽ}窄めて丹念に汚れた皺を一本一本伸ばす様に拭う内に、汚物の臭いと男の臭いが志乃の鼻を衝き、クラクラと理性が遠退いて行くのが分かった。

窄めた舌先をズルリと慎之介の内部に潜入させた。

「ああー！姉上！お止め下され！」

突然姉の舌先を腸内に感じて、慎之介が尻をブルブルと震わせ、悲鳴のような声を上げた。しかし、弟の狼狽ぶりにも関わらず、志乃はまるで媚薬を嗅がされたように、一匹の性獣と化したかのように、顔を赤く染めウンウンと鼻を鳴らしながら舌を蠢かせ続けた。

牢の中で千鶴が信じられないものを見る様子を目を見開いた。

憑かれた様に弟の股間に食い付き頭を蠢かす志乃の股間が潤みを持って来たことに気付いた惣右衛門が指差しして玄斎親子に目配せした。

「そう言えば慎之介殿の此処も変化が表れて来た様子・・・」

床に両手両足を着いたままの慎之介の股間のモノがムクムクと膨らんで来る様子に気付いた篤馬が腰を上げた。

「慎之介殿も志乃殿にケツメドを嘗められて、大分ん気持ち良くなって来た様子。拙者が当て搔きをして進ぜよう・・・」

「ああ・・・お止め下さい！」

実の姉から後口を刺激されながら、篤馬に男根を凌辱される屈辱に顔を振るった。

「何の何の、慎之介殿の身体は正直で御座るよ・・・ほら、こんなに立派に成られた！」

と、尚も両手で陰茎を扱きながら笑った。

肛孔を這い回る柔らかな舌先と淫肉を扱き続ける痺れるような官能的疼きに慎之介の若い肉塊は益々その大きさを増していった。

始めて女の舌でその部分を責められる刺激に耐えられまいと慎之介の猛々しく育ったモノを扱きながら篤馬がほくそ笑んだ。

ああ！と、一声発するとその先端から熱い樹液が迸^{ほとばし}り床を叩いた。

腰を激しく震わせ絶頂に達した瞬間に志乃も催眠術から解けたように我に返り自分が弟を凌辱してしまった事に気付いてワッと泣き崩れた。

床の上に蹲^{うずくま}り嗚咽する志乃の背後に慎之介を引きずって来た篤馬は、「さあ、今度は姉の汚れを清めるのじゃ」と命じた。

「ああ・・・許して、慎之介・・・」弟から尻の狭間を舐められながら小さな声で哀願した。

「いえ！許ませぬぞ姉上！慎之介は姉上のお陰で恥をかかされた。姉上にも恥をかいて貰いますぞ！」

無我夢中になって舌を這わせながら股間から立ち上る淫臭に煽り立てられ、淫魔と化した慎之介が姉の悲鳴を無視して責め立てた。

弟の舌先で官能を搔き立てられ志乃の前はじつとりと潤い果蜜を垂れ始めていた。

その様子に気付いたのか、そんな姉の滴らせる甘美な樹液を口で受け止め、華洞に舌を伸ばして絡め取った。

慎之介の舌先を最も大切な処に受けて、まるで電^{いなづま}を受けたように痺れ身体を硬直させた。床の上に崩れ落ちた姉弟は、白々と意識が蘇り仇の前で浅ましい行為を演じてしまった事を思い出し泣き崩れた。

檻の中でも千鶴が泣きはらしていた。

「全くこんなにご不浄箱を一杯にしてさ！重くて持てやしないよ！旦那！ちょっと手伝って下さいな！」

大量の浣腸液が混ざり、体内から押し出された汚物で茶色い水溜まりを作る桶を忌々しげに見詰めながら口にした。

「ああー！その後始末は私たちにさせて下さい！」

自分の身体から流れ出た汚物の塊を憎い男達に見られる恥ずかしさに志乃が堪らず声を上げた。

「何言うてますのや？あんさん達は内の大切な客や！お客さんにそんなことさせられまっかいな！」

と言うと、志乃の身体から産み落とした固形物の形状を観察し、芳香を楽しむ様に捧げ持ち運び去ってしまった。

「それじゃ今日から二人揃ってケツメドで卵を生める様に練習して貰いましょうかね・・・」
後ろ手に縛り上げられ、お銀の前に正座させられた二人の前にトネリコの木を削って作られた大小の張り形がいくつも並べられた。

張り形は細い物から太い物まで順番に置かれ、二人はその禍々しい形状に目を奪われた。

「最初から卵を押し込めるまで開いたら又裂けてしまうからね・・・徐々に開いて行って最後は卵が入るぐらいに広げるんだよ・・・」

お銀が笑みを浮かべながら直径2寸（約6センチメートル）近くありそうな巨大な張り形を握って、怯えた目で見詰める二人の鼻先に見せつけるように示した。

「張り形はそれぞれ1本しか無いから、先ず弟に先に使って貰って慣れて新しい張り形に移

る時に、姉さんに使って貰うことにしようかね・・・」

「弟御のお下がりをお姉さんが使うということか・・・」

「真之介様のケツ穴で温めてもろうたモンを入れて貰えれば志乃様も喜ぶますやろ！」

お銀の提案に男達が嬉しそうに肯いた。

「それでは真之介殿！参るぞ！」

真之介を後手に縛り上げたまま俯せの姿勢にして、端に並べられていた一番細身の張り形を手にした。

細身とは言っても実際の小ぶりの男のモノ程の大きさはあった。

「真之介殿が尻穴を^{ひら}拓かれています間、志乃殿は前の穴を使つての卵産みの復習じゃ！」

志乃を仰向けに横たえさせ、嬉しそうに策にうずたかく積まれた茹で卵から1つを手にした。

「アアーッ！痛い！お許し下さい！痛い御座います！」

真之介が篤馬から菊花の中心に張り形を押し付けられ悲鳴を上げた。

女性器と違い内部からの潤滑液の分泌が期待出来ない肛口を責める時は通常滑りを良くするため張り形に油を塗布するものであるが、何と篤馬は何の潤滑もされていない張り形を押し入れようとしているのだった。

菊花の微妙な粘膜をザラザラした木の表面が擦った。その激的な痛感にアアーと悲鳴を上げた。

「舞台で芸を披露する時には油なんか使わないんだよ！卵だろうと^{まり}鞠だろうと入れる物の大きさに合わせてケツメドの筋肉を自分で緩めて自分で開いて呑み込むコツを身体に覚え込まさないといけないんだよ！」

陰悪な表情で悲鳴を上げて激痛に身悶える真之介を叱咤した。

「やれやれ！これでは仕方無いな・・・今日は特別で御座る。志乃殿！真之介殿が痛がって御座る。真之介殿の尻穴に滑りが良くなる様、その口で湿らせて下され・・・」

菊花を押し広げ僅かに先端が体内に埋め込まれた張り形を引き抜いて言った。

玄齋や惣右衛門から茹で卵を無理矢理押し込まれ苦悶する志乃の口元に真之介を責めていた張り形の先端を押し付けた。

真之介の悲鳴を耳にしていた志乃は少しでも真之介を楽に出来ればと、口を大きく開き押し当てられた張り形を口中に含んだ。

「どうじゃ？志乃殿、弟御の尻穴の味は？」

張り形をほおぼり、舌先で丹念に唾液を塗して行く志乃をからかった。

そんな篤馬のからかいの言葉も意識出来ないのか、真之介の苦痛を和らげたい志乃は一心不乱に張り形を唾液で濡らして行くのであった。

もう良からうと、志乃の口から張り形を抜き取った。

「おうおう、これは良く濡れて御座る！これなら痛く無からう・・・」

姉の唾液に濡れた張り形を見詰め満足そうに肯いた。

「それでは真之介殿！参るぞ！」

菊の蕾の中心に押し当てグッと力を込めた。

アッ！と声が上がり身体を仰け反らした時には、滑りの良くなった張り形の亀頭を模した先端部分は菊状の門をこじ開け腸内に没していた。

しかし、その先を沈めようとしても、激痛に堪えられずヒューヒューと悲鳴を上げた。

「仕方無いな・・・志乃殿、まだ真之介殿は痛がっておられる。もう一度そのお口で湿らせて下され。」

と真之介の腸内から張り形を引き抜いた。

膨らんだ先端部分には薄茶色の真之介の腸内の残滓が付着していた。

目敏く見つけた篤馬が「おうおう！先っぽに真之介殿の名残のモノが着いて御座るぞ！」と、笑い声を上げながら不潔な張り形を志乃の目に見せ付けた。

玄齋や惣右衛門から狼藉され苦悶しながらも志乃の目にその付着物は見えていたが、真之介の苦痛を少しでも和らげたいと、必死の思いになり、再び口を大きく拡げて篤馬から突きつけられた張り形を咥えた。

身を投げ出す思い出、汚物が付着した筒具を懸命にしゃぶり始めた。

自分の汚物が付着した張り形を目を固く閉じ眉根を寄せてしゃぶり続ける志乃の姿を目撃して「姉上！お止め下さい！」と、悲痛な声を上げた。

篤馬は意地悪く、苦悶する喉の奥まで責め具を突き立て、根元まで丹念に濡らさせた。

「これだけ濡らせば十分で御座ろう」

志乃の口から抜き取った。

篤馬の陰惨な口腔責めから解放されて志乃の口からハアと息が漏れた。

「それでは参るぞ・・・」

志乃から抜き取った筒具を真之介の尻の中心に押し当て、グッと力を込めた。

「おうおう・・・流石に滑りが良くなって見る見る入って行くわ・・・」

自分が苦痛を訴えれば悪鬼達は自分の後口を潜った不潔な物を姉に味わす事になる事を理

解した真之介は激痛に堪えるのだった。

「ただ突き刺して貰うだけじゃ駄目よ！自分で尻の肉を緩めて大きさに合わせて開いていて自分から受け入れるのよ！」

篤馬から責め具を突き立てられ、全身に脂汗を浮かべながらウンウンと身体を震わせる真之介に声を掛けた。

男達から秘部を責められ、ともすれば意識が薄くなりそうな中で、篤馬に突き立てられ呻吟する真之介の姿を目にして、一まだ年端もいかない真之介には自分がしっかりとして支えて行かなければならなかったのに、自分がこの悪魔の様な若侍に一時的にも恋慕の心を抱いてしまったために、心が曇り正しい判断が出来なくなって真之介をこの様な地獄に落としてしまった一と、慚愧の念が込み上げて来て、「ああっ！真之介！姉が愚かでした！姉を許して！」と、苦しい息の下で叫び声を上げた。

志乃の突然の叫び声に、「何大声出してまんのや？アンタは早く卵産みの芸を覚えたら宜しい。」とキョトンとして声を掛けた。

「志乃殿！弟御を思う気持ちは分かりますが、何も心配する事は御座りませぬぞ！真之介殿はこの様な事も楽しむ事が出来るように成って来ましたぞ！」

張り形で背後からセカセカと突き立てながら、真之介の股間の様子が変化し始めた事に気付いて嬉しそうに笑い声を上げた。

肛口を突き破られ腸内深く筒具で抉られるという、魔物じみた衝撃を受け続ける内に心臓はドクドクと脈動を始め、そこから熱いモノが込み上げて来るのを懊悩する意識の中で無理矢理知覚させられ、女のように陰具を相手に劣情を誘起させられる自分を恥じて唇を噛みしめたが、一旦意識してしまった双臀の間から込み上げる、痺れる様な摩訶不思議な激情は堪えようにも下腹を支配し、更に背骨を駆け上って脳髄にズキズキとする灼熱の刺激を送るのであった。

ムクムクと次第に力を持ち始める股間のモノの変化をじっと見詰めていたお銀が、

「おやおや、段々大きくなって来たじゃ無いか！それに何度もまぐあいを繰り返す内に皮も剥けて立派な大人のアレに成って来たね・・・」

と、指先で勃起し始めたモノを擦りながら満面の笑みを浮かべた。

「こんな事に喜びを感じられる様になったお祝いをして上げようかね・・・」

と、言う口を大きく開いて今や逞しく隆起したモノを口に含んだ。

お銀は、巧みな舌捌きで亀頭部を刺激しながら、「やっぱり若い男のは美味しいね！」と感激して何度も独り言を發した。

篤馬の繰り出す巧妙な陰具の操作とお銀の絶妙な舌技に前後から煽られ、今や真之介の全身は真っ赤に染まって硬直し、苦しげに眉根を顰めながらアッ、アッと呻き声を漏らしていた。最早後戻り出来ない所まで真之介を追い込んだ事を理解した篤馬とお銀は一層激しく攻めたてた。

突然、クッ！と齒を食いしばると身体を硬直させ、次の瞬間腰をビクビクと痙攣させた。お銀の口内に激しく熱い精を放出し、背後から突き立てられた陰具を強い筋力で絞め上げるのを筒具を捧げ持つ篤馬は手に感じた。

一時の激しい痙攣が収まると、意識が遠くなった様に腰がぐだけ、そのまま崩れ落ちそうになる真之介の身体を篤馬が支えた。

身体を密着させる真之介の表情をうかがう内に、衝動に駆られた篤馬が真之介の唇に自分の唇を重ねた。

虚ろな目で篤馬を見詰め、熱い息を受けながら真之介も拒絶する事無く、自らも口唇を開いて篤馬の唇を受け止めた。

暫しの間、二人は唇を重ね合い、舌を絡め合って、互いの唾液をむさぼり合った。

牢の格子を握り締め見守っていた千鶴も信じられない光景に目を見開き、次の瞬間硬く目を閉じて顔を背けた。

お銀もそんな二人を目を細めて見詰めながら、口内に放出された精液を飲み干して、舌先で陰茎を清めた。

少女の様に頬を赤ら、焦点の定まらぬ目でボーと、こちらを見詰める真之介に、
「仇討ちなどつまらぬ事より、こちらの方がずっと面白いであろう！」と、笑いかけた。

「真之介殿もこの張り形は、もう卒業で御座る。次はこちらで楽しんで頂こうと・・・」
と、すっかり弛緩した肛門から責め具を抜き取り、次の張り形を手にした。

「それでは、その用済みの張り形はこちらで引き受けよう・・・」
玄齋が抜き取られたばかりの責め具を篤馬から受け取った。

「さあさあ、前に卵を含んだままコイツを後ろで喰い絞めるんや！」
惣右衛門が二つ目の卵を膣内に押し込みながら嬉しそうに声を上げた。

「アアーッ！もうお許し下さい！」

二個の卵を体内に押し込まれ、内部から込み上げる圧力に呻吟しているのに更に後ろからも責め立てようとする男達の残忍さに恐れをなして声をあげた。

「弟御が散々楽しまれてまだ湯気が立つように暖かいですぞ！これで志乃殿も楽しまれたら宜しかろう・・・」

惣右衛門が両手で押し広げた双臀の間にマザマザと露出した菊花の中心に、散々真之介の後口を責め苛んだ筒具の先端を押し当てた。

「淫婦め！このように太いモノを嬉しそうに呑み込んで行きよるぞ！」

玄齋が押し出すモノが、可憐な蕾を開いてグイグイと埋め込まれて行く様子に感動したように声を上げた。

男の強い力で押し込まれる陰具が前を占領する卵の感触と交差し合い、堪える事も出来ず腰を震わせてアアッと呻き声を発した。

背後から突き上げる痛痒感が不思議な感覚を呼び覚まし、華洞に押し込められた卵をジットリと潤していた。

「おう！どうじゃ！そうこうしている内にこの淫婦め、根元まで呑み込みおったぞ！」

双丘の間から杭の様に突き出す、薄黄色のトネリコの棒を見詰めて嬉しそうに笑い声を上げた。

「ただケツメドに突き立てたままじっとしていても面白くなかろう？これから前後に動かして遣わす！」と、満面に笑みを浮かべる玄齋に、今以上の苦痛を与えられる事に怯えた志乃が「ひえー、お許し下さい！」と、哀願するのであった。

志乃の悲痛な叫びも無視して玄齋は責具の端を握り絞めてゆっくりと動かし始めた。

顔を真っ赤に染めて唇を食いしぼり、ウウウッと呻き声を上げて、憎い仇の狼藉を堪える志乃に、「さあ、前に呑み込んだ卵を出してみなはれ！」と、柔らかな下腹を撫で回しながら惣右衛門が命じた。

二人の淫魔の責めの前に意識も薄れ始めた志乃は、「はい・・・」と、小さく返事をする後口を出入りする筒具の動きを意識しながら、前の孔の筋肉を緩めた。

何時しかお銀から仕込まれた肉の技術を發揮し始め、肉洞の一部を収縮させ、一部を弛緩させながら、胎内深く押し込まれた卵を抽送させ、徐々に出口に向かって送り出していた。

男達の見守る前で、ピタリと閉じ合わされていた肉の門が徐々に開き始め、ネットリとした愛液と共に、ヌラヌラ輝る白い物が花園の奥から次第に姿を現し始めた。

それは、見る見る大きくなり、隠微な肉の襞を押し分け半分以上姿を現した。

その白い大きな塊に今更ながら驚きの表情を浮かべる男達を無視するように、プイと噴き出すと待ち受ける惣右衛門の掌の中に産み落とした。

志乃の体液に塗され志乃の体温で暖められた白い塊を手にしてじっと眺めていた惣右衛門は、その温もりを手の中で楽しみ、濃厚な愛液の匂いを確かめる様に鼻にもっていった。

暫くの間ウツトリと志乃が産み落としたモノを見ほれていた惣右衛門は我に帰った様に、
「さあ、もう一度腹の中に収めるんや！」

と、手にしていた卵を志乃の秘裂に押し当てた。

無骨な太い掌でグリグリと押し込まれて、半分程が秘孔の中に埋め込まれた。

圧倒的な男達の暴力の前に、羞恥も屈辱も薄れた志乃は、玄齋に背後から激しく突き立てられながらそれを再び呑み込もうと必死の思いで腰を蠢かせた。

前の筋肉を動かす度に、後ろから責め立てる張り形に下腹が切なく疼いた。

卵が飛び出してしまうように惣右衛門が指を添えて支えたが、特に力を込めて押し込んだ訳では無いが、それはジワジワと上昇を始めた。

この名家の姫は短時日でこんな芸当も覚えたのかと、目を見張って胎内に消えて行く卵を見詰めた。

背後から責め立てる玄齋の操作する筒具が志乃の性感を煽り立て、顔面を朱に染めて、苦しそうに眉根を顰めながら、腰をくねらせ荒い息を吐いて卵と対峙する姿が男達の劣情を刺激した。

額にビッシヨリ汗を浮かべ、激しい息の間にアッアッと切なげな呻き声を立てる志乃の燃え上がった情感を一層煽り立てるように玄齋は責め具の動きを速めた。

胎内に残されたままの卵と、筋肉を収縮させて今又呑み込もうとしているもう一つの卵が薄い肉壁一枚を介して玄齋の繰り出す巧みな責め具の動きに互いに刺激し合い、志乃に息も止まる程の懊悩を与え続けたが、何時の間にかその激しい苦しみは不可思議な快美感の様な感覚に変わって行き、現実から離れて陶酔の世界に誘っていくのであった。

秘孔から飛び出してしまうよう卵に添える惣右衛門の指にビクビクとした肉洞の緊張が伝わり、豊富に涌きだした若い女の樹液が卵を濡らしていくのを目を見張って見詰め続けた。今や卵はほとんど胎内に埋没し、鮮やかな鮭肉色に染まった秘園の中心にほんの僅か白い物が見えるだけとなった。

「ほら！まだ少し白い物が見えてまっせ！完全に呑み込むんや！」

と、卵との格闘に汗まみれになった志乃の下腹を笑いながら掌でピシヤピシヤと叩いた。
苦しさも恥ずかしさも忘れた様に惚けた表情となっている志乃は惣右衛門に急き立てられ
残された最後の力を振り絞って吸い上げ始めた。

「おお！消えて行く！消えて行きよるで！」

卵が完全に肉褌の中に姿を隠したのを目にして驚きの声を上げた。

その瞬間前と後ろから襲い来る激情を必死の思いで堪えていた志乃がクッと声を上げて身
体を緊張させた。

「前に卵を頬張って、後ろから挿り粉末で掻き回してもろてイクなんて、ほんまに器用な娘
や！」と、絶頂を極めて身体を痙攣させる志乃の姿に肥満した腹を抱えて大笑いした。

その頃真之介もお銀と篤馬に責められ懊悩の極みにあった。

「どうだ！真之介殿、良い気持ちであろう？最初は張り形の太さに、肉に食い込み、固くて
動かし難かったが、今は楽に動くぞ！」

篤馬が筒具の動きを速めながら笑いかけた。

「若様も随分と良い気持ちでしょう？こんなに大きくしてさ！」

篤馬の陰具の操作に煽り立てられ、何時の間にか勃起させてしまった肉茎の開いた傘の先端
を指先でツンツン突きながら隠微に頬を歪めた。

悪鬼達の隠微な責めの前に完全に理性を喪失してしまっている真之介は、嘲りの言葉も耳に
入らず、ただ苦しげに眉を顰め荒い息を吐きながら、じっと堪えていた。

度重なる淫虐を受け続け、子供の様に皮を被っていた真之介の男のモノも何時の間にか皮も
弾け、その下から隆とした亀頭を露わにする大人のモノに姿を変えており、その逞しい肉塊
を興味深げに正面に腰を降ろして撫で擦るお銀の姿を目にした篤馬が、

「お銀！お主、真之介殿の逞しいマラが欲しくなって来たのじゃろう？どうじゃ、此所で味
わってみたら？」

「えっ！良いんですか？それじゃお言葉に甘えて・・・」

篤馬の言葉に顔をパッと明るくしたお銀が、イソイソと着物の裾を捲り始めた。

そして、無毛の股間が露わとなった。

お銀は男達の日も気にならないように、熱をもって硬化した亀頭を自分の秘裂に押し付ける
と、そのままズブズブと太くて長いモノを呑み込んでいった。

「ああー！良いねえ！若い男の■■■■ポは本当に良いよ！」

根元まで押し込み、その硬さと熱気を股間に感じながら感激したように声を上げた。

そして、その感触を楽しむようにユサユサと腰を使い始めた。

お銀の腰の動きに併せるように、篤馬も陰具の動きを速めた。

お銀の鍛え上げられた極上の女陰と篤馬の巧みな淫具の操作に前後から責め立てられ、真之介は感に堪えられないような呻き声を上げた。

「さあ！口を吸ってやるよ！さっきはそこの旦那と口を吸い合って良い気分だったかい？」

お銀は両手で挟み付けるように真之介の頬を掴むと、唇を押し付けた。

真之介も熱に浮かされた様に唇を開き、互いに狂った様に舌を絡め合った。

その様子に檻の中の千鶴が憔悴して泣き崩れた。

「どうじゃ!真之介殿、仇討ちなどと下らぬ事より、こちらの方が余程面白いとは思わぬか？」

お銀の腰の動きに併せるように責め具を操作しながら笑いかけた。

篤馬の絶妙な筒具の操作とお銀の魔物じみた女陰の蠢きに煽り立てられ、真之介の脳髓に奔流の様に熱い刺激が襲い掛かった。

ウッと呻いて身体を硬直させ篤馬の握り絞めるモノを喰い絞めると、腰をビクビクと震わせてお銀の胎内に熱いほとぼりを浴びせかけた。

「もう逝ったのかい？駄目だね・・・珍芸の男役は半日でも一日でもそれをおっ立てたまま我慢しなきゃ・・・まあ良いよ、その内鍛えてやるからね！」

真之介の激しい痙攣を股間に受けながらお銀は隠微に唇を歪めた。

尻を嗜虐者の方に向けながら、一時（約2時間）^{いつとき}余りも慎之介は菊の座を攻め続けられていた。

「どうやら、この張り形も卒業の様で御座る。次はもっと太いモノに代えなければ・・・」

この間何度も女の様な嬌声を上げさせ、幾度も精を放出させた揚げ句、すっかり弛緩して滑らかに前後するようになった真之介の後口から張り形を抜き取ると、嬉しそうに篤馬が呟いた。

跡には激しかった肛門責めを示すように、ポツカリと大きく肉の口が開いたままとあっており赤黒い腸の内部構造を見せていた。

尻穴を責め立てる筒具と真面^{まとも}に対峙していた慎之介はそれを抜き取られた後も肩で激しく息を続け、顔面はびっしょりと汗にまみれ鼻の頭から汗が雫となって床に垂れ堕ちていた。

魔物じみた技量を持った男女からその肉の穴を責め具で抉られ、名状出来ない熱い興奮がその部分から奔流の様に後から後から逆流し、幾度も進らせた白い粘液が床にこびり付いていた。

「この分では、今日明日中に姉弟とも後ろの穴で卵が飲み込める程開けさす事が出来そうですね・・・」

お銀が嬉しそうに声を出した。

檻の中で千鶴がワッと鳴き声を上げた。

翌日の朝、何時もの様に姉弟が檻から引き出された。

二人とも昨夜遅くまで悪鬼達から責め立てられ、その部分はいまだに熱を持って疼き、その輪状の筋肉は柔らかく鬆され、単なる排泄口としての機能を超越してしまった肉の祠は、最早自分の身体の一部では無い様な気がした。

「先ず、慎之介を其処に縛り付けておくんなさいな。」

お銀に指示され男達が白木を縦横に組み合わせた檻の枠に慎之介を正面を向くように大の字に縛り付けた。

大きく開け放たれた股間には、お銀の女肉や手搔により鍛えられ、見違える様に成長した陰茎とその奥に陰囊が垂れ下がっていた。

突然お銀は右手を伸ばすと垂れ下がった袋を驚掴みにした。

疼くような痛みが股間から込み上げ、ウッと声を上げると苦悶の表情を浮かべた。

「安心おしよ！旦那の握力で握り締められたら金玉が潰れてしまうだろうけど、女の力なら丁度良いだろう？」

股間を襲う激痛に苦悶する慎之介の表情を窺いながら、笑みを浮かべて掌中の睾丸をグリグリと揉み上げた。

「こうやって揉んで上げると、金玉が鍛えられるんだよ。アンタは三四回続けて精を漏らすともう参ってしまうじゃないか！若いのにだらしないね！旦那なんか見てごらんよ。五六回続けて出しても平気な顔をしているよ！」

お銀に言われて、玄斎も満更でもない顔を浮かべた。

「だからこうして鍛えてやっているんだよ！こうやってタマを揉み上げると、ここの力が強くなるのさ！」

強い力で握り締め掌の中で睾丸を転がしながら言った。

お銀に力一杯揉み込まれギリギリする激痛とジーンと痺れるような切ない刺激が慎之介の脳髄を襲っていた。

お銀に握り締められる内に慎之介の肉茎に変化が訪れた。

陰囊を握り締められ苦痛に襲われながらも、淫肉に血が漲り、徐々に上を向き始めたのだった。

その様子を見咎めたお銀は、「おやおや、立って来たよ！アンタも存外こんな事が好きなんだね！」と、顔をほころばせた。

ムクムクと屹立を始めたそれは、ほんのこの間までは、十数年の間包皮に締め付けられていた少年のそれであったが、淫鬼達の手落ちまだ十日も経たないというのに包皮は完全に弾け、包皮に押し込められていた肉傘は外に向かって大きく開き、最早元に戻ることは無かった。

同年代の男なら異性に興味を抱き、性欲も盛んになるものであるが、お銀はその性向を逆手に取り、短期間に同年代の男が一年以上かっても経験できない程の激烈な肉体経験を無理強いしていた。

篤馬に面白半分に剥き出されたときは鮮やかな珊瑚色をしていた亀頭部も今は淫水に焼かれ全体に黒ずんで、男としては華奢で色白の身体に似合わぬ逞しさを示していた。

その大きく傘の開いた亀頭部の形といい、全体の大きさといい、この子は女を泣かせるお道具を持っているよと、垂れ袋を強く揉み上げながら繁々と観察した。

「良いさ、毎日こんな風に揉んで上げるからね・・・」と、長円形の肉球を袋ごとゴリゴリと揉み上げながら告げた。

お銀の手で陰囊を締上げられる痛痒感が、不可思議な刺激となって陰茎をそそり立たせていた。

そして、何かを期待するように鈴口からは透明な液が滲み始めていた。

その様子を観察していたお銀は、ピクピクと蠢く先端部に唇を寄せ舌先を伸ばして鈴口をペロリと嘗めて男の蜜を舌で絡め取った。

お銀に股間の袋を扱き上げられ、間歇的な呻きを上げて身悶える慎之介の姿を目にして、檻の中の千鶴が見てはならないものを見てしまったと目をそらした。

志乃と慎之介の姉弟は相変わらず全裸のまま後ろ手に縛られたまま床の上うつ伏せに倒されていた。

「そのまま尻を上にするのだ！」玄斎が冷たく命じた。

後手に縛られているため顔と胸で上体を支える形で腰を持ち上げた。

高く尻を擡げ嗜虐者に向かって無防備な双臀を晒す屈辱的な姿勢に姉弟は瞼を固く閉じ口を食いしばって咽び泣いた。

「もそっと足を開くのだ！」

残酷な男達に逆らえず、屈辱感を胸に占めて嗜虐者に向かって股間を開いた。

志乃と慎之介の双臀の狭間に隠されていた小菊の蕾にも似た恥ずかしい穴が露わとなった。

「ああ・・・良い具合に鍛えられて来たね・・・」

お銀が並んで尻を上げる姉弟の真ん中に腰を降ろし、両手をひろげて二人の尻穴に指を刺し入れ、その部分の状態を確認しながら言った。

「それじゃ昨日のおさがりがてら尻の穴にこれを突っ込んでその筋肉を解してもらおうか。」

二本の野太い張型を手に淫靡な笑いを浮かべた。

お銀から張型を受け取った玄斎と篤馬はそれぞれ志乃と慎之介の背部にそれを押し当てた。

お銀の調教の成果で肛門の筋肉を随意に弛緩させる技術を身に付けさせられた姉弟は、油で潤滑もされていないその太い棒をズブズブと吞み込んで行った。

後口から込み上げる熱い怪しげな刺激に姉弟の腰がガクガクとくねった。

僅かな鍛錬の期間であったが、二人ともここで楽しむことが出来る体になって来たとはくそ笑んだ。

四半刻ほど二人の悪鬼にその部分を蹂躪された姉弟は、女陰の奥から甘露な泉液を迸らせ、あるいは肉棒の先から白い樹液を噴出させて昇天した。

絶頂を迎えハアハアと肩で息をしながらグッタリと床に蹲る姉弟に、「本当にアンタ達はスケベな姉弟だね！ケツ穴をほじくられて逝ってしまうなんてさ！」と、嘲る様に笑い声を投げ付けた。

「それじゃ、いよいよ卵を入れるよ！・・・その前にコイツでもう少し身体を解してもらおうかね・・・」

と、二人に見せつける様に木製の棒を示した。

「何だ、それは？まるで播粉木みたいだな！」

玄斎が驚いて口を開いた。

そんなキョトンとする玄斎を可笑しそうに見て、「ええ、搗粉木ですよ」と、サラリと言っ
てのけた。

惣右衛門に告げて大きな搗鉢を運ばせて来た。

中には薄茶色のネバネバした物が入っていた。

玄斎達の目にはそれがとろろであることが判った。

「これは、自然薯と生姜と唐辛子の粉とその他諸々の漢方の薬を練り込んだ特製の媚薬です
よ。」

と、搗粉木で搗鉢の中の物をゴリゴリと搗りおろしながら言った。

「コイツを塗り込められると最初はカッて熱くなって次に痒くなって、何かをソコに欲し
がって仕方なくなるんですよ」

搗鉢を搗る手を緩めずに説明した。

「お主、無学な河原者のくせに漢方にも詳しいのか？」

男達が可笑しそうに笑った。

「最初に誰が発明したか知りませんが、内の一座に代々伝わる秘伝の処方ですよ・・・」

と搗鉢の中の物を練り上げながら説明した。

「それじゃそろそろ始めようかね・・・」

ニヤッと口元をほころばすと不気味な淡黄褐色のネバネバした物で塗された搗粉木を手に
姉妹に近づいた。

そのお銀の不気味な雰囲気には姉弟は恐怖感に包まれた。

そんな二人の怯えた様子にも気に掛けず、お銀はいきなり慎之介の肛口に搗粉木の先端を押
し込んだ。

ウッと悲鳴を上げ、体を硬くしたが不気味なとろろで潤滑された搗粉木はたちまち二寸程慎
之介の体の中に侵入した。

直腸に太い搗粉木を埋め込まれ苦悶の表情を浮かべる慎之介に、「どうだい？ 良い気持ちだ
ろ？ 尻の中がカッカって火照って来ろ・・・その内痒さが込み上げて来るよ・・・」と、搗粉木
で肛門を振じりながら笑った。

「次はお姉さんの方にご馳走しようかね・・・」

慎之介への悪さに飽きたように、新たに搗鉢の中のとろろを塗して、志乃に迫った。

「ああ・・・嫌です！お許し下さい！」

不気味な笑みを浮かべる鬼女から逃れようと悲鳴を上げて尻を振ったが、玄斎と篤馬の二人から腰をがっちりと抑え込まれ、二人の手により尻たぶを大きく広げられてしまった。

大きく寛げられた白い谷間には可憐な小菊が一輪咲いていた。

お銀はその小菊の中心を目掛けて播粉木の先端を押し当てた。

「ああー！嫌です！嫌です！ああー！痛い！」

志乃の身悶えも無視して播粉木は後口を押し分け内部にズブズブと潜入した。

「どうだい？カッカと熱くなってきたろ？」

播粉木を操作しながら意地悪く尋ねた。

姉弟は入口から腸内深くまで塗り込められた不気味なとろろの効力に苦悶していた。

「とろろはまだまだ一杯在るからね。遠慮せずにどんどん食べれば良いよ。但し下の口からだけだね・・・」

お銀が笑いながら何度も怪しげなとろろを塗した播粉木で二人の肛口を責め立てた。

最初は、カーッと燃え上がるような灼熱感が突き上げて来てドクドクと心臓の鼓動が早くなったが、何度かとろろを注ぎ込まれる内に堪えようの無い痛痒感が込み上げて来た。

「ああ・・・痒い！」

姉弟は加虐者の目の前で、恥も忘れて尻をモジモジさせ始めた。

「ほほ・・・痒いかい？」

特製とろろの効果に満足したようにほくそ笑んだ。

「それじゃ、これに搔いて貰うんだね・・・」

猛烈な痒みに襲われ身悶える二人に見せつけるように卵を手にした。

かつて経験した事の無い直腸から込み上げる痛痒感に何でも良いから内側から搔きまわして欲しいとお銀の手にする卵を見詰めた。

「ほな、行きまっせ・・・」

惣右衛門が志乃の後口に卵を押し当てた。

慎之介には篤馬が卵を押し当てた。

「おおー！入って行きよる！」

待ち兼ねていた様に菊座の輪状の筋肉が柔らかく押し開き、押し当てられた卵を嚥下していく様子を惣右衛門が驚きの声を上げた。

飲み下した卵に少しでも痛痒感を癒してもらおうと、二人は尻を激しく振り立て腸管を卵に擦り付けた。

「一個では足りないのでは無いか？もう一個ご馳走すればどうじゃ？」

玄斎が新たな卵を手にした。

後手に縛られ、床に頭を擦り付け尻を高くもたげた姿勢のまま二人は二つの卵を腸内に埋め込まれたまま悶え狂っていた。

其処には淫らな姿を仇の目に晒す恥も外聞も忘れ去られたようであった。

激しく尻を振り立てながら悶え狂う姉弟には最早理性の欠片も消し飛んでしまっている様子だった。

「おお、これはどうじゃ！」

いつの間にか慎之介の股間のモノが大きく膨らみ前に突き出し、志乃の披裂からは蜜が滴り落ちている事に気付いて驚きの声が上がった。

「折角ですから、お二人をこのまま繋がらせてやったらどないでおましょ？」

「おお！それは良い考えじゃ！」

玄斎と篤馬が床の上で悶え狂う姉弟を立ち上がらせ、向かい合わせた。

間に腰を降ろした惣右衛門が慎之介の怒張を握ると濡れそぼる志乃の中心にあてがった。

込み上げる激しい快感に淫鬼と化した姉弟は悪魔どもが何をしているかも理解する力も失ったまま、背後から押されるままに繋がっていった。

慎之介の剛直が志乃の柔らかな肉襖に埋め込まれていった時、檻の中の千鶴が激しい悲鳴を上げたが、淫欲に狂う二人には最早耳に入らなかった。

込み上げる性欲の業火に焼かれた姉弟は、腸管を襲う激しい刺激と股間から込み上げる甘美な刺激に酔い、淫らな声を上げて激しく腰を打ち付け合った。

「お二人とも余程これが気に入った様子ですな。暫くこのままにしておきましょうか。」

と、縄を持ち出し二人が離れられないように姉弟の身体を一つにして、ぐるぐる巻きに縛り上げた。

そして、新たな縄を持ち出し、天井の棧を潜らすと立位で吊り上げた。

劣情に狂った二人は、実の姉弟で交わっているのも気が付かないのか、縄で一つに縛り上げられたまま立位で繋がっていた。

そんな汗にまみれて腰を振り立て欲情に浸る二人を取り囲んで、悪鬼どもは酒を酌み交わしていた。

意識が白々と回復して来た。深い^{もや}靄が晴れて行くように感じた。

腸管を襲っていた痛痒感はすっかり消え失せ、ただ異物が腸内に残されている事だけが感じられた。

自分が、縄で縛り上げられ、天井から吊り下げられ立たされている事に気付いた。

そして、弟が目の前に自分と身体を密着させて縛り上げられている事に気付いてギョッとした。

自分の膣奥に力を失った弟の分身が残されている事に気付いた。

大腿は自分の垂れ流した夥しい愛液と弟の精液で濡れていた。

驚愕すべき事態に、体は震え悲鳴を上げそうになった。

姉の身悶えに意識を取り戻した慎之介が姉の裸身と密着しているのに気付いた。

そして、姉の胎内に自分の肉塊を突き入れたままであることに気付いて、顔面が蒼白となり、

「姉上！姉上！」と後は言葉に成らず志乃の肩に顔を押し当てて泣きじゃくった。

「いやはや、^{おもろ}面白いもんを見せて貰いましたわ！」

惣右衛門が笑顔で顔をくちやくちやにしながら手を叩いて喜んだ。

「今更泣いても遅う御座る。慎之介殿も愛する姉上の腹の中に思いの丈をぶちまけて思い満足された事であろう・・・」

嗚咽する慎之介の背に手を当てて篤馬が笑い掛けた。

「舞台では男と女がくんずほぐれつの^{まぐあ}嬌いを見せる演目は大人気だけど、実の姉弟が白黒を演じたら客に受ける事請け合いだよ！」

客の前で慎之介と志乃が情交を演じる様子を想像して、お銀が嬉しそうな声を上げた。

「ほらほら、何時までも泣いてないで腹に収めたものを出すんだよ！」

互いに咽び泣きながら裸身を押し付け合って縛り付けられた二人の尻をポンポンと叩いた。

ピタリと閉ざされていた尻穴がムクムクと蠢き、表に向かって開き始めた。

そして、肉の穴の奥から白い卵が姿を見せ始め、グングンとその形を大きくすると、ぽとりと待ち受ける悪鬼達の掌の上に産み落とした。

嗜虐者達の笑い声が部屋に響いた。

「そら！もう一つも出すんだ！」

尻を平手でピシャピシャ叩いて排泄を促した。

最初に入れられた卵は二個目の卵に押し上げられて、腸管の奥深くに埋没していた。

二人は、眉根に皺を寄せウンウンと呻き声を上げて腰をくねらせ、下に押し下げようとした。

淫靡な腰の動きが志乃の肉胴内に取り残されたままの慎之介の分身を刺激した。

二人は額に汗を浮かべて二個目の卵を産卵した。

「おや？後の卵は少し色も黄色いし臭いもしますな。」

惣右衛門が二個の卵を手にして見比べながらからかった。

惣右衛門の下劣な言葉に志乃の頬が赤くなった。

「ほら！今度はまた入れる練習だよ！」

お銀が新たな卵を手二人に迫った。

二人は縛り合わされたまま、息を吐きそれを菊座の窪みに受け止めた。

眉根に皺を寄せ、短い息を繰り返して、自らの力でそれを吸い上げようとした。

腸内に吸引しようと腰をくねらせ卵と格闘する淫靡な腰の動きが志乃の膣内に残されたままの慎之介の男のモノを刺激した。

薄い隔壁一枚を通して卵が上昇して来る様子が慎之介の陰茎に伝わった。

そして、自分の腸管を潜る卵の動きが不可思議な刺激となって脊髄を通して脳に伝達された。

いけない！と思っても若い慎之介の分身は心を裏切ってムクムクと志乃の中で硬度を増していった。

自分の体の中で突然膨張を始めた弟のモノに志乃は狼狽^{うろたえ}えた。

硬度を増す弟の男根と腸内の卵に挟まれ、その魔物じみた快美感を伴う刺激に悲鳴のような声を上げた。

そんな二人の様子にも気遣うことなく、男達は二個目の卵を押し入れた。

実の姉と交わるという背徳感に苛まれていた慎之介であったが、これまでの肉体鍛錬で極上の性器に鍛えられていた志乃の華洞におのれの肉体の一部を突き立て、この世のものとも思えぬ目くるめく性感に襲われ続けており、二個目の卵が腸管に侵入し慎之介の怒張を裏側から撫で上げた時、とどめを刺された様にウッと腰が痙攣し、志乃の膣内で爆ぜた。

志乃も猛々しく育った慎之介の怒張から熱い精液が自分の胎内にドクドクと注ぎ込まれている事を感じ、つられた様に腰を痙攣させ絶頂に達した。

絶頂時の強い腹圧に押し出され、二人の肛門から卵が勢いよく飛び出して床に当たって砕け散った。

「姉弟で交わりながら卵を出し入れする芸は受けるかもしれんな・・・」

玄斎が濁った眼で、縄で吊り下げられたまま絶頂の余韻にピクピクと腰を痙攣させながらぐったりと顔を寄せ合う二人を見詰めて呟いた。

「流石は仲の良い姉弟だ！ぴったり息を合わせて逝くとは大したもんだ！」

篤馬が嬉しそうに手を叩きながら近寄って来た。

「そんなに仲睦まじいなら、口を吸いあったらどうだ。」と、言う二人の後頭部を掴んで押し付けた。

余りに強い性感の衝撃で頭は混乱し、実の姉弟で交わっている実感も忘却してしまったのか、二人は潤んだ目で互いを見交わし、篤馬に強いられるままに唇を寄せ合った。

二人の柔らかな唇が触れ合うと、その後はまるで熱にうかされたように互いに激しく舌を絡め遣い、唾液を吸いあった。

その二人の激しい口吻の様子を加虐者達は驚いた眼で見続けた。

濡れそぼった志乃の胎内で慎之介の若い肉塊が再びムクムクと蠢き始めた。

それから何日も、鬼女たちの手により姉弟の卵産みの稽古が続けられた。残忍な男女が期待したように姉弟の肉体改造は順調に進み、二人とも流暢に鶏卵を体内に吞み込み又生み出すことが出来る様になっていた。

二人は両手を頭の上で縛られ、その縄は天井の梁に通され、立位に拘束されていた。

「ほら、入れるよ。」

志乃の前に胡坐を掻いたお銀が箆から卵を一個手にすると全裸で天井から吊るされる志乃の股間の方に持って行った。

志乃はお銀の作業を手伝うように股を開いて腰を落とした。天井からの綱は転倒防止の為であり、吊り下げられたままへっぴり腰の姿勢を取る程度の余裕はあった。

志乃が無言のまま股間を開きお銀の方に差し出すように秘裂を向ける様子に、この娘も随分と素直になったものだ、あるいはこんな淫猥な芸を演じることに喜びを感じるようになったのかと、見詰める男達は訝った。

お銀が卵をそっと秘裂の狭間に押し当てると、赤みを帯びた鮮やかな女陰の組織が妖しく蠢き始め、お銀の持ち添える卵を奥へ奥へと吸引し始めた。

やがて、お銀が手を離した後、白い表面を見せていた卵は幾枚もの鮮紅色の襷に包まれ、その姿を消していった。

完全に肉体内に埋没したことを目視した男達からホウッというため息の様な声が聞こえた。男達の感嘆する様子にお銀はニヤッと片頬を緩めた。

「ほら、今度は後ろだよ！」

お銀に命じられて、志乃は無言のまま後ろを向くと、お尻をお銀の方に突き出した。

「ほら！もっと入れやすいように脚を開くんだよ！」

突き出した志乃の尻をペンペンと叩いた。

お銀に向かって尻を突きだし、腰を落として、大きく開いた白い股間の狭間に堇色の菊花がひっそりと咲いていた。

「ここは、元々潤いの無い所だから、滑りを良くしてあげないといけないね・・・」と、口にすると、傍に置かれていた挿鉢に入った、とろろを素材とした媚薬にどっぷりと卵を浸すと、濡れ輝る卵を後口に押し当てた。志乃のその部分は、まるで待ち受けていた様に妖しく蠢き、肛門の筋肉をピクピクと弛緩させ開き始め、お銀の手にする卵を呑み込み始めた。

最初、菊座から目玉の様に飛び出していた卵はスルスルと腸内に呑み込まれて行き、やがて完全に姿を没した。

見詰める男達から再び溜息が漏れた。

「さあ！今度はお前だよ！」

お銀が並んで立位に吊り下げられた慎之介の方に位置を変えた。

慎之介も姉に倣うように、黙ってお銀に向かって尻を突き出した。

ウッウツと声を上げ、顔を顰めて、菊花の筋肉を励まし、お銀の持ち添える卵を腸内に収めようと努めた。菊座の中心から飛び出していた卵は腰をビクビク震わせる度に体内に吸い込まれて行った。

慎之介が汗を浮かべて淫猥な技術を試みる間に、股間のモノがムクムクと元気を取り戻していた。

それに気づいたお銀が袂で口を押えて笑いながら、「お前も本当はこんなことが好きなんだね・・・舞台で珍芸を披露する演者に一々こんなモノをおっ立てる男は居ないけど、まあ、これも可愛らしくて良いやね！」と、逞しく起立したモノを撫でながら言った。

「それじゃ、今度は腹の中に収めた物を産み落としてごらん！ニワトリらしくコケコッコウ

て鳴きながら産み落とすんだよ！」

お銀の人の尊厳を踏みにじる命令に、姉弟は恥辱に大粒の涙を流し、声を詰まらせながらコケコッコと鳴きまねを演じた。

志乃の秘裂を開いて卵が落下し、次にピッタリと閉じあわされていた菊座の蕾を開いてニュと卵が姿を現した。

慎之介の双臀の狭間からも勢い良く卵が飛び出した。

二人の開け広げられたままの股の下には床に落ちて砕けた卵が在った。

恥辱の芸を強制された姉弟は余りの惨めさに、縄で天井から吊るされたまま嗚咽していた。

そんな涙に暮れる姉弟の様子も気にせず、お銀は、「一応卵産みの芸は人様の前でも見せられるように身に付いたようだね。あと卵割とか、銭すくいとか、蠟燭消しとか、色々覚えなきゃいけない芸は沢山あるけど、取り敢えず一つ芸を覚えたのだから約束通りお祝いしないといけないね・・・」と、ニヤッと片頬を歪めた。

「旦那！この娘を吊り下げる縄をもっと引いて、両足首にも縄で縛って大きく広げて下さいな。」

お銀の指示を受けて男達は卑猥な笑みを浮かべてイソイソと作業を進めた。

後には人の字型に天井から両手で吊り下げられ、股を大きく開いた志乃の姿があった。

これから自分が何をされるのか怯える様子の志乃であった。

「前にも言った通りこの珍芸を披露する演者は、お客様の目から芸が見え易い様に、何時も此処の毛は剃っておくのさ。」

剃刀を手にお銀が嬉しそうに笑った。

自分の下の毛を剃り上げられると知った志乃は羞恥のあまり、アア・・・嫌です！あまりです！と悲鳴のような声を上げた。

「何、馬鹿みたいに大きな声を出しているのさ！すぐ終わるからジッとしているんだよ！」志乃の悲嘆にも全く関心を示さず、剃刀の刃先を剥き出しの股間に当てた。

玄斎と篤馬が左右から大腿を押さえ付け動きを封じた。

お銀が剃刀を這わす度に、ヒッヒッと呻き声が上がった。そしてその都度女の最も大事な所を隠す髪が薄くなっていった。

お銀の刃の下でこの女の秘部が露わになっていく様子を、志乃の大腿に抱きつきながら見ていた。

この娘に恨みが有る訳では無い。そしてこの娘の父母に恨みが有る訳でも無い。むしろこの娘の父親は自分のために、十分働き回ってくれたのだ。恨みどころか感謝をしなければならぬところだ。しかし、自分はこの娘の父親を切り殺してしまったのだ。そして、それだけでなくこの娘の母親を犯し尽くして孕ませ、自害に追い込んでしまった。更にその事を知らぬ姉弟をだまして此处へ誘い出し、凌辱の限りを尽くした。およそ日ノ本の国の開闢^{かいびやく}以来自分程悪逆な男は居ないだろうと、志乃の柔らかな大腿を抱きしめながら思った。

今すっかり繁りを失い秘裂を晒す股間を見詰め、歴史上かつて無かった悪が完成し、世の中に蔓延る通説的な正義が完敗する瞬間だと、背筋に電撃が走るような感慨に浸った。

そんな感傷に浸る玄斎に気付くことも無く、「前はすっかり終わったから、今度はケツ穴の周りのムダ毛を剃りますから、お尻の穴が見える様に脚を支えて下さい。」と、極めて事務的に声を上げた。

篤馬が志乃の左脚を縛っていた縄を解き、肩に担ぎ上げて支え、玄斎が右脚を押さえ付けた。

こうして後ろの恥ずかしい部分も丸出しにされ羞恥に悲鳴を上げた。

お銀はそんな志乃の狼狽ぶりもまるで気にせず、

「高貴な武家のお姫様が、こんな所にみつともない毛を生やしていたら駄目じゃないか・・・」

と、その部分の周りに生える痴毛を繁々と見詰めながら、剃刀をはわせ始めた。

こうして、逆三角形に前を覆っていた艶々としていた茂みも、左右の陰唇に沿って生えていた陰毛も、菊花の周りの痴毛も全て剃り上げられてしまった。

「ほら！見て御覧！すっかり綺麗になったよ！千鶴より若返ったみたいじゃないか！」

自分とは棲む世界が違っていた武家の姫を此处まで貶めたことに勝ち誇ったように満面に笑みを浮かべ、手鏡を持って色々な角度から照らして、剃毛の結果を志乃に見せようとした。そんなお銀の陰険な態度に力無く首を振り、涙を流して啜り泣くだけであった。

「ほら！何を泣いているんだい！しっかりと見なきゃダメだろう！アンタは今後何時も此处を綺麗にしておくんだよ！自分で手鏡を持って剃らなきゃいけないんだからね！」と、厳しい言葉を投げ付けた。

「さて、若様の方はまだケツの周りに毛が生え揃って無いからそのまま良いか。」と、慎之介の尻を両手で開き覗き込みながら呟いた。

「さて、志乃殿もすっかり若返って、艶々とした割れ目が丸出しになったところで、ちょっ

と一働きしてもらおうか」と、手をパンパンと叩いた。

そう口にする玄斎の頬が淫靡に歪んでいた。

鬼畜道場

夜の赤坂無捻流の道場　―　昼間多くの門弟たちが剣技を競っていた鋭い気迫の声は今は無く、シーンと静まり返った道場の中には師範や師範代など玄斎自慢の腕利きの腹心達十数名ほどが残っていた。

神棚が奉られ掛け軸が掛けられた上座には玄斎と篤馬そしてお銀が腰を降ろしていた。

腹心達はそれぞれ道場の壁を背に胡坐をかいて座っていた。

男達を取り囲む道場の床には、二つの黒塗りの大きな^{ながいつ}長櫃が置かれていた。

先ほど恵比寿屋から運び込ませた物であった。

腹心達はこれから何が始まるのかと、じっと漆塗りの大きな櫃を見詰めた。

玄斎がやおら立ち上がると二つの櫃の前に進み封印を解いて、篤馬も手伝って蓋を開けた。

「さあ、出られるのじゃ！」

二人は、櫃の中を覗き込むように身を乗り出し、手を差し入れた。

玄斎達に担ぎ出されて裸の二人の若い男女が櫃から姿を見せた。

長時間狭い箱の中に窮屈に身体を折り曲げられ押し込められていたため、二人とも外から引き上げられないと出られない様子であった。

二人は高手小手に縛り上げられ、口には手拭いで厳しく猿轡がされていた。

恵比寿屋の秘密の蔵の中で無理やり長櫃に押し込められて、着いた先が剣術道場の中である事に気付いた二人は驚いた表情を浮かべて目を左右に走らせた。

そして、其処に二人を収めた櫃を取り囲むように厳つい風貌の男達が怪しげな目で睨みつけている事に気付いて恐怖を覚えた。

玄斎と篤馬に支えられ櫃の中に立たされた二人の全体像を目にして高弟達からゲラゲラと笑い声が上がった。

門弟たちは大げさに姉弟の姿を指さして哄笑したり手を叩いて笑い転げた。

何と慎之介の腰には姉の使用していた桜色の腰巻が巻かれ、志乃の腰には黒い六尺褌が締められていたのだった。

男としては小柄で華奢な色白の慎之介は女が身にする下着を巻かれており、成熟した女の撫でやかな身体つきを示す志乃の腰には黒絹の褌が股間の媚肉を割ってキリキリと締められていた。

最初男達は美女の男姿と美少年の女姿を指さして下卑た笑い声を上げていたが、次第に二人の或る種妖艶な姿を目にして魅入られるように生唾を飲み下しながら二人の裸像を見詰めていた。

美顔の頬肉に食い込むように厳しく上下の歯の間に食い込む猿轡、成熟した柔らかな乳房を縊り出す様に上下から締上げる何本もの麻縄、白くまろやかな尻の谷間に食い込みその秘谷に姿を没する艶やかな光沢を発する黒絹の締込。

そして、その隣では女の髷を結わせ簪でも挿せば、美少女として通用しそうな色白の美形の若者が、腰巻姿を見られるのを恥じる様に腰をモジモジさせる様子が逆に男達の劣情を誘った。

腹心達の反応に気を良くした玄斎が、

「紹介しよう！このお二人が儂の事を親の仇と付け狙ってわざわざ川田の地よりいらした笹川姉弟じゃ！」と、満面に笑みを浮かべて説明した。

赤坂道場の高弟達は玄斎と一心同体の腹心達であり、玄斎と同じように剣の腕はめっぽう立つが人の心は持たぬ悪鬼達ばかりで、仇討ちに来て無残に返り討ちにあった姉弟に同情する者は無く、逆に惨めに捕らえられた美形の姉弟に嗜虐の情念を抱くのであった。

「面白い！先生に仇討ちを挑もうなど、どれほどの腕前か見てやるわ！」

取り囲む男達の中から髭面でがっしりとした体格の男が立ち上がり、壁に掛けられていた竹刀を手にした。

他の高弟達も面白そうに、道場の中心に置かれていた長櫃を隅に追いやり、二人の両腕を後ろ手に拘束していた縄を解いて木刀を握らせた。

突然の事態であったが、二人には目の前の男を倒すしか選択の余地は無かった。

木刀を構える半裸姿の姉弟と竹刀をブンブンと振り回す大男の対決に、取り囲む門弟達も面白そうに成り行きを見守った。

二人対一人、木刀対竹刀で姉弟の方が圧倒的に有利なはずであったが、この髭面は姉弟の技量を完全に見切っている様子であった。

キエーッ！と、切り裂くような奇声を発すると脱兎の如く姉弟に迫り、竹刀で慎之介そして次に志乃、そして又慎之介と目にも止まらぬ早業で姉弟を打ち据えた。

ビシッ！ビシッ！と竹刀が二人の身体に決まる毎に骨の髄まで沁みる激しい痛みを覚えた。取り囲む門弟たちは、志乃が身体をくねらす度に柔らかな乳房が躍る様に揺れる様子を舌なめずりして眺めた。

男から竹刀を打ち据えられる度に姉弟の雪白の身体には赤い痣が広がっていった。

散々打ち据えられて、激痛で両腕が思う様に動かせ無い姉弟の構える木刀に竹刀の先をこじ入れると、思い切り払い上げた。

持ち手の居なくなった木刀が宙を飛び、道場の床に転げ落ちた。

丸腰となった慎之介を蹴り倒して、前のめりに床に倒れたところを後ろから竹刀で突き刺した。

猿轡を解く余裕も無く試合に巻き込まれた慎之介は、言葉も発する事も封じられた口から喉の奥から絞り出すような悲鳴を上げた。

竹刀の先端が薄い腰巻の布を巻き込んで慎之介の後口に深々と埋まっている事を見て、見物の高弟達から喝采が上がった。

道場の床に苦悶して這いつくばる慎之介を残して男は志乃に迫った。

恐怖に怯える女に舌なめずりした男は、抵抗する気力も喪失した志乃を仰向けに床の上に蹴倒すと、その柔らかな乳房に竹刀の先を突き刺した。

「この程度の腕で先生に仇討ちを挑もうなど、十万年早いわ！」

男は乳首ごと志乃の豊かな乳房の中に竹刀の先端を押し込んだ。

薄い桜色の乳暈が竹刀の切っ先に押し込まれて白く柔らかな乳房の中に没していた。

男はグリグリと竹刀を突き立て哀れな女をいたぶりながら勝ち誇った声を上げた。

門弟たちが一斉に立ち上がると床の上に苦悶している姉弟に近寄った。

そして、左右から手を伸ばすと志乃と慎之介が唯一身に着けていた物を引き剥がしにかかった。

「この若造、娘みたいな綺麗な顔をしているくせに、黒々とした傘の開いた大松茸を持っておるぞ！」

「これなら女も喜ぶ事だろう！」

慎之介の腰から腰巻を奪い取った男が笑いながら叫んだ。

「姉の方は褌が緩んでいて先程は切っ先が定まらなかったのでは無いか？ ^{それがし}某が直して進ぜよう！」と、笑いながら声を掛け、柔らかな^し肉置きの大腿の間を縦に割る布地を前後から握り締めると思い切り引っ張った。細い紐と化した褌は志乃の陰唇に深々と食い込み白く柔らかな二枚の花弁の中に姿を隠した。

前後から締込をグリグリと扱き上げ秘裂を摩擦したので堪らず悲鳴が上がった。

「おお！姉の方はあるべき所に毛が無いでは無いか！」

一本の紐の様になった黒絹の褌から露出した部分を繁々と覗き込んで驚きの声を上げた。

「本日この道場を訪問するに当たり、門弟の皆に自分の身体の隅々まで良く見て貰いたいと、殊勝な事を申すので、此処に来る前に剃り上げてやったのじゃ！」

玄斎が笑いながら応えた。

敏感な貝肉に食い込むざらつく布地に激痛を覚え、猿轡を嵌められた口から呻き声を上げ、腰を悶えさせたが、男は許さず尚も両手に握り締めた布を激しく前後に動かして、志乃の秘肉を責め立てるのであった。

道場では酒宴が始まっていた。

滑稽な男と女の下着姿を晒していた姉弟は今は全裸に剥き上げられ、厳しく高手小手に縛られ冷たい道場の床に下劣な男達に囲まれて蹲っていた。

姉弟が死に物狂いになって暴れ出しても、ここに控える屈強な男達にとっては痛くも痒くも無いが、二人を縛り上げたのは、縄化粧をした方が裸身が、より映えると考えた玄斎の嗜虐趣味であった。

哀れな姉弟の裸姿を肴に男達は酒盛りを続けていた。

お銀が笑顔を浮かべて品^{しな}を作りながら男達に酌をして回った。

お銀が玄斎の妾である事を知っている高弟達は口には出さなかったが、醜女から媚びを売るような仕草で酒を注がれて逆に酒が不味くなる様に感じていた。

オホンと一つ咳払いをすると、「これだけの人数にお銀殿一人で酌をして回るのも大変であろう？志乃殿にも手伝ってもらえば良いのでは無いか？」と、暗に美人に酌を代われと発言した。

男の真意を理解したお銀がプイッとむくれた顔をしたが・・・

「とは言っても、志乃殿は後ろ手に縛られておるからのう・・・」

玄斎が困ったように口を挟んだ。

玄斎の言葉に、お銀の顔がぱっと明るくなった。

「それじゃ旦那、こうしたらどうでしょう？」

と、一言口にして、パッと立ち上がると、酒肴の用意の為の奥の部屋に志乃を連れて立ち去った。

暫くして、また二人が姿を現した時、男達から歓声が上がった。

「おお！これは良い！」

男達が手を叩いて笑い声を上げた。

相変わらず手拭いで猿轡され厳しく高手小手に縛められたままであったが、そのふくよかな大腿で大徳利を挟み込んでいた。

志乃の太腿の間から挟まれた大徳利がその姿を見せていた。

徳利は志乃の柔らかな太腿の肉に挟まれているだけでなく、歩いても落下しないよう何本かの細引きで縛られ、その内一本は尻肉を割って背後に回り、まるで股縄を掛けたように臀丘に食い込んでいた。

全裸姿を晒すよりある意味恥ずかしい姿に顔を赤く染め項垂れる志乃を支える様にお銀が道場の中に連れ込んだ。

慎之介は姉の悲痛な姿を目にして固く目を閉じ俯いた。

「これは、これは、志乃殿！真に男に成られた様では無いか！」

「男でもそのように大きなものを股の間から突き出す者は居らんぞ！」

股間から男根の様に徳利を突き出す姿にはしゃいだ声を上げた。

「こうして徳利がアソコに密着していれば、人肌のお爛もつくってもんですよ！」

考案したお銀が自慢するように言った。

「それでは、早速酌をしてもらおう！」

一人の男がお猪口を差し出して声を上げた。

「はいはい、今参ります。」と愛想笑いを浮かべると、「ほらほら、^{こぼ}溢さない様に気を付けて歩くんだよ！」と、股間に大徳利を挟んでヨチヨチ歩きの志乃の良く張った尻を平手でピシヤリと叩いた。

両手が使えない不自由な姿勢のため上体を前に折って酒を注いだ。

前屈みの姿勢となったため、上下から麻縄に縊り上げられ、垂れ下がった乳房が酌を受ける男の顔にピシヤピシヤと当たったが、逆に男は嬉しそうな表情を浮かべた。

こうして、お銀に引きずられて何人もの男に酌をして回った。

アアーッ・・・イヤ・・・と、言葉にならない呻き声を発した。

股間から込み上げる甘美な刺激に志乃の顔が思わず赤くなった。

意地の悪いお銀が徳利を括る紐の股間を潜り女の大事な部分に触れる所に瘤を作っておいたので内股を閉じてヨチヨチ歩きするたびに其処を刺激していたのだった。

全裸で男達の前を引き回される羞恥と股間から込み上げる妖しい刺激で志乃の身体は赤く火照り始め、瘤と密着する部分からは甘美な樹液が潤い始めていた。

その変化に気付いた男が、「酒の匂いに交じって何やら妖艶な女の匂いが漂って来たな・・・」と、志乃の股間に鼻を近付け臭いを嗅ぐ仕草をした。

浅ましくも感じてしまっている事を知られたと思い、男の動作に志乃の顔がカーッと熱くなった。

志乃を引き回しながら、彼女の変化に気付いていたお銀は、この女も局所を襲う細引きのざらついた痛痒感を甘美な刺激として捉え、男達の目に恥ずかしい姿を晒すことに女の秘壺を濡らす感覚を覚え始めたのだと想像して、心の中でほくそ笑んだ。

すっかり酒のまわった男達は、満面に喜色を浮かべ、「そろそろ先生から伺った珍芸を見せて貰いたいものですな・・・」と、ねだった。

上座で酒を飲んでいた玄斎も、良かろうと、鷹揚にうなずいた。

お銀が控えの部屋に消えると、笹一杯に卵を載せて戻って来た。

「まだ珍芸の修行を始めて日も浅いので、お銀の様には色々な芸は出来ぬが、これまでの鍛錬の成果を見せてやるのも良いであろう・・・」

自分を親の仇と付け狙った姉弟に、自分の子飼いの門弟達の前で非人の恥かき芸を披露させる事に、痺れるような快感を覚える玄斎であった。

これまで散々この身を凌辱して来た三悪人だけでは無く、不良道場の野卑な男達にも恥辱を晒さねばならぬのかと思うと惨めさが込み上げ、猿轡を嵌められた歯を食い絞め、悔し気に瞼を硬く閉ざしても大粒の涙が零れ落ち頬を伝った。

男達はワイワイ騒ぎながら嬉しそうに天井の梁から縄を降ろし、姉弟を立位に吊るす準備を始めた。

天井から吊り下げられフラフラ揺れる太い麻縄を姉弟は怯えたように見つめていた。

「さあ！出来ましたぞ！お二人には其処に立ってもらいましょう。

男達は後手に縛られた姉弟を立ち上がらせ、無理やり縄の下に連れて行き梁から下がった縄に繋ぎ留めた。

こうして二人は互いに向かい合う姿勢で立たされた。

天井から降ろされた縄は、二人を空中に吊り上げる為のもので無く、転倒防止のための準備であったので姉弟はある程度前後左右に身体を振ることは出来た。

用意が整い道場の床の上に並んで全裸で立たされている姉弟の姿を見詰めた。

飾り毛を奪い取られ、妖艶な肉の花のような、あるいは艶美な二枚貝のような割れ口は童女のその様であったが、悪鬼達から入れ替わり立ち代わり常に色々なモノを咥え込まれ鍛えられたその部分は、単に成熟した女性器を超えて生々しく発達し、肥大した甘美な肉片を晒し、見る者の目を釘付けにした。

一方慎之介の方もお銀から来る日も来る日も肉棒の鍛錬をされ、最近では実の姉と繋がることも強制されるようになり、女との交わりで淫水焼けした男根が、男としては色白のまだ成人というには未成熟な体と比較して不釣り合いな程大きく黒々と輝き垂れ下がっていた。

アッ！と思わず志乃と慎之介の猿轡を嵌められたままの口から呻き声が上がった。

姉弟の間にどかりと胡坐をかいて腰を降ろしたお銀が両手を広げて、二人の股間を触ったのだった。

「フーン、これまで色々修練して来たけど、こんなに大勢のお客さんの前で芸を披露するのは初めてだから緊張しているようだね・・・こんなに乾いては入るモンも入らないよ・・・」と二人の股間をまさぐりながら呟いた。

そして、よっこらしょ、と腰を上げ、何かを取りに奥の部屋に向かった。

暫くして、奥から挿鉢を持って現れた。

挿鉢には何やら得体の知れぬとろろ状の黄褐色のネバネバした物が入っていた。

それを目にして姉弟は、これまでの経験からそれが何であるか分かった。

それを秘部に塗り込められると、体がカーッと熱く燃えて来て、興奮状態に陥り、理性も何もかも消し飛び、ただ何かをその部分に入れて貰いたく身体が疼き始めるのだった。

「ちょっと待て！お銀」

これまで黙って酒を飲んでた篤馬が声を発した。

篤馬の制止の声に姉弟は一瞬篤馬から助けが入るのでは無いかと期待した。

しかし、残虐性に関しては父親以上のモノを持つ篤馬が姉弟に対してそんな憐憫の情を持っている訳が無かった。

「お二人はこれからケツメドを開いて芸を披露するのであろう・・・それなら、^{はらわた}腸の中まで綺麗にしておいた方が良いのでは無いか？」

何か淫靡なモノを期待するように、残忍な視線を向ける篤馬に立位に縛り上げられた姉弟の貌が青くなった。

「ああー、そうでしたね・・・私としたことがうっかり忘れていましたよ・・・」

と、呟くように口にするとう頭を掻きながら控えの部屋に入って行った。

そして、木桶と源蔵徳利と呼ばれる酒屋から酒を仕入れる時に使用する壺の様な形状の一升は楽に入る大きな陶器の容器を下げて戻って来た。

桶の中では、惣右衛門が^{エネマ}絵寝間と呼ぶ真鍮製の浣腸器がコロコロと転がっていた。

「そうそう、私としたことがうっかり忘れていましたよ・・・今日のためにお二人には三日間もお通じを我慢させていたんですからね・・・」

と、床の上に道具を並べ浣腸の準備を始めながら嬉しそうに口にした。

源蔵徳利の首に掛けられた荒縄に指を通し、陶器の酒瓶の端を持ち上げてドボドボと一升入りの容器から桶の中に何やら透明の液体を注ぎ始めた。

その不気味な雰囲気不安そうな表情を浮かべる姉弟に気付いたお銀は、

「これが気になるかい？・・・これはね恵比寿屋さんが紅毛人から買い受けた、お腹の中のウンコを綺麗に溶かすお薬さ！普段使ってるお湯の何倍も効き目があるって話だよ！」

と、これから二人を襲うであろう効果を想像して、満面に喜色を浮かべて説明した。

篤馬が立ち上がって、手本を示す様に浣腸器の嘴管を桶の中に入れ、浣腸液を吸引した。

「先ず、拙者が見本を示す。やりたい者が居ったら拙者に続いてやっても構わんぞ。」と、浣腸液で満たされた浣腸器を差上げ、門弟たちを見まわした。

門弟たちもこれから何が始まるのかと興味深々で、淫欲に濁った眼を立位に縛り上げられた姉弟に配った。

「それでは志乃殿、参るぞ！」

鈍く輝く真鍮製の筒を手に篤馬が迫った。

その篤馬の残酷な瞳の色に、志乃は^{おぞけ}怖気と呼ばひ覚まされ、全身から血の気を失い、氷のように冷えて行き、ガタガタと身体を震わせた。

それを腹中に注入されると、腸が痙攣を始め、どんなに堪えようとしても最後は、決して人に見せられぬ粗相をしてしまう事を知っていた。

「これこれ、志乃殿！そんなに尻を振るものではない・・・」

篤馬の手にする浣腸器の嘴管を避けて必死に腰を振りたてる志乃に困ったように声を上げた。

「困ったの、これでは手が出せん・・・誰か手伝ってくれ」

一人では無理だと悟った篤馬が取り囲む門弟たちに声を掛けた。

浣腸器の嘴管を避けて上下左右に尻を振り立てる美女の尻踊りを笑いながら堪能していた門弟の内から二人が腰を上げた。

篤馬に指示されて二人は左右から志乃の腰を支えた。

前屈みとなり見物する門弟たちに白い豊かな尻を着き出す姿勢を強制された。

梁から降ろされていた縄は緩く張られていたので、上体を深く折り、腰を突き出す姿勢を取ることが出来たが、今は、ピンと伸び切り志乃の動きを封じていた。

屈強な二人の男から左右から抱きすくめられ、志乃がどんなに力を入れて藻掻こうとも、蠱惑的に突き出した尻の動きを完全に抑え込んでいた。

「良いぞ！もそっと尻たぶを広げるのじゃ。」

両側から志乃の下腹を抱きしめる男達に声を掛けた。

必死に臀肉に力を込めて肛口の露出を防ごうとした志乃であったが男の力の前に易々とこじ開けられていった。

「おお！志乃殿の可愛い小菊が丸見えたで御座るぞ！」

思い切り押し広げられた臀丘の狭間に咲いた妖艶な菊の花のような開口部を目にして、男達が感極まった声を発した。

「それではお待たせした。志乃殿、参るぞ！」

と、嘴管を志乃の開け広げられた排泄口に深々と挿入した。

お銀達により日夜開発され続けた後口は浣腸器の管を易々と呑み込んでいった。

猿轡を噛まされ身動きを封じられた志乃の身体が硬直し絶望的な呻きが上がった。

刺し入れられた浣腸器の先から冷たい浣腸液がドクドクと渦を巻いて体内に流れ込んで来るのが判った。

カツンと音をさせて浣腸器の押し棒を端まで押し切り、浣腸液を残らず注入し終えた。

ズルリと嘴管を抜き取った篤馬は再び桶の中の浣腸液を吸い上げ、今度は慎之介の方に向か

った。

慎之介も全身が青ざめ恐怖に身体を震わせていた。

介助の男達も志乃の時と同様に慎之介を左右から抱きすくめ篤馬の作業を手伝った。

「おうおう！この若造も女みたいな可愛い体つきをしておるくせに、この部分は随分鍛えられておるようでは無いか！」

「全く持って美味そうな菊の蕾で御座る！」

慎之介の下腹を左右から抱え込む男達が交互に開け放たれた尻の狭間を覗き込みながら感激したような声を上げた。

屈強な男達から隠し処を覗き込まれる屈辱とこれから襲い来るであろう激痛への恐怖に猿轡を食い絞めた歯がガタガタと震えた。

「これこれ、そのように怯えるものでない。管が刺さらぬではないか。何時もやっている事であろう。姉上と同じように気持ち良く飲み下して、糞でも小便でも思い切り撒き散らすが良い。」

と、浣腸器を手にしたまま笑い掛けた。

恐怖と緊張感で肛口の筋肉が固く絞まり、容易に嘴管を受け入れない様子に、仕方ないなと、呟くと一旦浣腸器を床に置き、右手の中指にゴマ油を塗り始めた。

そして、油を塗されヌルヌルになった指先を菊座の中心の窪みに押し当てた。

篤馬の指がズルリと慎之介の後口を刺し貫いた時、ウッと呻き声を発して上体を仰け反らせた。

「どうじゃ？慎之介・・・三日も我慢させておったから糞が石の様に固まり下の方に降りて来ているでは無いか！これだけ溜まって居っては、早く楽になりたいと思う事だろう・・・」

中指を根元まで突き立て、腸内をグルグルと掻きまわす仕草に、慎之介の頬が赤く染まり出し、額には脂汗が浮かび始めた。

何度も油を補給し、その周囲に油を丹念に塗り込めたので、今度は何の抵抗も無く嘴管は吸い込まれて行った。

「どうじゃ？腹の中に入って行くのが分かるか？」

力を込めて押し棒を押し込みながら、嬉しそうに言葉を発した。

その頃、志乃は下腹を襲う強烈な刺激に苛まれていた。

何時も注ぎ込まれる微温湯なら、注入された直後は何の反応も示さず、暫く経ってからその効果を発揮するのであるが、今回腹の中の便を溶かす薬と悪人共が言った薬液は注入された

直後から顕著に働き始め、その込み上げる刺激も微温湯と比較にならない程激しいものだった。

込み上げる苦痛に、眉根を深く振り、腰をブルブルと震わせた。

「どうした、志乃殿？やけに苦しそうではないか？」

慎之介に注入を終えて、再び薬液で満たした浣腸器を手に篤馬が意地悪く問いかけた。

「ああー、お願いで御座います。このままでは志乃は粗相をしてしまいます。この縄を解いて廁を使わせて下さいませ・・・」

叫ぶように声を発したが、猿轡を嵌められ言葉にならず呻き声としか聞こえなかった。

いまや額に脂汗を滲ませ苦悶の表情を浮かべ、衆人の目も忘れたように腰をブルブル震わせ、必死に何かを哀願する志乃の声が聞こえないように、

「なに、志乃殿の腹の中に溜まっている糞は相当多いはずだ！薬が便塊を溶かしきるまでにはまだまだ時間も掛ろう。薬はまだまだ沢山残っておる。恵比寿屋が大枚を叩いて手に入れた南蛮渡りの貴重な薬じゃ・・・余さず飲み下すが良かろう・・・」

と、苦痛に身悶える尻を振り立てる妙齡な美女の姿を舌なめずりしながら見詰めた。

「誰かこの二人にやってみたい者は居るか？」

取り囲む門弟達を見まわして、薬液の満たされた浣腸器を高々と差上げた。

この扇情的な光景に劣情を滾らせていた男達が我も我もと立ち上がり、立位に縛られた二人に迫った。

篤馬から浣腸器を受け取った男達は、歓声を上げて乱暴に志乃の肛口に嘴管を突き立てた。

下腹から込み上げる激痛に苦しんでいる志乃は少しでも身体を動かせば忽ち漏らしてしまいそうであり、抵抗することも出来ず易々と嘴管を受け入れてしまった。

劣情に常軌を失った男達は、笑いさざめき大声を発しながら代わる代わる押し棒を押し込み、志乃の体内に薬液を注入していった。

浣腸器が空になると見よう見まねで桶の中の薬液を吸い上げ、慎之介の方に向かった。

こうして、姉弟は何度も何度も桶の中の薬液が完全に無くなるまで交互に注ぎ入れられていった。

浣腸液も無くなり、姉弟の様子をうかがうと、二人とも顔面蒼白となり、全身をブルブルと震わせていた。

最早まともな意識も喪失している様に見え、ただ仇の弟子たちの前で羞恥図を晒す事だけは

避けようとするかの様に固く目を閉じ歯を食い絞めて必死に耐え続けていた。

「ふむ、この様子ではもうすぐ決壊の時を迎えそうじゃな。神聖な道場を糞で汚されては困る。」

玄斎の命令で二人の足元の板張りの床には何枚もの使い古された襖紙が敷かれ、汚物を受け止めるための金盥が二つ用意された。

「良いのか、お前達？いくら美男美女から放り出す物とは言え、臭いぞ！」

篤馬が笑いながら、洗面や手洗いに使うような小ぶりの金盥を手に姉弟の尻の傍で待ち受ける門弟に声を掛けた。

二人の門弟は、脂汗を流しながら腹中から込み上げる苦痛に呻吟する姉弟の決定的瞬間を一番近くでこの目に収めたいという変態的好奇心で買って出たのだった。

流石に二人とも篤馬の助言に従って、顔面と頭には手拭いを巻き付けていたが、二つの手拭いの間のわずかに開いた隙間からは異様にぎらつく眼窩が伺えた。

「それでは志乃殿、慎之介殿用意は整って御座る。ノビノビと腹の中の臭い物を遠慮なく吐き出されれば良からう・・・」

意地悪く志乃の亀裂を指先で撫でながら命じた。

激烈な生理現象と闘いながら、秘所を弄ばれヒィヒィと悲鳴を上げ腰をくねらせた。

篤馬の遊ぶ指先は、じつとりと湿っており、股の間から滲み出た脂汗より粘り潤みの様に感じられ、ニヤッとほくそ笑んだ。

「どうじゃ？そなたの姉上はこの絵寝間がたいそうお気に入りの様子じゃ！弟御の方はどうじゃ？」と、笑いながら慎之介の股間から垂れたモノを握り締めた。

腸内を荒れ狂う激痛に苛まれ、まともな精神状態を喪失しそうになりながらも、まだ心の隅に残っていた理性が、股間の肉塊を父と母の仇の手で刺激される悔しさに呻き声を上げ、固く閉ざした瞼の間から涙が零れ落ちた。

肛口の周囲はびっしょりと汗に濡れ、その菊の花にも似た排出口は忙しなく収縮と弛緩を繰り返しており、その都度その周囲の皺をギュッと深く刻んだり広げたりしていた。

そして中心にその秘花を置く陰間も内部からの圧力と、それを押し留めようとする筋肉のせめぎ合いにより隆起と陥没を繰り返した。

もうとっくに限界を超えている筈なのに随分と持つものだと思近から観察しながら舌を巻いた。仇の門弟の前で赤恥を晒すことに対する羞恥心が最後の瞬間を押し留めているのだろうと想像した。

「エエーィ！皆が親切に準備してやっているというのに何時まで待たせるか！」

何時までも堪え続ける姉弟に、痺れを切らして何人かの門弟が立ち上がった。

そして、壁に掛けられていた竹刀を手にとると、気合諸共左右から姉弟の尻に打撃を加えた。

竹刀の痺れるような激痛が背骨を登って脳髄に駆け上がり、姉弟の咽から悲鳴がこぼれた。

「おお！始まるぞ！」

取り囲む男達からどっと歓声が上がった。

もはや緊張の限界を超えていた肛門括約筋を押し開いた汚濁の噴出は、男達が持ち添える金盥の底を激しく叩き、飛沫を上げて周囲に飛び散った。

不潔な飛沫を身に受けながらも、男達は異様に輝く目でそれを注し続けた。

奔流となって溢れ出た黄褐色の液は腸内圧力の減少に伴い徐々にその勢いを弱め、ビシャビシャと金盥の中に注ぎ込まれて行った。

愚劣な男達によって腸内に注入された浣腸液は粗方排出を終わり、金盥の半ばまで褐色の液に満たされていた。

生まれて初めて妙齡な美女の落下微塵の排泄図を目の当たりにした男達は声も上げることが出来ず、苦し気に痙攣を続ける姉弟のその部分に釘付けとなった。

暫しの静寂の後に苦し気に尻をくねらすと、ブリッと音をさせて志乃たちの肛口を扼していた石化した便が浣腸液の働きにより軟化して小片となって飛び出した。

それに続いて何度も便塊を放出し、その都度金盥の中で水が跳ねる音がした。

排泄口が口を開き羞恥の塊が吐き出される度に男達の口から狂気じみた歓声が上がった。

いまや鬼畜の道場は強烈な臭いと男達の異様な熱気に包まれていた。

お銀が気を利かせて新しい盥を手渡した。

「おおー！今度は柔らかい糞を出し始めたぞ！」

「まるで巣穴から這い出した蛇の様じゃ！」

ぽっかりと開いた肛門の奥から浣腸液を吸ってすっかり柔らかくなった便が顔を出し、そのまま一つに繋がって垂れ、持ち添える金盥の中にとぐろを巻いていった。

「二人とも随分と貯め込んでいたもので御座るな！この量はどうか！」

後から後から排出される汚物の量に驚いた声を上げた。

「それに、この臭いはどうじゃ！武士たるものがこの様に臭いものを嗅がして恥ずかしいと思わぬか！」

等と、腸の痙攣により送り出され自力では最早放出を止める事の出来ない二人を言葉でいたぶり続けた。

「どうじゃ、これだけ出せば充分じゃろう？もう盥を引き上げても良いか？」

放出の勢いが弱まり、途切れたのを見て盥を手にする男が問い掛けた。

男の言葉に志乃がブルブルと首を振った。

そして、小菊を痙攣させると、ブリッという音とともに最後の残便を吐き出した。

まるで名残を惜しむように腹の中から絞り出された様子に取り囲む男達から笑い声が上がった。

次の瞬間緊張の喪失した股間の筋肉を開いて尿が漏れ始めた。

最初はずかであったが、次第に激しさを増し、盥を捧げ持つ男が慌ててそれを受け止めた。

「嫌だね！この娘は！武士の姫で御座いと威張っていたのに、男達の目の前で糞は垂れるわ、小便は撒き散らすわでさ、恥と言うものを知らないのかね！」

その様子を眺めながらお銀が蔑む様に責めた。

お銀の言葉駈りを受けながら野卑な目を光らせる男達の目に落下微塵の醜態を示す惨めさに身悶えながらも、最早自分ではどうすることも出来ず、膀胱に残った水分を放出しながら固く嵌められた猿轡を噛み締めて号泣した。

お銀により尻の周りも綺麗に拭き取られ、汚物も片付け去られていた。

落花無残な醜態を晒した姉弟には、最早、舌を噛んで自害する恐れも無いだろうーと、固く嵌められていた猿轡も取り去られていた。

姉弟は相変わらず柿の様に天井から吊り下げられたまま、あまりの衝撃の大きさに放心したように嗚咽を続けていた。

「しっかりおしよ！これだけ恥を晒せば、逆に度胸も着いたってmondらう？恥かきついでにもう一つ恥をかいて貰おうかね・・・」

淫靡な笑みを浮かべて姉弟の顔をうかがった。

お銀の言う通り仇の門弟の前でこれだけ恥を晒せば、最早拒絶するものは無いと悲しく諦め、朦朧とする意識の中で力無く^{うなず}肯いた。

「しかし、こんなにぐったりとしていてはしょうがないね・・・こいつで喝を入れてやろうかね・・・」

天井から垂れた縄で吊り下げら、前屈みの姿勢で力無く立つ二人に挿鉢の中に入れられてい

た播粉木を手に笑みを浮かべた。

「ああ・・・それだけは・・・」

ねっとりとしたとろろの様な物を塗された播粉木に目に恐怖の色を浮かべて力無く声を発した。

「何、心配することは無いわさ・・・‘とろろいきなり卵たちまち‘と、言ってね。このとろろをたっぷりお腹の中に収めれば、元気モリモリになること請け合いだわさ・・・」

二人の怯えた様子が気に入ったように笑い掛けた。

「それじゃ門弟の皆さんのただ見ているだけじゃ手持無沙汰でしょうから、手伝って貰ってもいいですか？」と、何本もの播粉木を手にして、それを播鉢の中に差し入れた。

お銀の意図を察した門弟たちがどかどかと立位の二人の前に膝を進めた。

たっぷりにとろろを塗された播粉木を手渡ししながら、「これで二人の大事な穴の周りに塗り込んで貰いたいですよ。」

お銀から手渡された播粉木を手にした男が淫靡な薄笑いを浮かべて、「こうか？こうすれば良いのか？」と、お銀に確認を取りながら志乃の無毛の股間に播粉木を押し当てその部分に擦り付けた。

その時道場の扉を開いて何人かの人が入って来る気配がした。

「お邪魔します・・・お銀姐さん、すっかり遅くなってしまったかしら？」

道場の引き戸をガラガラと開けて三味線袋を手にした、水商売風の派手な着物に身を包んだ、けばけばしい化粧の女が姿を見せた。その後に同様の身なりの二人の女が続いた。

「御免なさいね・・・舞台が跳ねるのが予想より遅くなってしまっって・・・」

「良いのよ、桃花（ももか）姐さん、ちょうど良い頃あいよ・・・」

突然入って来た三人の女に訝し気な表情を浮かべる男達に、「折角、姉弟の芸を見て貰うのにお囃子が無いと寂しいから呼んでおいたのよ。こちらの三味線が桃花姐さん、笛が藤花（ふじか）姐さん、太鼓が梅花（うめか）姐さんよ。」と紹介した。

姉弟の艶技を盛り上げるための女と知って男達は相好を崩して声を上げ手を叩いた。

後から加わった三人の女は、天井から吊り下げられている全裸の若い男女の姿を見ても何も

気にならないのか、持参した袋から三味線や横笛や太鼓を取り出し、用意を始めた。

「どうだい？お前達、大事な所に塗り薬を塗られてカッカとして来たんじゃないかえ？」

お銀が意地悪い目で、天井から吊り下げられた姉弟に問い掛けた。

お銀に言われるまでも無く、二人とも媚薬を摺りこまれた直後から名状の出来ない搔痒感に苛まれていた。

下腹から込み上げる痒みを伴った強烈な灼熱感に姉弟は、全身にじつとりと汗を浮かべ休むことなく腰をビクビクと震わせていた。

「ほら！これを呑み込んで腹の中で捏ね回せば、痒みも消し飛ぶわさ！」

お銀が卵を手にして笑い掛けた。

ああ・・・又しても恥辱の芸を演じなければならないのか・・・それも父母の仇の道場の下卑た門弟たちの目の前で・・・お銀の手にする物を目にしながら思った。

しかし、今の自分達にとってそれは避けられない運命だと諦めに似たようなものを感じ始め、感情の無い目で白い卵をジッと見詰めた。

「ほら、門弟の皆さんに向かって股を大きく開いて大事な所を良く見て貰うんだよ」と、志乃の背を押して、生唾を呑んで見詰める男達の方に向け、大腿をパンパンと叩いて股を開けさせた。

腰をグイッと男達の方に押し出すような姿勢を取らせたので、尻の穴まで綺麗に剃毛された隠す物の無い秘部が、ぎらつく男達の目に映った。

そして其処は、塗り込められた媚薬の効果で既にテカテカと濡れ輝かっていた。

準備が整ったことを確認してお銀は最初の卵を手にとると、その大きさを観衆に見せつける様に卵を摘まんだまま頭上で大きく振った。

そのお銀の演技に併せる様に、桃花が三味線を爪弾き始め、猥褻な言葉を散りばめて即興の端唄にして歌い始めた。慣れたもので笛の藤花がそれに即興の節回しを付け、梅花が太鼓により即興の拍子を添えた。

男達の目に卵の大きさを十分焼き付けると、手にした卵を志乃の股間に突き立てようとした。志乃はイヤイヤをするように腰を振り、お銀の手を避けた。

しかし、それはお銀から教えられた演技で在り、観衆を焦らして舞台効果を高めるものであり、志乃は塗り込められた媚薬により女肉は燃え上がり、早く何かを入れて貰いたいと願うのであった。

型通り淫靡に腰を振り続けた後、ようやくお銀がその部分に卵の先端を押し当てた。

その瞬間志乃の下腹から脳髓にかけてビーンと痺れるようなものが走った。

媚薬により肉欲を掻き立てられていた志乃は、まるで飢えた獣が餌に貪りつくように隠花を大きく広げ、涎を垂らしてそれを咥え込んだ。

お銀が卵から手を離した後、志乃は女肉を駆使してそれを吸い上げて行った。

腰をビクビクと痙攣させ襲を蠢かせながら、それが体内に没して行く様子を男達は目を丸くして見続けた。

男達の劣情を掻き立てるよう、色々な隠語を散りばめた即興の謡によるお囃子が激しくなった。

「ほら！一個だけじゃ物足りないだろう？」

お銀が二個目の卵を手にした。媚薬により女体を燃え上がらせていた志乃はゾクゾクとする目でそれを見詰めた。

「そら！さっさと呑み込むんだよ！」

お銀の摘まむ卵を吸引しようと飢えた女肉を蠢かせた。

膣孔の周囲の筋肉を蠢かし肉洞の筋肉を緊張させた時、既に奥に入っている卵が意地悪くその存在を主張し、ウッと呻き声を上げ眉根を顰めた。

入口と奥の二つの卵を意識しながら、下腹をビクビクと淫靡に痙攣させながらジワジワと吸い上げて行った。

その扇情的な光景は男達の劣情を掻き立てた。

脂汗を浮かべ苦悶しながら漸く二個目の卵を体内に収めた時、

「ほら！もう一個行くよ！」

お銀が卵を手在意地悪く笑った。

「ああ・・・もう・・・」

お銀の手にする卵を潤んだ目で見つめながら力無く口にした。

日頃の練習では二個の卵を呑み込むことは度々あったが、三個の卵を体内に収めた経験は無かった。膣内は既に二個の卵で一杯で三個目を収める余裕は無い様に感じられた。

「つべこべ言って無いでサッサと呑み込むんだよ！」

お銀は表情を荒げて、割れ口に卵をグイグイと押し当てた。

お銀の剣幕に涙を吸いながら、膣孔を押し広げ三個目の卵を吸引する作業を開始した。

肉洞の蠕動運動に既に膣内に収められた二個の卵がゴリゴリと擦れ合った。

「ほら、入って行くじゃないか・・・」

手を離した後、スルスルと体内に卵が消えて行く様子に嬉しそうに声を上げた。

既に志乃の膣内は二個の卵に占有されており、新たに入り込む余地は無かった。

「おや？まだ少し端が見えているじゃないか・・・」

鮮やかな茜色の肉の蕾の中心から白い卵の端が姿を覗かせているのを意地悪く指摘した。

そして、指先でグイグイと内部に押し込もうとした。

「ああ・・・痛い・・・もうお許してください・・・」

女の祠の柔肉に硬い卵の殻を押し込まれる苦痛に涙を浮かべて下賤な女に哀願した。

「全くしょうがないね！・・・前が一杯になったら今度は後ろに行くよ！今度は慎之介も一緒にやるんだよ！」

と、姉の志乃と同じように縄で天井から吊られていた慎之介の身体を回してお尻を淫靡な期待を込めてギラギラした視線を送る門弟たちの方に向けようとした。

「お願いします！このような恥ずかしいことを慎之介にやらせないで！」

年若い弟が愚劣な男達の目の前で肛門を駆使した淫らな芸をさせられるのかと思うと、堪らず涙ながらに声を掛けた。

「うるさいよ！こんな恥かき芸が嫌だって言うのかい？そりゃ、あんた達は川田藩では名の通った由緒ある大家の若様と姫様だったかも知れないが、今じゃ犬猫以下の存在なんだよ！」

と、非情な言葉を投げ付けた。

お銀にしてみれば手の届かない所に似た高貴な姉弟に嗜虐の限りを尽くす快感に酔いしれたように意地の悪い目で姉弟を睨みつけた。

「さあ！お前もお尻をこっちに向けるんだよ！」と、慎之介と並んで志乃の尻を向けさせた。

淫欲に狂った男達の目に、白く輝くようなきめ細かい肌にまるで熟し切った桃の様なまろやかな円弧を描く左右に良く張った双臀と男にしては色白ではあるが筋肉の浮かぶ双臀が並んでいた。

「今度は二人同時なのでね・・・お客様の中で手伝って下さる方は居ませんか？この卵をケツの穴に押し当てただけで良いですよ・・・」

と、涎を垂らしているのも気付かない男達に声を掛けた。

男達は小躍りして姉弟に群がった。

お銀から卵を受け取ると、「こうすれば良いのか？」と菊座の窪みにグリグリと押し当てた。

「うう・・・」

「ああ・・・もう・・・」

と、咽び泣くような悲鳴が上がった。

「うるさいね！お客様の下さった卵じゃないか！サッサと腹の中に入れるんだよ！」

熱く熱を帯びた姉弟の菊花の蕾がムクムクと膨らみ、大きく開花させ始めると押し当てた卵がスルスルと吸い上げられ始めた。

その様子に男達は目を見張った。

志乃は既に前に二個半の卵を呑み込んでおり、更に後口から送り込まれる卵が薄い膜一枚を挟んで前の卵と接し、堪らない刺激が込み上げ腰を揺さぶった。

その官能的な下腹の動きに男達の淫欲がメラメラと燃え上がった。

慎之介も卵が背後から前立腺を圧迫し、名状出来ない刺激に呻き声を上げた。

「ほほ・・・すっかり腹の中に収めたじゃないか・・・」

肛口の中に姿を消したことを確認したお銀は、

「呑み込んだものを出してごらん！鶏らしく鳴きながら卵を産むんだよ！」

と、命令した。

武士としての、そして人としての尊厳を踏みにじるお銀の命令に号泣する姉弟であったが、

「泣けと言ってるんじゃないよ！鳴きまねをしろと言ってるんだよ！」と、手にした竹刀で二人を打ち続けた。

哀れな姉弟は涙を吸いながら鳴きまねをして、男達の持ち添える箆の中に卵を産み落とそうと必死の努力を始めた。

ギラギラする目で睨みつける親の仇の門弟たちの前で鶏の鳴きまねをして卵を産むという屈辱の極みの芸を演じ終えた直後、姉弟は堪え切れず激しく号泣し始めた。

自分にとって雲の上の存在の姉弟に惨めな珍芸を演じさせた喜びに快哉の笑みを満面に浮かべたお銀は、次に、手にした竹刀で激しく姉弟を打ち付け、「何を泣いているんだい！サッサと次の卵を産まないか！」と、どなりつけた。

お銀の剣幕に、涙を吸いながらたどたどしく鶏の鳴きまねを続け、腰を振り続けた。

前と後ろの柔らかな肉の輪を押し広げ、卵を産み落とす様子に箆を手にする男達は吸い寄せられるように無毛の股間に間近に顔を寄せ見詰め続けた。

「全く頭の悪い子達だね！もっと色っぽく腰を振りながら産み落とす様に何時も言っているだろう？」と、演技が悪いと竹刀を振るった。

全ての卵を産み終え、全身汗に塗れハアハアと肩で息をする姉弟に、「もう一度お客様に卵を入れて頂くだよ！さあ！早くお願いしないか！」

と、姉弟に休みを与える優しさも無く冷たく命令した。

お銀の命令に逆らえないことを思い知らされている二人は、

「私達姉弟今日は朝から何も食べてなくて、お腹が空いているのです。お客様の手で卵を食べさせて下さいな・・・」と、涙に詰まりながらお銀から仕込まれたセリフを口にした。

「そうかい、そうかい、それは辛かったね・・・今食べさせて上げるからうんと食べるんだよ・・・」と、興に乗った男達が気味の悪い猫撫で声で卵を押し当てた。

「此奴らこんな澄ました貌をしているくせに本当はこんな事するのが好きなんですよ！何時も目を離すと自分で卵を使って遊んでいるんですよ！」

と、無理やり卵を呑み込ませる侍たちに笑い掛けた。

「それが証拠に・・・」

と、志乃の淫門の周囲がじわじわと湿って来たのを指差し、慎之介の肉茎がムクムクと起立し始めたことを示した。

二人とも浅ましい姿を晒すまいと心に決めていたが、前後の穴から襲い来る淫靡な激情と腸腔から前立腺を押し上げる怪しげな淫情に心を裏切って身体を感じ始めるのだった。

「ほほう・・・これは・・・女の淫水に焼けて黒々としておるわ！」

「お主、その年で何人の女とまぐわって来たのだ？長さといい太さといい見事な大松茸ではないか？」

二個の卵を腸腔に収め、思わず勃起させてしまった男のモノを間近から繁々と見詰め男達が感嘆の声を発した。

「さあ、鳴きながら卵を産み落とすんだよ！」再びお銀が命令した。

男達はいれ替わり立ち代わり、姉弟の下腹に卵を押し当てた。

全身の筋肉を駆使した苦しい苦しい卵芸が繰り返された。

そして、それは単なる肉体的疲労だけでは無く、二人の官能もいやが上にも高めていった。何度も卵産みの芸を繰り返させられ、二人がそれを求めている事に気付いたお銀は、

「お前達イキたいんだろ？・・・良いだろう、イカせてあげるよ・・・」と、淫靡な笑みを浮かべた。

「お客さんのちょっと手伝って下さいな。今度は二、三個卵を呑み込ませた後、手を離さず

に指でチョンチョンと穴の中に押し込んで下さいな・・・同時に慎之介の前を摩って上げて下さいな・・・」

「こうすれば良いのか？」

と、男達はお銀から指示された通り、秘孔中に何個かの卵を押し込むとそのまま指先も柔肉の中にめり込ませ、調子を付けてグイグイと押し上げた。

前後の穴から掻き上げる様に刺激を受け、志乃が堪らず甘い呻き声を漏らした。

慎之介も後口から妖しく卵を突き上げられながら、陰茎を摩り上げられ全身が紅潮した。

姉弟が絶頂を迎えるのも後僅かだと察した男達は柔肉の奥に差し入れた指の動きを速め、擦過の速度を速めた。

イイーと、一声呻き声が上がると志乃の股間から激しい水飛沫が噴出した。

グッと呻き声を上げ目が裏返った慎之介の男根の先端からは夥しい樹液が発射された。

「この女、汐を吹いてイキおったわ！」

いまだに股間から雫を垂れさせる姉の姿を見て感嘆した声を上げた。

「本当は舞台で伊ッてしまうなんて芸人として有るまじき事なんですけどね・・・まだ修行中なんでお許し下さいね。」

と、絶頂の余韻に身体を痙攣させる姉弟を背に男達に向かってペコリと頭を下げた。

「さあ、次は姉弟での絡みをお見せするんだよ！」

肉体を駆使した猥褻な芸を下卑た男達の目の前で演じ続け、精神的にも肉体的にも打ちのめされて、激しく肩で息を吐きながら、上体を折り曲げ縄に吊るされるようにぐったりとしていた姉弟に対して非情な言葉を投げ付けた。

冷酷な命令に驚いた表情を浮かべて、潤んだ目で見詰める志乃に対して、お銀は、「おや？何か文句が有るのかい？本来なら珍芸は、卵産みだけじゃなくて、銭すくいや、煙管芸や、吹き矢や色々披露しなくちゃいけないんだよ・・・お前たちはまだ卵芸しか出来ないんだから、せめて白黒の絡みをお見せするしかないじゃないか！」

と、冷酷な光を目に浮かべて決め付けるように言った。

「ああ・・・もうお許してください」

上体を縄に吊るされた姿勢でお銀の顔を見詰め、残酷な女に対して嗚咽しながら哀願した。志乃の疲労困憊した貌を見ながら、「疲れてもう体が動かないと言うのかい？そんなものもう一度トロロ汁を味わえば一遍に消し飛んでしまうわさ・・・」と、淫靡な炎をみなぎらせて

背後に控える男達に目配せした。

男達は媚薬の入った挿鉢の中に入れられた挿粉木を手にして獲物を前にした肉食獣のように舌なめずりをしていた。

「さあ、皆さん、此奴らにもう一度トロロをご馳走してあげて下さいな。」

お銀の言葉を受けて男達は歓声を上げると手に手に媚薬を塗した挿粉木を持ち、姉弟に襲い掛かった。

ヒーと悲鳴を上げて慎之介が身体を悶えさせた。

「アア・・・もうお許し下さい・・・」と、淫欲に狂った獣じみた男達に哀願したが、男達はそんな姉弟の哀切の言葉を見做して、それよりも姉弟の悲痛な言葉に油を注がれた様に、慎之介の男根といわずケツメドといわず媚薬を摺りこみ、志乃の二つの穴に挿粉木を埋め込ませた。

「ああ・・・痒い・・・」

再び催淫薬が効果を発揮し始め二人は身体をモジモジさせ始めた。

お銀の調合した媚薬は麻薬の様な効果を発揮し、肉体的には消耗しきっている筈なのに、それを打ち消す様に内側から肉欲を求めて何かが蠢きだすのだった。

「ほら！言っただろ。また元気を取り戻したじゃないか！」

姉弟の様子にお銀は手を叩いて笑った。

天井から吊るされる姉弟の間に立ったお銀は、顔を紅潮させ腰を震わせる姉弟の立ち位置を調整して、志乃の背後に慎之介を立たせた。

「さあ、二人とも楽にしてあげるよ！・・・慎之介は痒い痒いチン◯◯を姉のケツメドに突き立てるんだよ！志乃は痒くて仕方の無いケツの穴を慎之介の太い挿粉木で搔いてもらいな！そうすれば今の苦しさをすっかり忘れて楽になるよ！」

突然のお銀の言葉に姉弟は声を失った。

下劣な男達のギラギラする視線に囲まれながら、実の姉弟で交わるという背徳行為を演じる、更に男女の正常な性器による交接では無く、不浄な排泄器官を使つての交接を見せるという、二重の背徳行為に二人は青ざめた。

「何だよ？お◯◯コとお◯◯チンで繋がると思っていたのかい？そんなもの此処の皆さまは見飽きているよ！姉弟で尻穴で繋がるから見世物になるんじゃないか！」

と、哀切の表情を浮かべる姉弟に投げつけるように言葉を掛けた。

「さあ！早く始めないか！」

切なげに腰をモジモジさせながらも次に進まない姉弟に業を煮やした様に、お銀は二人の尻を手にした竹刀で殴り続けた。

「慎之介・・・慎之介のモノで姉を突くのです・・・」

体内深く塗り込まれた媚薬が強烈な効果を発揮し、嵐の様に官能を奮い立て最早耐えることは不可能と思われた。

そして、それは慎之介も同じ事だろうと感じた。

抵抗が無駄であることを思い知らされた志乃は、慎之介の方を振り返り、悲し気な目で慎之介を見詰めて小さな声で告げた。

「姉上！」

涙を浮かべた姉の目で見つめられ、慎之介が悲痛な声を上げた。

「慎之介・・・私たちは、もう人では無いのです・・・姉と供に堕ちる所まで堕ちて・・・」

そう言い終わるとガックリと頭を垂れた志乃の目から涙が零れ落ちた。

媚薬の効果で慎之介の男のモノは、本人の意識を裏切って、熱く熱をもって、これ以上無いほど硬化していた。

心ではどんなにそれを嫌悪しても、ドクドクと脈打つ肉塊は目の前の白い女体への侵入を狂おしいほど求めていた。

身体を天井から縄で吊り下げられたまま、慎之介は志乃との間合いをつめた。

慎之介の^{のぼ}上せた体温をすぐ背中に感じた時、さっと乱れた長い髪を振り払い、傍で白い歯をこぼして面白そうに二人の様子を眺めていた篤馬を涙で塗れる目で睨みつけて、「柏木様、私たち姉弟を此処まで堕としてさぞご満足で御座いましょう・・・」と、呪うように声を掛けた。

篤馬は、志乃の恨みがましい言葉にも表情を変えず、

「どれ・・・折角なら盲目の方が感じ方も強くなるであろう」

黒い帯を手にして、二人に目隠しをした。

それは志乃の股間を覆っていた黒褌を裂いた布地であった。

「どうじゃ？姐御の香しい匂いも伝わって来るであろう・・・」

と、慎之介の両眼を覆いながら嘯いた。

「こうしておけば周囲の視線も気にならず、二人心行くまで楽しめるであろう・・・さあ！始

めるのじゃ！」と、笑い声を上げると二人の尻を平手で叩いた。

盲目のまま慎之介の身体が志乃に寄り添い興奮に昂った身体を密着させた。

不意に熱く滾った肉塊が志乃の双臀に触れた途端、ああ・・・慎之介と、身体をブルッと震わせ小さく声が上がった。

「姉上、お許し下さい！」

涙交じりの声を上げながらも、媚薬に追い立てられた肉欲に歯が立たなくなった慎之介は姉の臀部を尖ったモノで突き続けた。

しかし、自らのモノを後口に突き立てた経験は無く、ましてや目隠しをされ縄に吊られた不自由な態勢のため、その周辺を熱を帯びた先端で撫でまわすだけで、うまく挿入できずにいた。

志乃も今は一切の人間性を捨て媚薬の影響で疼く肛門に熱い男のモノを埋めて貰いたく、慎之介の肉塊を求めて腰を振り立てた。

「ほらほら、まだ入らないのかい？本当にだらしのない子達だね・・・」

名門の武家の姉弟をこれ程まで貶める事が出来たのが嬉しくて仕方がない様に手を叩きながらゲラゲラと笑い上げた。

二人とも天井から縄で吊るされたまま、汗まみれになって、危なっかしく腰を振り立て合う浅ましくも滑稽な様子に、酒を酌み交わしあう男達からも笑い声が上がった。

息の合った三人の女が奏でる淫靡なお囃子の中で、姉弟はハアハアと息を上げ汗に塗れながら天井から吊り下げられたまま卑猥に腰を振り合っていた。

二人の周囲で酒を酌み交わし痴態を眺めている門弟たちは、猥褻なお囃子の中で汗まみれになり、一つに繋がろうと腰を振り立てる姉弟の滑稽な様子に口から泡を浮かべて笑いさざめいた。

いまや悪鬼達から強制された為と言うより、一刻も早く襲い来る魔物じみた苦しみから逃れる為、慎之介は姉の股間を文字通りメクラめっぽう突き立てた。

硬化した慎之介の長い竿が、お銀の指示した後ろの穴では無く、開け広げられた無毛の股間を通して、前方の淫裂を擦過した時、そこにも媚薬を塗り込められ神経が過敏になっていたため、ガクンと脳髄に激しくそして甘美な刺激が走った。

互いに目の見えぬまま、逆にその部分の刺激だけが媚薬により増幅され、痺れるような刺激

が脳髓を駆け抜け、ああ・・慎之介、もっと下です！とか、もっと上ですとか、呻くように声を上げて、自らも慎之介のモノを受け入れようと必死に尻をモジつかせる姉弟の様子に肉欲に燃えた男達が卑猥な笑い声を立て、もっと上だとか左だとかはやし立てて大声を上げた。そして、肉欲の炎に燃える姉弟に舌なめずりしながら、粘つく視線を必死になって猥褻な行為を演じる姉弟に送った。

卑猥なお囃子や男達の熱気を帯びた視線も忘れたように弟のモノをせがんでいた志乃が不意に尻の動きを止めると、慎之介！動かないで！と弟を制した。

姉の声に腰の動きを止めた慎之介に対して、志乃が静かに双臀を動かした。

硬く尖った肉筆の先端を意識して、それをきめ細かい皮膚に感じながら、双臀をゆっくりと移動させた。

姉の滑らかな尻の皮膚をその先端に感じ、腰を動かし擦過する間中ビリビリと疼くような刺激が襲い続けた。

ふっくらと柔らかく盛り上がった肉尻を熱く燃えた肉筆がなぞり、先端から滲み出た透明の粘液が白い丘に筋を描いた。

アッと志乃の口から小さく声が上がった。

慎之介も暗闇の中で姉の菊の座の窪みに自らの鰓の張った肉塊の先端がすっぽりと納まった事を感じた。

肛口から発する熱い熱気が龟头をジリジリと炙った。

志乃も慎之介の怒張した熱いモノを不浄の窪みに感じて息を止めた。

そして今こそ、お銀から鍛えられた肛門の筋肉を駆使して卑芸を披露する時だと決心した。肉茎の先端を柔らかく肉の窪みに押し当てたまま、志乃の肛口がジワジワと蠢き始めたのをジッと身動きせず姉に身をゆだねていた慎之介が感じた。

「そうだよ・・何時ものように尻の穴で卵を呑み込む時の様に尻の穴を開いて呑み込んで行けば良いのさ・・なあに・・卵と比べれば細いし楽なもんだろう・・」

傍で二人の様子を見守っていたお銀が、二人に近づき密着した部分を確認して、優しく囁くように声を掛けた。

お銀の言葉に淫風を煽られた様に、喘ぎ声を上げてビクビクと双臀を蠢かせる志乃の後口の拡張と収縮の動きは大きく激しくなり、慎之介の膨張した物を奥へ奥へと誘う様に蠢き続けた。

今は全ての思念を捨て去ったように、ハアハアと息を荒げ額にびっしりと汗を浮かべながら、

熱い男のモノを腸内に吸い込むべく双臀周りの筋肉を駆使することに集中した。

暗黒の中で、押し当てた亀頭を強く締上げ、吸引を始めた感触に慎之介か恐ろしいものを感じた。そして、姉の秘奥にこんな能力が存在していたことを思い知らされると、何時も接していた優しく気高い姉では無く、何か恐ろしい淫婦に咥えられているような恐怖を感じた。野卑な男達の視線の中で慎之介の鰓の張った亀頭部は半分ほど志乃の内部に消えていた。お囃子の歌が一層熱を込めて激しくなった。

ハアハアと息を荒げ、慎之介の亀頭部を半分ほど咥え込んだ志乃は、体を動かしても最早外れることは無いだろうと、「慎之介！其処です！姉を思い切り突き上げるのです！」と、悲鳴のような声を上げ命じた。

「アア・・・痛い・・・」

一気に突き上げる様に指示したが、流石に慎之介は姉の菊花に自らの陰茎を挿入することに躊躇いゆっくりと腰を進めたため次第に太くなる亀頭部によりその部分は広がり切り姉に苦痛を与えていた。

淫鬼のごとき男女に絶え間なくいたぶられ鍛えらた結果、慎之介のその肉塊は同世代の男のモノとは比較にならない程、淫水に黒く染まり太く長く育っていた。

その傘の張った亀頭部を中途半端に突き立てられ、肛口が限界まで押し広げら苦痛を与えていたのだった。

「姉上！」

自分の分身が姉に苦痛を与えている事を知った慎之介が心配して声を掛けた。

「慎之介！構いません！一気に姉を突きたてるのです！」

後口に男のモノを食い込まれる苦痛に眉根を顰めながら声を発した。

「姉上！」

「アッ！」

姉の声に励まされ、一気に腰を突き立てズルッと一気に付け根まで姉の腸内に押し込んだ。亀頭部の最も太くなる所が一瞬伸び切った筋肉の輪を通過する時に溜まらず声が上がった。今や、弟の太い肉塊が姉の腸内に埋没し、姉弟は身体を悶えさせながらグググと呻くように声を上げていた。

以前、意識の朦朧とする中で姉の前の穴に挿入したことはあったが、女肉の濡れた柔らかな洞穴と違い、何処か乾いた滑々する肉洞と感じた。

そして慎之介の肉竿を痛いほど締め付けていた。

目隠しをされているため、その部分から伝わる感触が大きく知覚されていた。

「いや、お見事お見事！二人とも天井から吊られたまま見事に貫かれたではないか！」

篤馬が笑い声を上げて手を叩きながら、深く結合したままガックリと肩に頭を押し付け荒い息を吐く二人に近寄った。

そして、結合の様子を自分の目で見せるため、二人の目隠しを外した。

視覚を取り戻した慎之介の視野に深々と姉の白い臀部を貫く自らの下腹が目に入り、ああ・・姉上、と涙声を上げた。

「ほら！もっと腰を使わねば媚薬の効果は現れんであろう！」

腰を使うように静止したままの慎之介の尻を叩いた。

篤馬の命に従い恐る恐るという感じで腰を使い始めた。

慎之介の腰づかいに志乃もウウッと呻き声を発した。

篤馬達が指摘したように、腰を前後させ、互いの粘膜が摩擦する都度目眩く快感が二人の脳髓を襲った。

その悪魔じみた快感を求めていつしか姉弟は腰を激しく前後に動かし始めた。

今は、周囲の目も忘れ果て二人はその部分から発する妖しい快美感に吞まれ汗を吹き飛ばしながら腰を振るわせ合うのだった。

三人のお囃子の声も一層下劣で激しいものとなった。

汗まみれになり互いに尻と下腹をぶつけ合っている二人の様子を眺めながら、お銀は「本当にお待たせ様でしたね。この女の前と男の後を使っても良ござんすよ。」と、目をランランと輝かせ涎を垂らして見つめる周囲の門弟たちに声を掛けた。

この時を待ち兼ねていた門弟たちは一斉に立ち上がり志乃の前に列を作り、男色を好む男達は慎之介の後に列を作った。

酒臭い息を吐く髭面の男を目の前にして、「ああ・・お許してください・・」と、力無く哀願した。

「何を言っているんだい！媚薬で前の方もビンビンに感じているんだろう？そのお侍のりっぱなモノで搔いてもらえば天にも昇る気持ちになるよ！」と、傍で見ていたお銀が立位のまま前後の穴に男のモノを受け入れる武家の姫の凄惨な姿を思い描いて淫靡な笑い声を上げた。

「アアッ！嫌でございます！」縄で固く縛められ抵抗を封じられ、後ろから弟のモノを突き立てられながら、更に前から巨大な男のモノを押し当てられ、悲鳴を上げた。

「何を嫌がっておる。前からもこんなに涎を垂らしおって！お前の股の間から零れ落ちた露で床が濡れておるぞ！」

男は笑いながら縄で縊り出された柔らかな乳房を両手で握り締め愛撫しながら、怒張の先端で濡れそぼった陰口部をなぞった。

そして志乃の哀願を無視してグイッと腰を進め深く侵入させた。

前後の穴を男のモノで埋められ、悲鳴が上がった。

一方、慎之介も後ろから男に突き立てられ、「アアッ！お許し下さい！」と、女の様な悲鳴を上げて尻を悶えさせた。

そんな慎之介の身悶えぶりに残酷性を掻き立てられた男は、一層深く尻肉の狭間に突き立てた。

メリメリと後口を割って侵入して来る男のモノの大きさに、慎之介の目が裏返った。

今や、男と女の四重連結が完成していた。

前を姉の媚肉に突き立て、後ろから菊花を襲われる目眩く快美感に思わず姉の腸内に精を発した。

男達も散々焦らされた後であったので、性気は限界まで達しており、慎之介と呼応するように精を漏らした。

前後する二人の男から同時に射精され志乃は思わず身体をくねらせた。

悲鳴を上げようとするのを髭ずらの男が、酒臭い口で覆った。

新たに加わった二人の門弟は更なる快感を貪ろうと激しく腰を振り立てた。

前後から二人の男に突き上げられ、姉弟から絶望的な声が上がった。

お囃子の声が激しく道場内にこだました。

「こちらに居る桃花姐さん達は男のモノを入れながらお囃子が出来るんですよ。お待ちの方は一度試したらどうですか？」

焦れた顔で順番を待つ男達に紹介した。

喜色を浮かべた男達は、演奏する三人を前に蹴倒し、着物の裾を持ち上げて、尻を丸出しにした。

お銀の言葉通り、桃花達は男達の下腹に馬乗りになり、男達の股間に尻を預けたまま、時々

調子が外れることはあっても卑猥なお囃子を続けた。

男達はムキになって、平然とお囃子を続ける女達に勝負を挑むよう、腰に載せ上げた女達の前の穴や後ろの穴を激しく突き続けた。

女達も額に汗を浮かべ、苦し気に顔を歪めながら男達の挑戦を受け続けた。

一つに繋がっていた姉弟の間に二人の男が立ち、二人を引き離す様に押しのけた。

そして、二人を天井から吊るしていた縄も解かれた。

実の姉弟による禁断の交わりから解放されてホッとしたのもつかの間、淫欲に狂った男達は、二人に群がり、道場の床に押し倒した。

「何だ、これは！弟の竿の形のままポツカリと口を開けておるではないか！」

慎之介から引き離され、いまだ紅色の内部をまざまざと晒す志乃の菊座の様子を目にして笑い声を上げた。

そして開け放たれたうつろの中に自らの肉塊を収めて行った。

床に横たわる志乃の前後には二人の門弟が腰を密着させ、快楽を貪っていた。

「ほら、これを口に咥えるんだ！」

そして、三人目の男が志乃の頭を押さえ、自らの太股の間に押し付け口唇による奉仕を強要していた。

「そうだ！舌を出して嘗めるんだ！」

一々細かく指示しながら志乃に淫らな口技を強要した。

舌と唇による愛技に満足した男は、次に志乃の口腔内に深く肉塊を突き入れた。

「そうだ、そうだ、良いぞ！舌を使って全体を嘗めまわすのだ！」

男は迫りくる快感に声を掠れさせながら腰を前後に振った。

突然ウッ！と呻き声を上げると腰をビクビクと痙攣させた。

「ほら！せっかく旦那が下さった物だよ！溢したりせず全部呑み込むんだよ！」

傍で見守っていたお銀が励ますように志乃に声を掛けた。

激しい性交に意識朦朧となりながらも、お銀の言葉に暗示を掛けられた様に、喉を鳴らして男が口内に放出したモノを飲み下した。

男達は何人も交代しながら様々な体位を取らせ、前後の快楽源を食った。

或る時は床に横たわる男の上にうつ伏せの姿勢で前から突き立てられ、更に後ろの穴を別の

男から責められたり、男の上に背を預け後ろから突き立てられながら、前に回った男から前の穴を突き立てられたり、横抱きの姿勢で前後から責められた。

そして、その間も三人目の男が口腔内に肉塊を押し込んだ。

三人の男達は、それぞれ快楽を貪り、思いの丈を志乃の体内に残していった。

慎之介も床に押し倒されたまま、後ろから突き立てられ、口には生臭い男のモノを突き入れられていた。

順番を待つ男達が慎之介の隆起したモノを面白半分に弄んだ。

男達に責め立てられ、何も分からなくなった慎之介は男達から陰茎を搔き立てられ、激しく精を発射し続けた。

床には慎之介の漏らした粘っこい樹液が池を作っていた。

お囃子の女達も今は全裸となって、手にしていた楽器を投げ捨て、全裸の男達と汗に塗れて、甘美な声を発しながら激しく交わっていた。

男と女の淫風に煽られ男色好みの門弟同士で、道場の片隅で抱き合う者も現れ始めた。

淫鬼の祝祭の様に篤馬も交じって男女の媚肉を狂ったように食った。

剣術道場内に吹き荒れる、男女の発する生臭い淫臭に煽られ性本能をかき立てられたのか、薄っすらと顔を赤らめてお銀が玄斎に色っぽい流し目を送ると、そっと玄斎の着物の裾を引いた。

お世辞にも美人と言えないお銀から潤んだ目で見つめられた玄斎は、「後にしておこう・・・」と、一言口にすると裾を払った。

<第二部完>